
正しい魔術の使い方！

市村鉄之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい魔術の使い方！

【Nコード】

N8542P

【作者名】

市村鉄之助

【あらすじ】

魔術学院新米教師サミュエルの授業は酷くつまらない。そんな授業を必死で我慢しながら受けている生徒はメリル。彼女は英雄の娘だった。

そんな二人が出会ったことで物語は進んでいきます。

魔術犯罪者、異形の怪物、魔族、そして世界の謎。

サミュエルとメリル、そしてその仲間たちが色々な事件に遭遇し、そして物語を紡いでいきます！

0

「僕が小等部の担任ですか？」（前書き）

「正しい魔法の使い方」を大幅に修正してしましたら、大分違う話になってしまいましたので新しい話として投稿させていただきました。

設定など少し被ってはいますが、全体的には大きく違いますので、こちらの物語を楽しんでいただけたらと思います。

0 「僕が小等部の担任ですか？」

終わった。何もかも終わってしまった。

復讐も、国の為にという名目の名の殺しも、すべて終わってしまった。

きっとこの国は良くなるだろう。いや、もう既に少しずつ良くなってきた。

数年前、この国を巢食う腐った貴族たちを殺すことを決意した王ガイセインと共に何年も掛けて貴族を、犯罪者を、それに連なる者を殺してきた。

無慈悲に、無残に、一切の容赦なく。

それが終わってしまった。

喜ばしいことだと思う。

同時に、目的がなくなってしまった。

——そう、生きていく目的が……

これから何をしたらいいのだろうか？

分からない、解らない、判らない、わからない。

どうしようもなく困惑していた俺に王は言った。

「お前は教師になりたかったと言っていたな。母親が教師だったから自分もいつか国が平和になったら教師になりたい、と」

確かにそんなことを言った記憶がある。初めて王と会った時の会話の時に。よくまあ、八年近くも前のことをよく覚えていたと思う。

「教師——とは少しは違うが、どうせやりたいこともないだろう？
紹介してやるから魔術学院で色々教えてこい」

そう言つて、王は笑う。

相変わらず上から目線で、だけどどこか見守るような瞳がいつも
気に障っていた。

「お前はある意味で最強の魔術師となった。だが、人として色々
失つちまった。まあ、俺のせいだな」

ガイセインは自嘲するように笑う。

「だから、お前は子供たちに教えてもらつてこい。もつとも、お前
とそう歳の変わらん子供ばかりだが、お前が捨てちまったもの、捨
てなければいけなかったもの、捨てたくなかったもの、それらを生
徒と接しながら少しずつ取り戻して来い」

教師を勤めるのはその料金みたいなものだと言う。

「俺は国のために多くの命を奪った。後悔は一切していないが、そ
れでももつと良い手がなかったかと思わない日はない。お前に関し
てもそうだ。お前みたいな子供を人殺しの道具に育てて、其の多く
の命を奪わせた」

だが、それは自分自身が臨んだことでもある。

「だから償いの意味も込めて、昔の夢を叶える。そして、これから
を生きる子供たちに俺たちみたいな馬鹿をさせないように、少しで
も手助けしてやれ」

その言葉に俺は、少し躊躇ってから頷いた。

「ああ、それでいい。なあ、サミー、この国はマシになったか？」

気を抜いたらすぐに寝てしまいそう、メルル・ウェラーは襲い掛かってくる睡魔と必死に戦っていた。

不真面目な生徒だと思われるかもしれないが、実はそうでもない。彼女は真面目な生徒だ。

問題があるのは、現在受けている授業の方にある。

三十人いるクラスメイトのほとんどが眠ってしまっている中で、起きているだけでも偉業だと思う。つまり、それだけつまらないのだ、この授業は。

（うん、つまり授業が……じゃなくて、先生が悪い。寝ちやおうかな）

寝ても注意された生徒はいない。だったら自分もいいかなあ、そんな考えが頭をよぎる。

今、授業をしている教師は生徒に興味がないのか、それとも別な理由があるのか注意はもちろん、叱ったりすることがない。

教師として日が浅いせいだろうか、それとも「例の噂」が本当なのだろうか？

そんなことを考えながら、メルルはふと思う。もう少ししっかりしていればカッコいいのにと。

彼女は自分が何を考えているのか気付くと慌ててブンブンと首を振るう。

（わ、私ったら、何を考えてるのよ！）

確かに、教壇に立つ教師——サミュエル・ルードはカッコいいと言えるだろう。

うつすらと青みが掛かった黒髪に、長身で足も長い。歳も十八歳と若く、接すると意外に物腰も柔らかだ。

もっとも授業がつまらないという欠点もあるが。

（やっぱり寝ちゃおうかな……）

せつかく、他のことに意識が向いていたおかげで眠気が遠ざかってくれていたのだが、また睡魔が襲ってきてしまったメリルは必死に首を振って考えを改める。

（駄目、駄目！ そうじゃなくてもくだらない色眼鏡で見られるのに……）

少々複雑な自分は授業で居眠りしたくらいでも噂されてしまう。そんなことを思い出すと、少し憂鬱になってしまいそうになる。

「……君、……メリル・ウェラー君」

「は、はいっ！」

いつの間にか指されていたようだ、慌てて立ち上がるメリル。ガタンと椅子が大きな音を立てたので、数人の生徒が音に反応して顔を上げた。

「質問を聞いていましたか？」

「えっと、いえ、その、ごめんなさい。ぼーっとしていました」

「そうですか……ではもう一度言います。対魔術師対策として、もつとも有効な対策はなんでしょうか？ これは最初のおさらいです」

特に怒るわけでもなく、サミュエル・ルードは続けた。

怒られなかったことにホッとしつつ、メリルは答える。

「えっと、武器ですよね」

「はい、正解です。魔術は誰にでも使えるものではありませんが、魔術師は誰にでも倒すことができます。言い方を少々荒っぽくしてしまうと、魔術師は誰にでも殺すことができます。それこそ、尖った鉛筆一本で」

——魔術。

それは神代の時代から、生まれながらに魔力を有する者が使用できる特権である。

だが、その特権はかつて貴族に多くあり、一般人——言い方を悪くすれば庶民にはなかった。しかし、それも昔の話だ。

現在では一般人でも魔力を有する者は多く存在し、魔術を仕えなくても魔道具という魔力によって使用することが可能な道具を使える者はもう珍しくなかった。

「先生！ ですが、魔術を使えば武器で倒されることはありません！」

一人の少女が反論する。

だが、これが世間一般の考えだ。

魔術師の敵は魔術師であり、または魔物や魔族などという存在だ。魔術の使えない者に魔術師が敗れることはないという考えは世界的に共通のルールである。

「ですが、魔術が使えない状況になってしまった場合はどうでしょう？ 例えば、魔術の使いすぎで魔力が空になってしまったりすれば、君たちはただの人です」

もつともな意見だが、それでも生徒は納得しないだろう。

そもそも魔術師に一般人が挑もうということが前提としておかしいのだ。

かつて、この国——ランジェスター王国において、多くの貴族たちが魔術師として国を好き放題にしていた。

歴代の王たちは王であって王でない、そんな飾りのような存在だった。

だが、現在の王であるガイセイン・チェスターは腐敗した国を立て直す為に、多くの貴族を殺し、親族すらも殺した。

もつとも、国は回復しつつあるが、かつての貴族たちの影響は残っていて、その一つが魔術師という存在の特別視だ。近年、収まりを見せているのだが、貴族の家系にはまだそう思う者が多く、また一般の出自の者も同じである。

「ですが——」

言い返された少女は、それでもまだ言い返そうとするが、同時に授業終了の鐘がなる。

「では、授業を終わりにします。あくまでも、これは授業内容として言っているだけです。君たちの考えを否定するつもりはありません。では、また明日」

それだけ言うと、さっさと教科書を持って部屋から出て行ってしまう。

そんな教師に、メリルは呆れる。

嫌な教師、ムカつく教師などはいるが、呆れてしまう教師はサミユエルだけだ。

確かに物腰は柔らかなのだが、教科書をそのまま解説するように淡々と授業を進め、生徒の意見を受け入れない教師も珍しい。嫌味の一つでも言ったほうがまだ気が効いていると思うのは自分だけだろうかと彼女は思う。

ふと、先ほど意見した少女の目を向けると、怒りか悔しさか、震えている。

「やっぱり、この授業はつまらない……」

改めて、メリル・ウェラーはそう感じたのであった。

昼休み、サミュエルは学院内に用意されている自室でのんびりと珈琲片手にサンドイッチを食べていた。

時折、教科書を捲って明日の授業内容を確認している。

淡々と授業を行っているように見えるサミュエルだが、彼は彼なりに効率良く教える為に努力しているのだ。もっとも、それが生徒にとって退屈か、そうでないかはさておきだが。

「ルード先生、失礼します」

ノックもなしに、いきなり扉を開けて部屋に飛び込んできたのは女性だった。

同僚であり、先輩教師にあたるシユスラン・クレイドルだ。

癖など見当たらないストレートのプラチナブロンドの長髪をシン

ブルに一つに結っている。女性にしてはやや長身で、整った容姿を備え持つ彼女はモデルと言っても通じるだろう。

だが、その整った容姿は無表情に近い。

実に残念なことに、彼女はあまり感情が顔にでないタイプなのだ。そして、正確も少々キツイ、というよりも冷たい面があるので、生徒からは『鉄仮面女』や『氷の女王』などと裏で呼ばれている。

「クレイドル先生……せめてノックでもしてくださいよ」

「突然入られたら不味いことでもしているのですか？」

「いえ、そういう問題ではないんですが……」

これだ……、とサミュエルはため息を吐く。

どうも自分は先輩教師に快く思われていないようだ。特に何かした記憶はないのだが、どうしてだろうかと首を傾げなくなってしま

う。

「それで、どうかしましたか？」

「ええ、学院長が呼びです」

思わず、えー、と嫌な声を出したくなりそうだった。

まだランジエスター学院で教師を務め始めて二ヶ月しか経っていないが、たった二ヶ月でこの学院の頂点——つまり学園長を務める老女が、何かあるたびに無理難題を要求するために自分を呼び出すのはもう両手では数え切れなくなっている。

「また、面倒事でしょうか？」

「私に聞かれても困ります。私も使い走りにされて迷惑しているのですから。ですので、次の休日に食事を奢ってください」

「え？ 僕がですか？」

どうして、と思わず尋ねるサミュエルだが、彼女はさも当たり前のように言う。

「貴方のせいで貴重な昼休みを使っただからです、貴方が私に食事を奢っても罰は当たらないと思いますか？」

「……」

「……」

しばし、無言でお互いを見つめあい……先に折れたのはサミュエルだった。

「……はい、喜んで奢らせていただきます」
「結構」

満足するように頷くと、「それでは、失礼します」と部屋から出て行ってしまふ。

そんな彼女を見送ってからため息を一つ吐くと、サミュエルはサンドイッチを口に押し込んで珈琲で無理やり飲み込む。

「それにしても、クレイドル先生は僕のことを良く思っていないはずなのに、どうして休日に食事を？」

ふと、疑問が沸いたので思わず口にしていた。

例え、嫌がらせだろうが、自分だったら快く思っていない相手とせつかくの休日に会うのはもちろん、食事を一緒にするのだって御免だ。例え、それが相手のおごりであっても。

もしかしたら、思っているよりも嫌われていないのかな？ と、思ったが……この二ヶ月の彼女の態度を思い出すと、そんなことはないかと改めて思うサミュエルだった。

「僕が小等部の担任ですか？ …… それはまた、どうしてそんな無茶を？」

学院長室にて、サミュエルは学院長である老女——テリー・チェスターと机を挟んで向き合っていた。

彼女の髪はすべてが真っ白で、本人曰くとても苦労していたのだと言う。そして、テリー・チェスターの名前から解るように、彼女も王族関係者だ。

もともと、このランジエスター魔術学院は歴史ある魔術学院であり、貴族の子供たちはもちろん、才能ある平民なども集め、生徒を平等に扱い優れた人材を輩出し、生徒たちに無限にある可能性を開花させて欲しいと願い創設させた魔術学院である。

だが、時は流れ、貴族たちの時代がやってきて、いつしか貴族のための魔術学院となってしまった。

数年前から国王たちによって国改善が行われ、そのおかげで現在は多くの平民も通っているのだが、貴族出身の生徒の中には平民を差別する者がいるというのが現状であり、悩みの種である。

それ以外も色々問題を抱える魔術学院を支えているのが、学院長であるテリー・チェスターである。

「無茶でしょうか？ 産休にはいった先生の変わりに貴方にお任せしたいのですが、ルード先生」

「ええ、どうしても無茶だと思うのですが……」

「理由を聞かせてもらってもいいかしら？」

学院長は笑顔だ。

だが、その笑顔は言っている。ちつとやそつとの理由じゃ納得しねえぞ、ああん？ と。

「その、僕の授業はつまらないそうです。それに、生徒にも馬鹿にされていますし」

自分の授業が生徒たちに退屈されていることは重々承知している。それに自分にまつわる「ある噂」も耳に届いている。

だが、学院長はサミュエルの言葉を笑顔で切って捨てた。

「だからなんですか？」

「……えっと。はい？」

「ルード先生の授業がつまらない、退屈だ、そのような話は私の耳にも届いていますし、本当に貴方の授業が必要かという疑問も保護者の一部から上がっています」

保護者からも文句を言われていたのか、と軽くショックを受けるサミュエル。

学院長はそんな彼を見て笑みを深めると、言葉を続ける。

「しかし、それがなんだというのでしょうか？」

「え？」

「貴方はまだ教師として二ヶ月という未熟もいいところです。それ以前に、きちんと教育機関で受けるべき教育を受けていません。ですが、貴方は教師としては未熟でも魔術師としては超が付くほどの一流です。そして、私は知っています。貴方が効率良く授業を進める為に努力していることを、生徒にとってはつまらない授業であったとしても、しっかりと聞けばとてもためになる授業を行っていることを」

ですが、と彼女は続ける。

「ルード先生には足りないものがあります。それを知るためにも、小等部の担任を任せたいと思うのです」

「僕に足りないもの……それは一体？」

「口にするのは簡単ですが、もう既に自身で気付いているのではないのでしょうか？ 後はゆっくりと子供たちに教えてもらえばいいですよ」

学院長はそう言って、孫を見守るように微笑んだのだった。

0 「僕が小等部の担任ですか？」（後書き）

ブログ投稿させていただきました。今後は「魔王候補と勇者候補」と二段構えで頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします！

ご意見、ご感想、ご評価をしていただけると大変嬉しいです。どうぞよろしくお願いします！

1 「やっぱり、僕の授業はつまらないんですね……」

サミュエルは来週から小等部五年五組の担任になることになった。ランジェスター魔術学院は一週間の内、休日が二日間ある。丁度、明日から休日になる。とはいえ、教師であるサミュエルにとって、必ず学院の休みがすべて休日と言うわけではない。

それに、休日はシユスラン・クレイドルとの約束もある。

「はあ……なんだか大変なことになったなあ」

部屋に戻ってきたサミュエルは、そう呟いて机の上にある母の写真を眺める。

「母さん、僕が担任ですって。一体、何をどうすればいいんでしょうか？ 僕の授業はつまらないし、生徒には馬鹿にされているし、そんな僕が小等部の担任ですよ。ほとんどの授業を一人でしないとイケません……母さんはどんな先生だったんでしょうか？」

本人は気付いていないが、今にも泣きそうな子供のような顔で今は亡き母に語りかける。

流行病で亡くなった母は教師だった。家が貧しかった為にサミュエル自身は学校など通わずに子供でもできる仕事をしていた。

当時の彼の唯一の楽しみは、寝る前に少しだけ母と一緒にする勉強だった。

今でもはつきりと覚えている思い出。しかし、それと生徒たちに自分が教えるのは違うというのは理解している。

一対一なら、母のようにすれば良いと思うのだが……。

「なかなか、上手くないなあ」

ため息と一緒に弱音を吐くサミュエル。そんな時、扉をノックする音が響いた。

「誰かな？ はい、どうぞ」

「失礼します」

そう言うてはいつてきたのは、先ほど自分が授業をしたクラスの生徒だった。

「どうかしましたか、メリル・ウェラー君……と、ジュジュ・ヴァレンティン君」

学院の制服に身を包んだ、亜麻色の髪をショートカットにした活発そうな少女——メリル・ウェラー。

同じく学院の制服に、赤い髪をツインテールにした小柄な、しかし少々強めの性格が伺うことのできるつり目の少女——ジュジュ・ヴァレンティン。

サミュエルは授業を受け持つ生徒の名前と顔をすべて把握している。もつとも、メリルだけは少し事情があり、それ以上に良く知っているのだが。

「ええっと、先生が忘れ物をしていたので届けにきました」

そう言うて彼女が渡してくれたのは、使い古した皮製の筆箱だった。

「ありがとうございます。忘れていたことに気付きませんでした。

大事な物なので助かりましたよ」

「いいえ、良かったです」

「しかし、すみません、貴重な昼休みなのに……」

心底申し訳なさそうにするサミュエルにメリルが慌てたように首を振る。

「ちょっと、先生！ 私のこと無視しないでください！」

「いえ、その、無視していたわけじゃなくて、順番に話を聞こうと思っただけで。ヴァレンティン君も私の忘れ物を一緒に届けに来てくれたんですね、ありがとうございます」

「違います！ 私はさっきの話の続きにきました！」

ペコリ、と頭を下げたサミュエルにジュジュが声を張り上げる。

彼女の言葉に、ああ、と頷く。

「そうでしたか、ではその椅子に座ってください。ウェラー君もよければ一緒にどうぞ」

ジュジュは躊躇いなく椅子に腰掛け、メリルは少し躊躇ってからジュジュに習う。

「二人とも珈琲でよければありますが？」

「いただきます……その、できたら砂糖とミルクを」

「わ、私も同じので」

ちょっと赤い顔をした二人が歳相応で微笑ましいとサミュエルは思う。

自分がこの歳の時には――

そこまで考えて、やめた。

「では、僕も同じのにしましょう」

珈琲を用意すると、二人と自分の前に置く。

「それでは、先ほどの続きですね。ヴァレンティン君は、僕が魔術が使えなくなった場合や、魔力がなくなった場合に対して意見を言おうとしていましたね、ではそこから始めましょう」

サミュエルの言葉に、ジユジユはもちろん、メリルも驚いた。

あれだけつまらない淡々とした授業をしているというのに、細かいところをしっかりと覚えていたのだということの驚きを隠せなかったようだ。

しかし、当の本人は何故そんなに驚いた顔をしているのか、わからずに首を傾げるだけ。

「どうかしましたか？」

「いえ……では、聞きますが、先生は魔術が使えない、魔力がないという仮定で話をしていましたけど、実際にそこまでの事態になることはないと思います」

ジユジユの言葉に、サミュエルは少し間を空けてからあっさりと頷いた。

「そうですね、そう滅多にそんな事態にはなることはないでしょう」
「なッ……」

まさかこうもあっさりと肯定されるとは思っていなかったのか、ジユジユは思わず言葉に詰まってしまう。

だが、怒ったように顔を真っ赤にすると、大きな声を上げてサミ

ユエルを睨む。

「それでは授業の無駄じゃないですか！」

「いいえ、それが無駄じゃないんですよ」

「どういう意味ですか!？」

どうやらジュジュ・ヴァレンティンは頭に血が上りやすいようだ、と心の手帳にメモしながらサミュエルは続ける。

「少し落ち着いてください。まだ授業が始まったばかりなので、無駄に感じるかもしれませんが、僕の授業は対魔術師の戦闘です」

「それは知っています！」

「このような言い方はしたくはありませんが、魔術というのは医術や街の開発などに使えば実に良いことですが、実際には多くの魔術が攻撃です。中には簡単に、自身でも自覚しないまま人を殺してしまう魔術もあります」

彼女たちが理解できるように、話に付いてこられるように間を少し空ける。

その間に、一口珈琲を飲むと話を続ける。

「いいですか？僕は、君たちが無慈悲にそんな危険に晒された場合を想定して、そしてそんな危険から無事に生還できるように学んで欲しいと思っています。そのために、最も可能性の少ない、しかし最も危険な場合を仮定して授業をしているんですよ」

実際に、ある一定の空間を魔術を使えないようにする道具、魔術が存在する。もちろん、その使用者も同じリスクを背負うのだが、魔術師にとって魔術が使えないということは最も危険な場合なのだ。現在における魔術師、いや……魔力を持ち、少なからず魔力や魔

道具を使える者は、それに頼りきりになってしまっている。

だからこそ、使えなくなるという、普段考えようがない状況でサミュエルは話を進めていたのだ。

「……」

「……」

一方、メルルとジユジユは呆然としていた。
というよりも、一つの疑問に捕らわれていたと言っほうが強いだろう。

そして、二人は声を揃えるように言った。

「「普段の授業もこのくらいやれば、つまらないのに……」」

教え子の無慈悲な一言に、サミュエルは自分は教師に向いてないんじゃないかな、と改めて思い、そして凹んだ。

あ、地雷踏んじやった……。

メルルとジユジユは、そんな顔をして互いの顔を見合わせる。

「……そんなに、僕の授業はつまらないのでしょうか？」

ボソリ、とそんな呟きが聞こえた。

独り言かな？

そんな呟きだった。二人は、聞こえなかったふりをしようと思っただが……それをするには、少々可愛そうなくらいの落ち込みよ

うのサミュエルだった。

「……そんなに、僕の授業はつまらないのでしょうか？」

（（二回、言っただけ！））

これは絶対に独り言じゃない！

確信する二人は、お互いに頷くとサミュエルのために一言。

「そ、そんなことはないですよ、先生」

「正直、つまらないです」

まったく逆の意見だった。

（ちょっと、ヴァレンティンさん！　ここはフォローしてあげなきゃ！）

（いいえ、こういう時はしっかり言ってあげた方が優しさです！）

目で会話する二人。

正直、二人は仲が良い友人というわけではない。ただのクラスメイトだ。

だが、この気まずいというピンチが二人の距離をグングンと縮めている。

「あ、あの……どっちなのでしょう？」

二人の答えが正反対なことに不安を覚えたのか、サミュエルは三度問う。

そして二人は今度こそお互いに頷くと、

「ごめんなさい、正直つまらないです！」
「言い過ぎました、つまらなくはありません」

また逆なことを言った。

（（ちょっとー！））

二人は内心叫ぶ。

（ついさっき、しっかり言ってあげた方が優しさだって言ったじゃない！）

（貴方こそ、フォローって言いましたよ！ だからこそ、嘘までついたのに！）

また目で会話するメルルとジュジュ。

そして、恐る恐るサミUELの方に視線を向けると……

彼はどんよりとした雰囲気全開で俯いていた。

そうになると、二人にできることは一つ。

（（逃げよう！））

顔を見合わせて頷く二人。もう以心伝心はばっちりだ。

そう決まれば行動は素早く。

バツ、と音を立てて立ち上がると、出された珈琲を一気に飲み。もちろん、腰に手を当てるのも忘れない。

ダン、とカップを机に置くと、驚いた顔をしているサミUELに二人は可憐な笑顔を向けると。

「ご馳走様でした！ 授業、頑張ってください！」

「お昼休みにお付き合いくださってありがとうございます！ それ

では失礼します！」

と、逃げて行ってしまった。

そんな二人を見送ったサミュエルは一人ポツリと呟いた。

「やっぱり、僕の授業はつまらないんですね……」

「……フッ」

「鼻で笑わないでくださいよ……クレイドル先生。というか、無表情なのに鼻で笑うとか不気味ですよ」

午後の授業も終了し、担任するクラスを持たないサミュエルは、
またも突然やって来たシスラン・クレイドルに昼休みの出来事を
相談した……のだが、鼻で笑われた。

相談する相手を間違えた、思った時には既に遅かった。

「貴方の授業がつまらないなんてことは今更です。周知の事実です。
毎日、とまでは言いませんが、頻繁に抗議の連絡が来ていますから」
「……鬱になりそうですよ。もう少し言葉を優しくしてくれませんか？」

「どうしてですか？」

こてん、と首を傾げるシスランに、今度こそサミュエルは泣き
たくなった。

この人、素で解らないって思っていますね！

「ところで、クレイドル先生はどうして僕の部屋に？ 何か御用で

も？」

さっさと追い出したい衝動に駆り立てられ、サミュエルは強引に話題を変えた。

もつとも、気にはなっているのだ。

シユスランは時間があると、サミュエルの部屋に来ていることが多い。例えばサミュエルが忙しくても、部屋にいなくても、やって来ることも珍しくはない。

嫌だとは思わない。だが、不思議だった。

「最初は、不慣れな僕に親切に……なんて思っていた時がありましたよ。数日だけですけど」

ぼそり、と呟く。

彼がまだ新米の新米で、吐きそうなほどに緊張していた時に現在と同じように突然やってきてマイペースっぷりを発揮してくれた。

最初は緊張をほぐしてくれるためだと思っていたが、数日後、それが違うと核心に変わった。

「そうです。貴方に渡すものがありました」

そう言って彼女は一枚の紙をサミュエルに渡す。

それは広告だった。

「これは最近、人気のステーキハウスですね……まさか」

「ええ、明日の夜はここでお願いします」

「ちよつと、待ってください！　ここ、結構値段するんですよ、知ってますか？」

「はい、だからこそ奢りで。一度行ってみたいと思っていました。

あ、予約はしておきましたので、ご心配なく」

「いやいや、まったく心配なんかしていませんよ、むしろなんてこ
としてくれたんだ、この野郎的な感じです！」

無表情なのを無視すると、モデルも裸足で逃げ出してしまいそう
なシユスランの体型はスリムだ。

しかし、彼女は食べる。もりもり食べる。

どこのフードファイターだよ、と突っ込みたくなるほど食べるの
だ。

「すみません、僕はまだ破産したくありません」

「貯金は多いはずです」

「なんで知ってるんですか！」

確かにそれなりの貯金はあるサミュエルだが、どうして彼女がそ
んな情報を持っているのかとつい大きい声を出してしまう。

だが、シユスランはそんなサミュエルを気にせず、今度は書類を
取り出すと差し出す。

「なんですか、今度は……」

半ばうんざりしながらも書類を受け取る。

「貯金を使いたくなければ、食事代は稼いでください。男性はその
くらい甲斐性がないと。ちょうど良く、貴方に学園長からの依頼が
あります。忘れていましたすみません。ギルドの方で手に負えない
からと学園長のツテを頼って回ってきたそうです、それを貴方にと」

書類を読んでいたサミュエルは、書類とシユスランに視線を何度
も行き来させると、指を自分に指す。

「はい、貴方です」
「え？」

1 「やっぱり、僕の授業はつまらないんですね……」（後書き）

最新話投稿させていただきました。

小等部の担任となったサミュエルですが、その前に色々厄介事がや
つてきました。

世界観を交えながら物語を進めていきたいと思っています。

ご意見、ご感想、ご評価頂けると大変嬉しいです。どうぞよろしく
お願いします！

2 「もう、やめにしませんか？」

ギルド——それは世界各国、各地方に拠点を置く巨大な組織だ。国などには極力関わらず、あくまでも冒険者、魔術師、そしてギルドのために存在する組織である。

誰でも登録できるが、その後行われる階梯付けは非常に厳しいものである。

基本は、チームを組むことが多いが、個人で登録する者も少なくはない。

階梯は第一階梯から第一五階梯まであり、数字が大きいほど階梯が高い。

「どうしてギルドの仕事を僕が請けないといけないのでしょうか……」

情けない声を出すのはサミュエルだった。

彼は仕事をすべて終え、ジーンズとシャツというラフな格好で学院の中庭にあるベンチでそれでも資料を読む。

「大体、僕はギルド登録していませんよ？ 良いんですか、ギルド登録者の皆さん？」

一体誰に向かって呟いているのやら。

ここで簡単に説明をしておくと、まず、ギルドの登録に年齢は関係ない。

仮に十二の子供が登録しても、階梯が低いのは当たり前なのでそ

れなりの依頼しかできない。もっとも、これがどこかのギルドチームに所属してしまうと話は別になるが、よほどの才能と実力がなければチームにだって入れはしないだろうが。

そんなことよりも、サミュエルにとっての疑問は一つ。

「どうして依頼がわざわざ学院まで回ってきたのか、ですね」

別にギルドからランジエスター魔術学院へ、いや世界各国の魔術学院へ依頼が回ってくることはそう珍しくはない。

多くの学院が、小等部から大学までが存在し、ランジエスター魔術学院ではさらに大学院まである。

そして多くの生徒が実力を試すため、個人の目的などの為にギルドに登録することは珍しくない。すると、次第に才能を持つ者はそれなりの階級とそれに見合う依頼を受けることができるのだ。ゆえに、学院内にギルドボードというギルド依頼が表示されたボードが存在する。

話が寄り道してしまったが、サミュエルが何を疑問に持っているのかというと。

「どうして、この程度の依頼が学院に……いいえ、学院長に回ってくるのでしょうか？」

正直な話、ギルド登録者は多い。その方が色々な面で便利だからだ。

そして、この国でも第一五階梯を持つ者もいる。もっともそんな人物がこの程度の依頼を引き受けるとは思わないが、学院長に回ってくる依頼とも思わない。

基本、学院長に依頼が回ってくる場合は、火急の依頼やある程度の実力者を複数求める場合だ。

サミュエルは火急の依頼を頼まれることが、この二ヶ月で何度か

あつた。

「なるほど……こういうことなら納得できますね」

資料を読み続けることで、ようやく納得ができた。

依頼内容はそこまで大したことはない。第五階梯から第八階梯くらの依頼だ。第四階梯でも複数で当たればこなせる依頼のはずだ。だが、もう数人の行方不明者が出ている。中には第九階梯までいる。

「まあ、相性もありますし、必ず強さが階梯というわけでもないですからね」

資料をすべて読み終えたサミュエルはベンチに資料を置くと、はあ、と改め溜息を吐いた。

「それにしても、最近騒がれている殺人事件の犯人の逮捕、もしくは殺害とは穏やかじゃないですね」

「よろしいのですか、学院長？」
「何がでしょうか？」

シスラン・クレイドルが呟いた疑問に、学院長テリー・チエスターは首を傾げる。

場所は学院長室であり、その部屋からは資料を読んでいるサミュエルが良く見える。

「ルード先生は『例の噂』があります。私自身、その真偽は知りません」

「心配ですか？」

「はい、私は明日、本当にあのステーキハウスで奢ってもらえるのが不安です」

そちらですか、と苦笑する学院長だが、シユスランがサミュエルのことを純粹に心配しているといことは分かっている。

相変わらず素直になれない性格ですね。そんなことを思う。

学院長にとって、シユスランは幼い頃から知っている。小等部からランジエスター魔術学院に彼女が通っていたこともあるが、今は亡きシユスランの祖母と学院長は親しい友人であった。それゆえに、一生徒としてだけではなく、色々と面倒を見てきたのだった。

「まあ、そういうことにしておきましょう」

学院長は少し悪戯めいた笑みを浮かべると、シユスランは無表情ながらに解る者にしかわからないムツとした顔をする。

「今回の犯人は間違いなく魔術師です。ギルドに任せるか、騎士団が動くべきではないでしょうか？」

「そうですね、本来なら……ですが」

そう、本来ならギルド、もしくは国を守護する騎士団が動くべき事件なのだ。

ランジエスター魔術学院もある、この王都イシュタンベルアで起きる連続殺人事件。被害にあっているのは、魔術師でも、剣士でも、ギルド登録者でもない一般人だ。

だからこそ、いくら有能な者にツテがある学院長だからといって

回ってくるような依頼ではないのだ。

「本来、というと？」

「ええ、知っていると思いますが、すでに多くのギルド登録者が行方不明となっています。また、これはまだ明かされていませんが、騎士団員も数名返り討ちとなっています」

その程度で？ と、思うと同時に、情け無いと内心呟くシユスラ
ン。

「ですが、それならもつと優秀な魔術師、階梯持ちなどに任せるべきではありませんか？ どうして、ルード先生なのですか？」

彼女にとつて、やはり一番の疑問はそれだった。

サミュエルが何度も学園長の依頼を受けているのは知っている。無傷で帰ってくることもあれば、酷く汚れていたり、ボロボロだったり、傷を負っていたこともあった。

学院長は、少し渋ってからゆつくりと口を開く。

「被害者の中に貴族の方がいます。ご子息が殺されたとあって、この奥様が怒り狂ってしましてね。莫大な懸賞金を掛けて犯人を捜しています」

「つまり、その馬鹿な貴族がもつと馬鹿をやる前に、こちらでなんとかしてしまおうと……しかし、まだそんな貴族がいたのですね。とくに王と『魔術師殺し』に殺されていると思いました」

「言い方は悪いですが、その程度の貴族です」

そう言い切ると、学院長はシユスラの顔を見る。

相変わらずの無表情だが、解る者ならば解る。その無表情の中に、心配や不安の表情が少しだけあるということに。

「貴方の心配はわかります。だからこそ、一緒に行くとまた無茶なことを言ったのでしょうか？」

「ですから……心配はしていません」

「まったく、素直になれない子ですね……まあ良いでしょう。とにかく、一緒に行動するならしつかりと見ておくと良いでしょう。サミュエル・ルードという人物を」

学院長はそう言うと、中庭で文句を言いながらも書類を捲るサミュエルを見て微笑む。

シュスランは、それ以上は何も言わずに「失礼します」と言って部屋を後にした。

一人になった学院長は、笑みをさらに深くした。

「若いつて良いですね」

夕方、メリル・ウェラーとジュジュ・ヴァレンティンはワンピースタイプの黒い魔術学院の制服に身を包んで街を歩いていた。

軽くどこかで寄り道でもしようということになったのだ。制服を着ているのは、一見シンプルに見えるその制服が意外と可愛いのと着ているだけでナンパ避けにもなるからだ。

授業担当の教師との会話で気まずいという困難に立ち向かった二人は、ただのクラスメイトから友人へとなりつつあった。

寄り道を終えた二人は、学生寮に向かって歩いていた。

「ジュジュも学生寮なんだよね？」

「ええ、自宅は近い場所にありますが、寮生活も良い経験だと思って中等部になってからはそうしています。メリルだって、自宅は近くにあるでしょう？」

いつしか互いの名前を呼び合っているメリルとジュジュだった。

「うん、でも家が複雑で……寮の方が気が楽なんだよね」

メリルの言葉に、あつ、とジュジュは彼女の噂を思い出す。

「やはり、あの噂は本当なんですか？」

「噂ってどれかな？　たくさんあるからわからないや、ジュジュが知ってるのを言ってみてくれる？」

「で、ですが……」

「いいから、いいから！」

ジュジュはあまり言いたくなさそうだったが、メリルが気にしていないように言うので、ここで気を使うのも変だと思って正直に言った。

「まず、メリルが英雄ティラード・ウェラーの娘であること、その割には才能があまりないこと、貴方とお姉さんが義母と義弟と上手くいっていないこと」

「ハイ、ストップ！」

遮るようにメリルが声を上げた。

「というか、全部あってるけど！　プライバシーの侵害もいい所だよ！　最初に噂流した奴は一体誰だッ！」

「ええッ！　全部、本当ですか？　ティラード・ウェラーの娘くら

いしか合っていないかと思ってきました……」

全部合ってるよ、と溜息を吐くメリル。

英雄の娘——そんな色眼鏡ですつと見られてきた。生徒はもちろん、教師にも。だが、それは三人いる姉も経験していることだから仕方がないと思う。

だが、才能がない故に、がっかりした目で見られるのは腹が立つ。一番目と二番目の姉は才能を持っている。三番目の姉は魔術などには一切興味がなく、普通学校に通いながらモデルなどをしている。それに比べて自分は……。才能はなく、だからといって他の道に進むこともできない中途半端な存在だ。

肩を落とすメリルを見て、何て声を掛ければと悩むジュジュだった。

そこで、ジュジュは話題を変えることに。

「う、噂と言えば、ルード先生の噂はどうなんでしょうね？」

「……ああ、色々あるよね、ルード先生も。確か、“魔術が使えない”だっけ、一番噂されているのって？」

そう、それがサミュエル・ルードの『例の噂』の正体だった。

彼は、魔術学院に教師として来てから二ヶ月。初歩の魔術すら使ったことがない。そして、彼の担当する授業は対魔術師戦闘であり、内容も魔術を使わずに相手を倒すことや、逃げることなどを教えている。

これらのことから多くの生徒が、サミュエル・ルードは魔術が使えないのに魔術学院で教師をやっていると思われるのだ。酷い者は、魔力すら持っていないと馬鹿にしている。

中には、例え魔術が使えなくても知識を学ぶ授業の教師なのだから良いのでは？ と、柔軟な考えの者もいる。そもそも、魔術学院の教師が魔術を使えなくてはいけないという決まりはない。

「私、前に見たことあるんだけど、高等部の人たちが先生のこと馬鹿にして、殴ったりしてたんだよね。その時は、見て見ぬ振りしたけど、酷いよね。私も含めて……」

それならば自分も同罪だとジュジュは思う。

そもそもジュジュはサミュエルのことをあまり好いてはいなかった。貴族の生まれというのもあってか、ジュジュにとって魔術は身近なものであり、頼れるものであった。それをあくまで手段のように言うサミュエルのことがどうしても好きにはなれなかったのだ。

今日、実際にあのように話さなければ、いつかは噂を真に受け、教師を馬鹿にするなどという最低な人間になっていたかもしれないと思うとゾツとしてしまう。

だけど、今は違う。

実際に話して、彼は彼なりに考えていると少しだけ分かって、授業がつまらないことを気にする面なども見る事ができて、少しだけ、少しだけ好きになれた。

「またルード先生に会いに行ってみましょうか？　今度は遊びに行く感覚で」

「ッ！　そうだね！　そうしようよ！」

二人は顔を見合わせて頷く。

そして、声をそろえると。

「「とりあえず、授業中はなんとか起きていよう！」」

そう言って笑ったのだった。

だが——そんな笑顔も、次の瞬間凍りついた。

「流石に六の月だけあって、暑くなってきましたね。来月の七の月は去年よりも暑くなるらしいですよ」

「それは、私の服を脱がしたいと遠まわしに言っているのですか？」

「いえ、違いますから！ クレイドル先生は私服に着替えないんですか、と聞きたいんです」

「……覗くつもりですか？」

なんでやねん、と内心思いつつも、相手は先輩教師、相手は先輩教師と呪詛の様に呟いて何とか耐えるサミュエル。

シユスランは学院で過ごす格好と同じ、スーツ姿だった。

「あの、文句を言うつもりはないですけど、結構動くことになりますよ。スカートタイプのスーツにヒールだと大変なことになりますよ」

「そう言って、何とかして私の着替えを覗くつもりですね……」

「いやいや、そうじゃないですから！ 僕は今回の依頼をさっさと片付けたいんですよ、だから一分一秒も惜しいんです。正直、今すぐ走りたいくらいですから！」

「走ればいいじゃないですか」

何をいつているのだ、という顔をされてそんなことを言われると流石のサミュエルの笑顔にも血管が浮いた。

そんなことには気付いていないのか、それとも無視しているかシユスランは続ける。

「走るのは結構ですが、今回の犯人を見つける……いいえ、見つけ

たとして貴方に対処できるのですか？」

「……ああ、例の噂のことですか」
「ええ」

サミUEL自身、自分が魔術を使えない教師だと噂されていることは知っている。というよりも、実際に言われ、暴行も受けた。生徒と歳が近い分、仕方のないことだと割り切っている。というよりも、気にも留めていない。

「別に隠しているわけじゃ、ありませんが……」

そこまで言いかけて、サミUELは唐突に言葉を止めた。

「どうしました？」

シスランが声を掛けるが、サミUELは返事をしない。
そして……

「悲鳴が聞こえました！」

「悲鳴、ですか？ 私には何も……」

「いいえ、確かです！ すみませんが、先に行きます。声に心当たりがありますので！」

それだけ言うと、サミUELはシスランの返事も待たずに消えた。

いや、消えたように思えるほど早く走ったのだ。

一人残されたシスランは、一瞬呆けていたが、自分もサミUELを追いかけるべく走り出した。

「やはり、この格好は間違いでしたッ！」

ぐしゃり。

そんな音を立てて、空から何かが降ってきた。

それが何なのか、メルルもジュジュも理解できなかった。いや、性格にいうと理解しなくなかったのだ。

だが、それから流れ出てくる赤い液体といい、おかしい方向に曲がっているが、見覚えのあるそのパーツは……血と、恐ろしい程奇妙に体を歪ませた人間だった。

「いやああああああッ！！」

二人のどちらが悲鳴を上げたのか分からなかった。もしかしたら二人とも悲鳴を上げていたのかもしれない。

瞬間的に、恐怖と、後悔が襲い掛かってくる。

一体、何が起きたのか。私たちはどうして、近道をしようと、気のない道を選んでしまったのか。

そんな二人の前に、さらに何かが空から降ってきた。

今度はトン、と軽い音を立てて着地した——一人の女性だった。

二十台半ばだろうか？

数メートル離れているこの場所から見ても、綺麗な女性で“あつた”ことが十分にわかる。だが、その彼女の顔は、醜い獣の様に歪んでいた。

そして、既に事切れている人間をしばし眺めるようにすると、さらにその顔を歪ませて蹴り始めた。

「な、何よ、あの人……！」

「に、逃げましょう！」

だが、突然過ぎる出来事のせいで、腰を抜かし地面に座り込んでしまったメルルとジユジユ。

逃げる事ができずに、お互いの体を抱きしめあうようにして、震えている。

女性はそんな二人に、一切の興味を示さずに、今度は掌に風の剣を生み出した。

「……あれは、魔術？」

女性は風を凝縮させて作った剣で、死体を何度も刺し始める。

「なんなの、あの人！ どうして、そんな酷いことが……」

そのあまりにも光景に、吐き気を覚える二人。

恐怖も限界に来て、気を失いそうになる。だが、気を失ってしまった、次に目を覚ませる保障はどこにもない。

きつと気を失えば楽なのだろう。だが、そんな恐怖が、ギリギリの一線で二人の意識を保っていた。

「死ね、死ね、死ね、しね、しね、しねしねしねしねしねっえええええッ！」

女性は叫びながら、既に原型がなくなりつつある死体を刻み続ける。

そんな時だった。

「もう、やめにしませんか？」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「どれだけ恨みがあるというのですか？ 死体をそこまでするなんて……」

そこには長身痩躯で青みの掛かった黒髪の青年が、悲しげな顔をして立っていた。

「貴方自身の為にも、もうこんなことは終わりにしてください」

突然現れた黒髪の青年——サミュエル・ルードは、狂ったように死体を刻む女性に哀れむように声を掛けたのだった。

2 「もう、やめにしませんか？」（後書き）

意外と早めに投稿できました。次回はバトルです！

ご意見、ご感想、ご評価頂けると励みになります。どうぞよろしく
お願いします！

「ルード先生……」

力なく呟く生徒を見て、自分が間に合ったことを内心ホツとしていたサミュエル。

言つては悪いが、被害者は知り合いでもなんでもない、残念だとは思うが、それ以上の感情は抱けなかった。

そんなことよりも、生徒の無事が一番大事だ。

「やつぱり、さっきの悲鳴はメルル君とヴァレンティン君でしたか。怖いものを見てしまいましたね、すぐに忘れるとは言いませんが、いつかは忘れる日が来ますよ」

サミュエルはしゃがみ込んで視線を二人に合わせると、優しくそう諭すように言う。

二人が頷くのを見てから立ち上がると、歪んだ形相でこちらを睨んでいる女性と対峙する。

「今あ、なんて言つたあ！　こんなことだと、こんなことだと、こんなことだとお前は言つたのかあ！」

「はい、言いました。もうよしませう、フィアト・ロムさん」

サミュエルは彼女に同情していた。今まで多くの者を見てきたから、分かる。彼女の顔は誰かを強く恨んだ、憎んだ顔をしている。かつての自分もきつとあのような顔をしていたんじゃないかと、

サミュエルは思う。

「やめられるものか！ やめられるものか！ お前には関係ないことだ！ その子供にもだ！」

「いいえ、そうはいきません。私は依頼でやってきました」

「依頼？」

「はい」

サミュエルが頷くと、女性——フィアトの目に理性が少し戻る。そして、彼女は笑った。

「またギルドか？ 騎士団か？ そんなに私の復讐を止めたいかあ！ お前たちに、そんな権利があるものかッ！」

復讐、という言葉にサミュエルは反応する。

内心ではやはりと思う。書類では、犯人の名前や今までに殺害した被害者などが書かれていたが、彼女の動機には触れられていなかったからだ。

本来、こういった人間関係——特に殺人などの事件は、ギルドから用意される書類には加害者側と被害者側の大体の事情が調べられている場合がある。特に、依頼が長引けばより詳しく。

もつとも、被害者、加害者側のことが必ずしも分かるわけではない。

だが、今回のように加害者の本名まで分かっているのに、それ以上のことが書かれていなかったことから、なんらかの手が回された可能性がある。

無論、手を回した方も、それに加担した方も立派な犯罪者となるが。

「理解できない、そんな顔をしてるな！ どうせお前も、あの女、

マシス・エリックに頼まれたのだろう！」

「……依頼人をご存知でしたか」

「当たり前だ！ 私の復讐はあの女を最後に終わるんだ！ なのに、あの女は、自分たちがしたことを隠して、私ばかり悪者に仕立て上げ……」

マシス・エリックは依頼人の名前であり、四人いる被害者の中で、二人目の被害者の母親だった。

つまり、彼女を含め、被害者と五人は彼女に対して、ここまで恨みを持たれる何かをしたということになる。

「一体、貴方に何が……」

そこまでしか言うことができなかった。

「先生！」

生徒の悲鳴が上がるが、振り返ることはできない。

何故なら、風の剣を持ったフィアトが剣を振り上げ目の前に移動していたからだ。

振り下ろされる右腕の手首を掴むと、ぬるりとする。これは被害者の血だろう。だが、そんなことはお構いなく、サミュエルは力を込めて手首を握る。

「もうやめなさい！ 恨みがあるのなら、何かされたのなら、しかるべき場所で……」

しかるべき場所で訴えなさい——そう言おうとしてできなかった。学院側で用意されていた資料を見て思い出す。依頼主は貴族だ。それも力のある。

訴えても、もみ消されるか何かしたんでしょうね。そんな予想は子供でもできるだろう。

「ごめんなさい」

謝罪の言葉と共に、彼女の腹部を蹴る。

「ぐふッ」

地面をゴロゴロと転がるが、先ほどまで刻んでいた死体の辺りまで転がると腹部を押さえて立ち上がる。

「一体、貴方に何があつたんですか？」

「本当に、何も知らないのね……良いわ、教えてあげる。コイツらは私の恋人を殺したのよ！そして奴らの一人が親に縋って、貴族だからって理由でなかったことにするなんて……許せない！」

数年前には日常的にあつた出来事だ。

ここ数年で、国は確かに良くなつただろう。だが、未だにそんなことをする貴族がいるのか、と思うと悲しくなる。

「ならば、私が貴方を手伝います。知り合いに魔術学院の学院長がいます、その方を頼つてもう一度訴えましょう。ですから、こんなことはやめて、貴方も罪を償ってください」

サミュエルは今までに何度も、学院長から依頼を受けたことがある。

もちろん、荒事もあつた。だが、極力話が通じるのであれば、会話で解決したいと思っっているのだ。

甘いのだろう。だが、甘いと言われても良いと思っっている。

「私はギルドに登録していません。依頼主に恩もなければ、義理もありません。もちろん、報酬にも興味がありません。ですから、悪いようにしませんから!」

サミュエルは懇願するように声を上げる。

彼の言葉が嘘ではないと感じたのか、フィアトはゆっくりと握った風の剣を放そうとして――

「大丈夫ですか、ルード先生!」

できなかった。

「クレイドル先生!」

新たな人物が現れたからだ。

「ルード先生、彼女がそうですか……」
「待ってください!」

一歩踏み出そうとしたシユスランを静止すべく、声を張り上げるサミュエル。

「クレイドル先生は、二人をお願いします。僕は、彼女の説得をしたいので」

「何を……」

「お願いします!」

何を言っているのだ、と言おうとしてシユスランの声はサミュエルの声によってかき消された。

彼はそのまま、改めてフィアトと向き合う。

「すみません、警戒させてしまったみたいですね。彼女は私と同じ職場の方です。実は、僕はこれでも魔術学院で教師をしています、それで学院長を知っているんです」

そんなことを言いながら、サミュエルは一步一步、彼女に近づく。

「先ほども言いましたが、決して悪いようにはしません。ですが、一緒に学院へ……」

「それはいかんのう」

必死に説得を続けようとしたサミュエルの声を遮るようにして、男の声が割り込んだ。

「学院やなくて、依頼主の所へソイツを連れていかんと、報酬もらえんぞ、ワレ」

いつの間にか建物の上にいた男は続ける。

「ま、ワレらが報酬いらんならワシらがもらうぞ？」

その言葉が引き金となったのか、それとも男の登場の時点でもう決めていたのか、フィアトは風の魔術を纏うと、死体を置き去りにして飛び上がってしまった。

「あッ……逃げられたわ。まあ、誰かが見つけるじやろ」

そして、男はフィアトの後を追おうとする。
だが、サミュエルはそれをさせなかった。

「待ってください、少々お話があります」

いつの間にか建物の上に移動していたサミュエルが、男の方を掴んでいた。

掴まれた男だけではない、シュスランも、メリルも、ジュジュもサミュエルがいつ移動したのかわからなかった。

「なんやワレ？」

そして、次の瞬間、サミュエルは男の顔を思い切り殴り飛ばした。

ゴンツ、と鈍い音を立てて建物の屋上に叩きつけられる男は、サミュエルの拳の威力で意識が飛びかけた。

（な、何モンじゃ、コイツは……このワシが、一発で……）

地面の冷たさを味わっていると、今度は服を掴まれて無理やり起き上がらせられる。

「立ちなさい」

「グ……」

「どうして邪魔をしたのですか？」

「邪魔なんぞ、しとらんじやろうが……」

「彼女は迷っていました。もう少し説得を続ければ、学院へ連れて行くこともできたんですよ」

サミュエルは見逃していなかった。

一瞬だが、彼女が風の剣から手を離そうとしたことを。

それがシユスランの登場で警戒されたが、それだけならまだ何とかなる気がしていた。だが、この男の言葉によって会話での解決ができなかったのだ。

「阿呆かワレは、ルール違反じゃろうが！ 依頼書見とらんのか、依頼人は捕縛して連れてくるか、殺せ言うつるんじゃぞ！」

「ルールなんか知りませんよ、そもそも僕はギルド登録はしていませんから」

「だったらワレはなんであの女を追うんじゃ！」

「貴方たちが不甲斐ないからこちらに依頼が回ってきたんですよ！ それなのに、邪魔をするなんて……そういうば、先ほど言っていましたね、誰かが見つけるだろうと。仲間は何人ですか？」

「誰が言うか、このボケが！」

その言葉と同時に、掴まれていた男は再び屋上に叩きつけられる。サミュエルはそのまま馬乗りになると、再度尋ねる。

「言ってください。仲間は何人ですか？ 性別は？ 特徴は？」

「言わんと言うつるじゃろうが……まあ、安心せい、ワシらは捕縛目的じゃ。殺しはせん、依頼人に突き出して終いじゃ」

「それだと彼女が殺される可能性があるんですよ……仲間のことを言えないのなら、仲間を呼びなさい。貴方では話になりません」

「……笑えるで、ワレ。あの連続殺人犯の話信じとんのか？」

「知っていたんですか？」

「いや、探索魔術使つとつたらワレらの会話が引つかかってのう。それで知ったんじゃ。しかし、ワレは本当にその話を信じとるんか？」

「いけませんか？」

「いや、別に、ただ、阿呆じゃと思っただけじゃ」

次の瞬間、男が炎の魔術をサミュエルに向かって放った。

威力はどうとういうわけではないが、手を離してしまった。

「ようやく手を放しよったな。覚悟はエエか？」

赤い籠手を両腕に着けたノースリーブの服を着た男だった。背は180あるサミュエルよりも低い、背が低いというわけではない。体は適度に鍛えられているのがわかる。

籠手と同じ真っ赤で短い髪に、どこか悪ガキ的な印象を与える顔をしている。

「どうやら、ワレは邪魔じゃ。ここで潰さしてもらうけれど、まあ気にせんようにな」

「貴方は彼女の言葉を、声を聞いて、何も思わなかったんですか？」

「さあのう。ホントの話じゃったら可哀想かもしれん。だがの、今はその話が本当かどうかもわからん。だから捕まえてからはつきりさせればええ」

「残念です」

サミュエルも拳を握って構える。

「一応、名乗るとくわ、ワシはギルド『ルビー・シルバー濃紅銀鉾』所属しとる第九階梯のイザナじゃ。ワレも名乗れや」

「ランジエスター魔術学院、対魔術師戦闘科教諭サミュエル・ルードと申します」

名乗り終わると、二人は、ダンッ、とお互いに地面を蹴った。

「食らえや！」

イザナの籠手に炎が纏う。

だが、サミュエルは気にしない。

炎を纏った拳の連打をシャツが焼けるのを無視して、腕が火傷するのを無視して防ぎ続ける。

そして、そんなサミュエルの行動に目を見張ったイザナの胸部に強烈な蹴りを入れた。

「げほっ、があ……やるのう。しかし、何故ワレは魔術使わんのじや？」

魔術を使えばシャツが焼けることはともかく、腕にわざわざダメージを負うことはない。

だが、サミュエルは使わなかった。

そして、イザナはニヤリと笑う。

「もしかすると、ワレは……魔術が使えるのか？」

「さあ、どうでしょうか？」

今度はサミュエルから仕掛ける。

サミュエルの目的は、とりあえずイザナを戦闘不能に追い込み、仲間を呼ばせ、もっと話が通じる相手に事情を話すことだ。

もっとも、そこでまた話が通じなければ連戦する覚悟はできている。

そんなことを思いながら、サミュエルは手刀をイザナへ振り落とし、彼が避けると追いかけるように蹴りを放つ。さらに蹴りを弾かれると、その勢いを活かして飛んで反対側の足で蹴りを放つ。

「凄い……」

「あれが本当に、ルード先生ですか？」
「……」

いつの間にかサミュエルを追って屋上までやって来ていた、メリル、ジュジュ、シユスランは驚きを隠せなかった。

この二ヶ月、生徒から理不尽な暴力を受けても笑っていた彼とは思えない。

何よりも……

「魔術を使う相手に、魔術なしで戦っている……」

メリルが驚き呟く。だが、それはジュジュもシユスランも同じ思っていた。

「なめんな、ワレ！」

防戦一方だったイザナが吼えると、いったんサミュエルから距離を置くと、その身に秘めた魔術を解き放つ。

「グ……」

「きゃあ！」

放たれた魔力の圧力に、生徒二人は圧迫感を受け、シユスランは彼女たちを守るように抱きしめる。

そんな中、サミュエルだけは平然と立っていた。
そして、イザナは体中に高密度の炎を纏った。

「なるほど、貴方は『炎装術』の使い手でしたか」

炎装術——それは、文字通り炎を纏い装備する術である。そうすることによって、爆発的な攻撃力、防御力を得ることができる魔術だ。

「その炎装術を見ると、第十階梯の強さは持っているようですね。階梯の申請はこまめにした方がいいですよ」

「そりゃあ、どうも！」

轟、と炎を纏い突っ込んでくるイザナを、サミュエルは流石に避ける。

その判断は正しかった。

サミュエルの立っていた場所は大きく削られていた。魔術なしで受け止めようなんて考えていたらどうなっていたかわからない。

「ワレは、冗談抜きで魔術が使えんのか？　なら、死ぬで？」

「ご心配なく」

イザナの言葉にサミュエルは短く答え、再度構える。

そして、あるうことが、この場で信じられないことを言った。

「それでは、対魔術師戦闘の授業を始めましょう。丁度良い教材も目の前にいますので」

その言葉は離れた場所にいる三人に言ったものか、それともイザナに向けた挑発なのか。

だが、その言葉に三人は驚き目を見開く。そして、イザナは挑発と受け取って、キレた。

「なめるんじゃ、ねえ！」

炎を全身に纏い、サミュエルに向かって勢い良く拳を吐く出すイザナ。

それに対して、紙一重で半步体を横にずらすことで拳をかわす。だが、その炎まではかわすことができなかった。

しかし、やはりサミュエルは気にしない。

「炎装術だけではなく、体に何らかの魔術を纏うことで爆発的な強さを得る装術系統魔術ですが、意外と弱点はあります。まず、視界に大切な目、音を聞く耳、呼吸をする口のどれかには無意識で魔術を纏いません。もっとも、あえて纏う魔術師もいますが、それは稀です」

そう言うと、サミュエルはイザナの口に向けて、指を二本突き出す。

そして鮮血が散った。

「ワレは装術に詳しいんじゃない……口の中、ザックリ斬りよって……じゃか、おかげで冷静になったわ」

サミュエルの指からポタポタと血が滴り落ちるが、それは彼のものではなくイザナの血だった。

互いに攻撃を繰り返し始める。

サミュエルは防戦一方だが、時折、口や目に向かって指をレイピアのごとく放つが、イザナも自分はどこを狙われているのか理解しているのを避けることはできる。

そして、次第にサミュエルの呼吸が荒くなっていく。

「まあ、無理もないのう。決定打は全部避けられても、ワシの炎は結構くらつとる。というよりも、それだけ炎を浴びて、まだ立っている方が不思議じゃ……」

「……それはどうも」

返事をするサミュエルだが、腕や顔は火傷をしていて、シャツはもうボロボロだ。

「これでワレが魔術が使えたら……間違いなく負けておったじやろうな」

「まるでもう貴方の勝ちみたいに聞こえますが？」

「そうじやろう、もう無理せん方がええ。ワシはワレが気に入ったじやから約束したる。あの女を殺すことは絶対にせんと、じやが依頼通り依頼人の下へは連れてかせてもらう」

「それでは駄目だと最初から言っています」

「まあ最後まで聞けや。ワレらの大將は無駄な殺生は嫌いじゃ。それに悪党も嫌いじゃ。じやから、依頼主があの子になんかしようとしたらしつかり止めたるわ」

イザナはそう言うのと、炎を纏い今度こそサミュエルを仕留めるために飛び掛った。

それに対してサミュエルは——真正面からその攻撃を受け止めた。

「なッ!？」

イザナが驚くのは無理もなかった。今、サミュエルがしていることは、炎の魔術の中に突っ込んだも同然なのだから。

だが、サミュエルは炎に焼かれ、顔を歪めるも、イザナを掴み放さなかった。

そして――

「ずっと、この瞬間を待っていました」

「なんじやと!」

「貴方の魔力が消費されるのを、今か今かと待っていたんですよ。確かに、貴方の炎装術は攻撃力も高く、防御力も高いです。ですが、魔力が消費されればその質も落ちます」

それだけ言うと、サミュエルは至近距離から強烈な蹴りを放つ。
イザナの腹部へ、何度も、何度も、何度も、何度も。

（や、やばい……これは……）

イザナは何とかサミュエルの手を解こうとするが、彼はどれだけの握力をしているのか一切放そうとしない。

攻撃を繰り返すも、動きはサミュエルの方が速く、避けられてしまふ。

まずい、とイザナは思う。まさか、サミュエルがこんなことをするとは夢にも思わなかった。

そんな馬鹿げた無茶をするのは一人だけだと思っていたからだ。だが、もうすでに何十と蹴られ、少しずつダメージを受けるようになって来てしまった。

（あの時と同じじゃ……）

イザナは蹴られながら、攻撃をしながら思い出す。

かつて、自分がまったく同じ方法で負けたことがあると。

そして、次第にダメージは大きくなり、纏う炎も弱くなりつつある。

「ようやく終わりですね、これから僕はまだ彼女を追いかけてはいけませんので、しばらく眠っていてください」

その言葉にイザナは笑った。

こんなにボロボロになっても、まだあの女を追いかけるのかと。褒賞がほしい訳でもなく、階梯をあげたいわけでもなく、ただ純粹に彼女のために追うというサミュエルに笑みを浮かべてしまった。次の瞬間、意識を刈り取るには十分な衝撃が、イザナの腹部を貫いた。

3

「対魔術師戦闘科教諭サミュエル・ルードと申します」(後書き)

最新話投稿させていただきました！

戦闘シーンはとても難しいと改めて思いました……。

ご意見、ご感想、ご評価をいただけると励みになります！ どうぞ
よろしく願います！

「……嘘」

ジュジュ・ヴァレンティンは驚きを心底隠せなかった。

彼女にとって、魔術師が一般人に敗れることはないと思っていた。サミュエルの説明を受けた後も、理論的にそういう場合もあるとは思って入れたが、心のどこかではそんなことはないと思っていたのも事実だった。

だが、彼はやってしまった。

第九階梯の魔術師を、魔術を一切使わずに。

これは認めるしかなかった。魔術師が必ずしも、魔術を使わない者に対して絶対ではないということ。

メルル・ウェラーもシスラン・クレイドルも呆然としていた。

無理はない。彼はそれだけのことをしたのだから。

「……さて、彼女を追いかけましょう」

体中を火傷だらけにしたサミュエルは、今までの戦闘などなかったかのようにそんなことを言う。

だが、いまいちその体の動きは鈍い。

彼がフィアトを追おうとした、その時だった。

「その必要はない」

「ぐええッ！」

一人の男が突然現れたのだった。

倒れているイザナを踏みつけて。

「……どちら様ですか、というか、踏んです、踏んです」
「む……おお」

気付いていなかったのか、少し驚いたような声を出すとイザナの上から降りる。途中、ぐへ、とイザナが呻いたが気にしない方向で。男はサミュエルよりも長身だった。そして、その体はスマートながら鍛えられているのが良くわかる。青い上下の服を着ているが、武器らしい武器は持っていない。

この男もイザナと同じタイプかと警戒しつつ、サミュエルは尋ねた。

「その必要がないとは、どういうことでしょうか？」
「そのままの意味だ」

その言葉と同時に、続けて三人が屋上に現れる。女性が二人、男が一人だった。

そして、男の肩には拘束魔術で拘束されているフィアトが担がれていた。

「なるほど、そういう意味でしたか」
「そういうことだ。残念だが、この女は依頼人に渡す。イザナの言った通り、決して悪いようにはしないから安心しろ」
「安心しろ、ですか……それは誰にとつての安心ですか？」
「……」

答えない男に、サミュエルはさらに言葉を続ける。

「どうやら貴方たちは隠れて話を聞くのが好きみたいですね。でし

たら、もうわかっているでしょう。依頼人に彼女を渡したら、彼女だけがただの連続殺人犯として捕まってしまう。捕まるのはしかたがありません……ですが、きっかけを作った者をそのままいさせるわけにはいかないですよ！」

「……別に隠れて話を聞いてたつもりはないんだがな。正直、お前がイザナに勝つとは思わなかった。だから、イザナが勝つてからと思った。アイツは喧嘩を邪魔されると怒るからな」

男は言い訳をするように、髪をいじりながら苦い顔をする。

「それは残念でしたな」

「ああ」

「それで、今度は貴方がお相手ですか？」

サミュエルの言葉に、男は首を傾げた。

「どうしてだ？」

「私は貴方の仲間を倒しました、その敵を討たないのかと聞いているんですよ」

「ああ、そういうことか。別に殺されたわけでもない、ただ負けただけだ。そのことで俺たちがお前にどうこう思うのは筋違いだ」

なるほど、と合点がいったように男は頷くとそれを否定した。

「そうですか……では、残る問題は一つです。その女性を私に任せてください。貴方たちが本来受け取る報酬の倍お金は払います、それで良いでしょうか？」

「駄目だ。ギルドとしてそれはできない。まあ、俺はそれでも良いが、イザナがそういうのにうるさいんでな」

「残念です」

サミュエルは拳を握り締めて構える。

「ルード先生！」

「もうやめてください！」

生徒たちが信じられないという顔をし、サミュエルのためを思っ
て叫ぶ。

「そんなにボロボロなのに、四人も相手にできるわけありません、
馬鹿なことはやめてください」

シュスランも同じだ。

「教師なのか……？」

「ええ、まだ新米も良いところです」

「生徒が心配してるぞ、生徒に心配かける教師は駄目だろう」

「いいえ、今はプライベートな時間なのでお構いなく」

サミュエルはやる気だが、男はいつも戦いたくはないようだ。
睨むサミュエルとその視線を受け止める男の間に割り込むように
して、男の後ろにいた少女たちが口を挟む。

「もう、スロやめなさい！ イザナを早く治療しなきゃ！ 肋骨な
何本か折れてるわよ」

「そ、そうです、あまり必要のない戦いは、避けるべき、だと」

白衣を着た金髪を短くした小柄な少女と、サミュエルとそう変わ
らないローブを纏った銀髪の少女が言う。

白衣の少女が言った、スロという単語にサミュエルは反応した。

「スロ……貴方はスロ・シルバーマンですか？」

「む、知り合いだったか？」

「いいえ、初対面です……が、まさか第一五階梯の剣士にこんな場面に出くわすとは思ってもみませんでした」

第一五階梯、その言葉にメリルたちが息を呑むのが分かる。

目の前の男——スロ・シルバーマン。彼は、ギルドが決めた階梯の中で最も位の高い階梯いる剣士だ。

彼を知る者が多いが、実際に見た物はそういない。

だが、その相手がサミュエルの目の前にいるのだ。

「話はいいから、君も早く火傷の治療をしないと！ イザナよりも、君のほうが重症よ！ 私は医療魔術師だから、早くこつちに来て！」

白衣の少女がサミュエルに向かって声を張り上げた。

確かに彼女の言うとおり、サミュエルの火傷は酷いものだった。

「いえ、お構いなく。この程度の怪我は慣れていますから」

「お構いなくって……ふざけているの？」

そんなサミュエルの返答に、小柄な少女の可愛らしい顔に怒りが表れる。

「そんな場合じゃないでしょう！」

「いいえ、私にとって、火傷の治療よりも、彼女を一刻も早く学院へ連れて行くことの方が重要です」

「お前も頑固な奴だな」

スロは苦笑する。

「だが、その火傷だと本当に死ぬこともあるぞ？ お前は自分よりも、他人が大切か？ 今日会ったばかりだろう？」

「そうですね……彼女がただの殺人犯なら僕だって放っておきます。ですが、復讐に走る彼女に……僕は同情してしまいました。そして、いいえ、よしましょう。それよりも、最後にもう一度お尋ねします。依頼料報酬の倍、いいえ三倍を貴方たちにお支払いします。ですから、彼女をこちらへ預けてくれませんか？」

「悪いが、答えは変わらない」

「……そうですね、では——奪わせていただきます！」

それだけ言うと、サミュエルは相手の反応を待たずに駆けだした。

「ウェッチ、でかい方の剣をよこせ！」

「は、はい」

スロが叫び、ウェッチと呼ばれたローブの少女が慌てて返事をする。

だが、その時には既に、スロの目の前にサミュエルは接近していた。

「最初に貴方から潰します、スロ・シルバーマン」

サミュエルは手加減など一切無しの攻撃を繰り返した。相手は第一五階梯だ。気を抜いたらこちらがやられる。

「やるな」

サミュエルの猛攻を、スロは左手だけで捌く。そして――

「スロ、い、いきます!」

「おう」

ウェッチの声に返事をする、彼女の背後から巨大な一本の鉄の塊がスロに向かって放たれた。

「なっ!」

思わず、後退してしまうサミュエル。

だが、スロは避けようとせずに、その鉄の塊を右手だけで掴んだ。その光景にサミュエルだけではない、見守っていたメリル、ジュジュ、シユスランも驚きを隠せなかった。

幅は四十センチ、長さは一八〇センチ近い、その鉄の塊を片手で安々と受け止めたことにも驚きを隠せなかったが、もっと驚いたのは――その鉄の塊には柄があり、剣の形をしていたことだ。

「……どんな腕力をしているんですか、貴方は……」

驚きを通り越して呆れるしかない。

これ程なのか、第一五階梯という存在は。

「俺には魔力がない」

スロは呟くように言う。

そして、ブオンと音を立てて鉄の塊を振るうと、サミュエルに向かって構えた。

「だからこそ、剣だけで強くあろうとした」

言葉を終えると同時に、スロは駆けた。動きも速い。

振り下ろされる鉄の塊を受け止めようとするほどサミュエルも馬鹿ではない。

サミュエルは大きく避けようとして、なぜかそうすることなく数歩後ろに下がっただけだった。

ドゴンツ、と剣を振り下ろしたとは思えない音が聞こえ、先ほどまでサミュエルが立っていた場所がえぐれる。同時に、挟まれた瓦礫の破片がサミュエルを襲った。

サミュエルは軽く舌打ちすると、弾くことができるものは弾き、駄目なものは甘んじてその身に受けた。

「やはり、速いな……」

「……それは、どう、も」

瓦礫の破片を浴びたサミュエルの体は、骨すら折れていないものの、打撲や裂傷だらけになった。

剣を振るっとは思えない破壊力だ。

「……」

「どうか、しましたか？」

黙りこむスロに、息を切らして尋ねる。

すると、彼は少し気まずい顔をした。

「悪かったな。俺の考えが足りなかった」

「……何がです？」

「お前が避けたのに避けなかったのは、瓦礫が後ろの三人に届かないように体を盾にしたんだろう？」

「そついう、ことは、気付いても言わないのが、美德ですよ」

息を切らしてサミュエルは返事をする。

スロの言葉を聞いて、メルルたちはハッとした。確かに、サミュエルが避けていたら瓦礫は容赦なく自分たちを襲っていただろう。だからといって、サミュエルが怪我を負ってまで守る必要はない。

「先生、もうやめてください！ 第一五階梯の、しかもスロ・シルバーマンを相手にして、魔術の使えない先生が勝てるわけが！」

思わずメルルは叫んでいた。

血だらけになり、息を切らし、それでもまだ戦おうとするサミュエルを止めたかったのだ。

メルルもフィアトの動機は聞こえた。酷い話だと思う。恋人を殺され、そのことを隠蔽されるなんて。だが、それでも連続殺人事件の犯人なのだ。サミュエルがそこまで必死になる理由がわからない。

「ルード先生！」

「もう、やめなさい！ ルード先生！」

ジュジュも叫び、シュスランですらも大きな声を出した。

そんな彼女たちに言葉に、サミュエルは笑みを浮かべた。心配されているのが、不謹慎だが少し嬉しかったのだ。

スロはこの辺りでお終いだろうと、声を掛ける。しかし、それがサミュエルを変えるきっかけになるとは思ってもいなかった。

「もうやめておこう。心配してくれる人間がいるんだ、赤の他人のためにそこまで体を張る必要はないだろう」

「……」

「それに、魔術が使えないのなら、お前に勝ち目はない。さっきも言ったが、決して悪いようにしない、ここらでもうお終いにしよう」
「……けないでください」

「うん？」

その呟きが小さくて、スロには聞こえなかった。

「ふざけないでください！ 赤の他人の為に、体を張って悪いでしょうか？ 魔術が使えないなら、お前に勝ち目がないですって？ …… そんなに見たいのなら見せてあげますよ、僕の魔術を！」

その場に居た全員が驚いた。

散々、魔術を使わなかったサミュエルが、突然魔術を使うと吼えたのだ。

口調は変わらないものの、温厚そうであった彼が殺気立ち、瞳も獣の様にギラついている。

一瞬にして、その変わりように、突然魔術を使うと言ったことに一同は同様に隠せない。

「僕は、教師になるときに願掛けをしました。極力魔術は使わない、母さんみたいな教師になりたかったから」

嘘のような魔力がサミュエルの体があふれ出す。

その圧力にスロ以外の誰もが押しつぶされそうになった。

「う…… な、なんじゃ、この魔力は……」

気を失っているイザナも目を覚ましてしまうほどの魔力だった。

「僕の魔術は誰かを傷つけることしかできない。だから、教師になったから使いたくありませんでした。しかし、そんな願掛けのせいで、フィアトさんが連れて行かれ、生徒や同僚までが怪我をしそうになってしまった」

それは自分自身に対しての強い怒りと、後悔だった。
対してスロは目を細め、鉄の塊を構えた。

「……もう一度、最後に聞いておきます。その女性を渡してください」

「断る。あの女が被害者でもあることはわかった、それに貴族が関わっていたことも。だが、正直に言うと、俺は仲間や気に入った相手以外はどうでもいいんだ」

「わかりました。会話での解決は完全に無駄ということですね」

構えるスロに対して、サミュエルはただ立っているだけだった。
そして、サミュエルは空を見上げる。すっかり、空は暗くなっていた。

「ああ、いつの間にか夜になってしまいましたね。後悔してください……夜、僕に魔術を使わせたことを」

そして、サミュエルはその溢れる膨大な魔力を、魔術に変えた。

4 「というか、踏んでます、踏んでます」(後書き)

最新話投稿させていただきました！

新しい登場人物スロと仲間たちです！ とりあえず、次話で戦いは決着となります！

ご意見、ご感想、ご評価いただけると励みになります！ どうぞよろしく願います！

5 「またな、サミー」

場所は王都イシュタンベルアの中心にある城で、ランジエスター王国王ガイセイン・チェスターは二ヶ月ぶりに感じたその魔力に笑みを浮かべた。

「見ろよ、やっぱりサミーの忍耐力はこんなもんだ。いや、二ヶ月も良く持ったほうだったか？」

「やめてください、父上……みつともない」

年甲斐もなくはしゃぐ父親を見て、ガイセインの娘、王女カリムは溜息を吐く。

「まあ、サミーの沸点は低いからな。やっぱり良く持ったほうだな。しかし、カリム。賭けは俺の勝ちだな」

ガイセインはニヤリと笑った。

「父上は三ヶ月以内、私は半年持つと賭けましたからね」

「しかしだ……サミーの実力なら、十三階梯程度なら魔術無しで余裕だろう。そうになると、相手は……十五階梯辺りか？」

「そうになると、敵対している相手も限られていますね」

「まあ、アイツ自身も階梯を持つなら十五階梯あたりなんだろうが、精神的にムラがあるかなら……厳しくすると十四階梯か？」

カリムは思う。この父は、相変わらずサミュエルの話になると子供みたいに楽しそうな顔をする。

そんな風に娘に思われていることを知らないガイセインは、うーんとうなつてから笑う。

「だが、まあ……魔術を使ったサミーと戦うのはそう簡単なことじゃないぞ。なんせ俺が直々に鍛えたんだからな」

「ですが、本来の魔力が出ていませんね？　どうかしたのでしょうか？」

「どうせ魔術を使わないと強情に魔術無しで喧嘩したんだろう、それで体力、魔力もろもろ消費したんだろうな」

「それがサム的美徳です」

「ああ、だが弱点でもある。サミーはまだ発展途上だ、だということに自身に枷を付けたがる。俺はやめておけていったんだぜ？　それに、何だ、あのご丁寧な喋り方は？　教師だから喋り方が丁寧とかって、子供かよ？」

そんな言葉を言いながらも、誇らしげな顔といい、まるで息子を自慢する親馬鹿のようだった。

「とはいえ、いくら魔力が落ちようが、私は『魔術師殺し』などと馬鹿げた二つ名が付けられてからサムが負けるところなんて、お父様以外ではみたことはありません」

「確かにそうだな。だが、俺以上の化け物だって何人もいるぞ」

「一応、自分の力が異常だということは自覚しているんですね……それで、父上よりも異常な方とは？」

「そうだな、一番最初に思い浮かぶのは……スロだ。スロ・シルバーマンだ。アイツに剣を持たせたら、神ですら逃げ出すさ」

そう言ってガイセインは豪快に笑った。

もつとも、さすがの王も、まさかそのスロ・シルバーマンがサミユエルと戦っているとは夢にも思わなかった。

「凄い魔力だな、魔術師ではない俺でも、その魔力だけで体が削られている気分だ」

鉄の塊を構えたまま、スロ・シルバーマンは笑う。

「よく言いますよ、余裕な顔をしているじゃないですか……さて、貴方とお喋りしているのも出会いが違えば楽しかったかもしれないかもしれませんが、お終いにしましょう」

「そうだな。お前もそろそろ体力が限界だろう？ だから、魔術を使うことにしたんだろ？」

「そこまで分かっているなら、もう言葉はいりませんね——行きます」

「ああ、来い！」

瞬間、魔力の圧力が消えた。

同時に、サミュエルの姿も。

「な、なんなの、一体！ どうして急に、圧力が消えたの？」

混乱するメルルは叫ぶ。

この状況についていけないのだ。それはジュジュもシュスランも一緒である。

何せ、今まで魔術が使えないと思っていたサミュエルが魔力を解き放っただけでも驚きだというのに、その魔力の圧力に押しつぶされそうになったからだ。

スロの仲間も同様だった。

魔力というのは大き過ぎれば負担となる。本人にも、他人にも。本人ならその魔力を使いこなせるようになれば耐えられる。だが、他人は違う。相手の放つ魔力の圧力に押しつぶされるといことは、相手の魔力と自分の魔力にももの凄い差があるということだ。そして、それに耐えられる者は、その人物と同じ力量、もしくはそれ以上の力量の持ち主だと言うことであつた。

「……あ」

誰が言ったのだろうか？

その呟きと同時に、消えたサミュエルがスロの後ろに現れた。

そして、右腕を振るう。

全員が気付いた。サミュエルの右手には、黒い線の集合体のようなものが握られていることに。

「……あれは、闇の魔術……」

ローブを纏った銀髪の女性、ウェッチが呟く。

「何、じゃああれは闇の剣なの？」

「い、いいえ、ヴィヴィアンも、感じませんか？ あれは、闇の剣、ではなくて、闇、そのものを凝縮しています」

どこにそこまでの力があるのか、スロは鉄の塊を振り回し、サミュエルの攻撃を受け止める。

「えーと、私、攻撃系の魔術ってあまり詳しくないから、凄いのかどうかかわからないんだけど……」

ヴィヴィアンと呼ばれた、白衣を着た小柄な少女は首を傾げる。
彼女の問いは、その場にいるサミュエルとスロ以外の疑問でもあった。

「つ、つまりですね、あの闇が、あの人の手に、握られてから、魔力の圧力が、消えましたよね？」

「うん」

「だが、その、ほとんどの魔力が、純粋な闇、となって、いるんです。だからこそ、スロの剣と打ち合っても、平気です」

彼女の説明はヴィヴィアンにはまいちわからない。多分、自身でも理解できていても、納得ができないのかもしれない。
だが、これだけは間違いがなかった。

——スロの剣と打ち合っても平気——

メアリたちは分からないが、スロの仲間であるヴィヴィアンたちを驚愕させるには十分だった。

スロの持つ巨大な剣、いや、剣と言って良いのかすらわからない鉄の塊は、多くの敵を、武器を、防具を、そして魔術を破壊してきた。

それは鉄の塊が凄いのか、それを振り回している使い手のスロ・シルバーマンが凄いのか、それとも両方なのかは分からない。

だが、自分たちのギルドの頭領の実力は、一緒にやってきた仲間ですら未知の領域だ。

そのスロと互角に見えるほど、やり合っているサミュエルの實力は？

「少なくとも、ワシらよりは断然上じゃのう」

イザナが悔しそうに呟く。

彼にとっては悔しい限りだろう。魔術を使わずに、倒されているのだ。

だが、同時に、魔術を使われていれば、瞬殺されていたかもしれないと思うてしまう。

「凄い……あれが本当にルード先生なの？」

「信じ、られません」

「……」

サミュエルが教師として、ランジエスター魔術学院にやってきてから、一度も魔術を使ったことがなかった。それゆえ、魔術が使えないという噂が立ち、高等部の生徒から理不尽な暴力を受けることまであった。

彼はそのことに対して気にはしていなかったが、その理由も頷ける。

あれだけの魔力を持ち、第十五階梯の剣士と互角と思える戦闘をするだけの實力を持つのだ。生徒の暴力や心無い言葉など、痛くもかゆくもないだろうと彼女たちは思う。

そして、それぞれが見守る中、何度も打ち合ったサミュエルとス口は一度距離を置いて止まる。

「やるな、お前」

「ありがとうございます。しかし、本気を出していない貴方に言われても嫌味にしか聞こえません」

「そういうお前も、本気出してないじゃないか」

「私ができる現状での本気はこれが限界です。他のは貴方には通じないと思いますし、それ以外は他の方が巻き込まれる危険性がありますので」

二人の会話を聞いて、ゾツとしない者はこの場にいなかった。
まだ本気ではない。

すでに、建物の屋上はボロボロだ。この建物が無人だったのは幸
いだが、何事かと駆けつけた野次馬が多く集まっている。

つまり、二人はそんな野次馬などにも気を使って戦っているのだ
った。

「これじゃあ決着がつかないな……」

「そうですね。では、純粋な力比べをしましょう」

「シンプルでいいな。じゃあ俺は本気で剣を振ろう。お前は本気で
その手の闇に魔力を注ぎ込め」

「いいでしょう」

ズン、と剣を構えるスロ。対してサミュエルの手にある闇が色濃
く、太くなる。

同時に、魔力の圧力が周囲を襲う。

「行くぞ！」

「どうぞ」

そして二人は刹那の本気を互いにぶつけ合った。

負けたのはサミュエルだった。

現状で込められる魔力をありったけ込めた闇は簡単に、ではない
ものの破壊され、巨大な鉄の塊が体を吹き飛ばした。

全力ではなかった。いや、たった今振るった攻撃は今できる全力

に間違いない。それでも魔力で編んだ闇が破壊されるとは思わなかった。それはスロ・シルバーマンが闇そのものを破壊したということだから。

自身の体が両断されていないのは、闇とぶつかったことでスロの勢いが落ちたのか、それとも手加減をされていたのか。

「お前の負けだ」

その通りだ。そう思いながらも、サミュエルは必死に体を動かそうとする。

が、体が動いてくれなかった。すでに限界だったのだ。

「重度の火傷に、体力の低下、本来の魔力を込めることはできなかったみたいだな。イザナと戦っていないければ、いや魔術を早い内に出していれば結果はどうなっていたか」

「言い訳はしません。ですが……」

悲鳴を上げている体に鞭打って、上半身だけでも起こす。

スロはそんなサミュエルを見て、驚いた顔をする。

「なんですか、負けたからといって諦めたわけじゃないんですよ」

「これ以上は命に関わるぞ」

「ですが、ここで私が引けば、フィアトさんの命にも関わります」

意見をまったく変えようとしない、強情さにスロは笑った。

「強情だな。いや……そこまでいくと、もう、そういう次元じゃないな」

「さあ、続きです……」

その強情さに、ついスロは笑みを浮かべてしまう。

サミュエルは時間を掛けて、ようやく立ち上がるが、眩暈がする。内臓がやられているのか、口の中に血の味もする。

「気付いていないかもしれないが、治療しないと死ぬぞ。本当に」

スロはきつと呆れているんだろう。だが、その顔が見えない。悔しい。だが、諦められない。

サミュエルは拳を握ろうとして、腕に感覚が無いことに気付いた。

「……もう、いいよ」

それでも拳を握ろうとしたサミュエルに、声が掛けられた。

「ありがとう……だけど、もういいよ」

フィアト・ロムだった。

拘束魔術を掛けられているのは変わらないが、目を覚ましていた。サミュエルには見えないが、その顔は以前の美しさを取り戻し、涙に濡れていた。

「ありがとう、私のためにそこまでしてくれて。私も、私の恋人も救われるよ」

「な……を」

何を諦めているんだ、と声を出したつもりだったがもう声もでない。

「君みたいな善人はいるんだね、私は復讐ばかりで何も見えてなかった……君たちも巻き込んでごめんね」

それはメアリとジユジユに向けられた言葉だった。

「まったく、これじゃあ俺たちが完全に悪者だな。ギルドの依頼を全うしようとしただけなんだが」

「……」

声がまったく出ることができないサミュエルは、棒立ちだ。意識を失ったほうが楽だろうが、彼自身がそれを許さなかった。

それに気付いたのか、スロは笑うと、サミュエルに聞こえるように大きな声で言う。

「この勝負、俺の勝ちだ！ だからこの女は俺が責任を持って、学院まで連れて行く！ いいな、イザナ！」

「勝手にしとけ！ どうせ、ワシは負けたんじゃ、文句は言わん。それに、ここで文句言ったらカッコが悪いわ！」

拗ねたように、イザナが声を荒げる。

「ヴィヴィアン、コイツを治療してやれ！ 俺はコイツが気に入った、死なせたくない！」

「わかったわ、任せて」

スロが大声でヴィヴィアンに指示をだし、小柄な彼女が白衣を翻してトコトコと近づいてくる気配を感じながら、サミュエルの意識は落ちた。

「やっと、気絶したか？」

「えっと、気絶というか、意識不明かな？」

「だが、何とかなるだろう？」

「もちろんよ！ でも、彼、凄いわ、一体どんな鍛え方したらこうも戦いに特化した体になるのかしら？ スロの攻撃を受けて形がそのままって、それだけで異常よ」

酷い言われようだ。

ヴィヴィアンはそんなことを言いつつも、手だけはしっかりと動かしていく。

呪文が書かれた包帯を取り出し、薬品を浸し、呪文を唱える。医療魔術だ。

スロはサミュエルをヴィヴィアンに任せると、鉄の塊を担いだままメリルたちの下へ向かう。

「ヴィヴィアンは第十一階段の医療魔術師だ。任せとけば、大丈夫だ」

「大怪我させた貴方の台詞ではないような気がしますか？」

スロに怯え、後ずさった生徒の代わりにシユスランが答える。

その声には、敵意が含まれている。

だが、そんなことをスロは気にすることなく、続ける。

「アイツの名前は……さみゆ」

「サミュエル・ルードです」

「言いづらいな……ええと、サミーでいいか。サミーが目を覚ましたら伝えておいてくれ。お前が気に入った、俺のギルドに入らないか？ とな」

シユスランは眼を見開く。

まさかスカウトするとは思わなかった。

「伝えるだけ、伝えておきます」

「ああ、頼む」

「待つてください」

仲間の下へと戻ろうとしたスロをシユスランは引き止める。

「どうした？」

「本当に、貴方は彼女を学院へ連れて行ってくれるのでしょうか？」

「ああ、そうだが？」

それがどうした、そんな感じで返されてしまうと、ならば戦う必要もなかったのではとシユスランは言おうとしてやめた。

スロはサミUELと戦い、その戦いを通じて彼を気に入ったのだ。だから、折れてくれた。サミUELの意思を汲んでくれたのだ。

「いいえ、なんでもありません。それでは、彼女のことお願いします。私は彼と生徒を」

「わかった」

スロは返事をする、仲間に指示を出す。

「ヴィヴィアンはサミーとイザナを治療しておけ、二人は俺と一緒にランジエスター魔術学院へ行くぞ」

仲間たちが頷くのを確認してからスロは意識を失っているサミUELの方を向く。

そして、どこか懐かしそうな顔をしてから、聞こえないと分かつ

ているのに声を掛けた。

「またな、サミー」

5 「またな、サミー」（後書き）

一ヶ月以上時間が空いてしまいましたが、最新話投稿させていただきました。

これで長い序章のようなものが終わりました。次からは新しい話が始まります。

ご意見、ご感想、ご評価をして頂けるととても嬉しく思います。どうぞよろしくお願いします。

6 「だから俺は、アイツが気に入ったんだよ」

「あらあら、これは珍しい人が来てくれましたね」

ランジエスター魔術学院院長、テリー・チェスターは、学院長室で拘束魔術によって捕縛されているフィアト・ロムを担いできたスロ・シルバーマンを迎えていた。

「久しぶりだな。確か最後に会ったのは、お前が学院長になった時に顔を出して以来だったか」

フィアトを部屋にあるソファーに座らせながら、スロは返事を返す。

「そちらの女性が？」

「そうだ。本来なら、ギルドに渡すんだが……サミーの心意気を汲んでこっちに連れてきた。悪いようにはしないだろう？」

「サミー？ ああ、サミュエル先生ですか。相変わらずですね、スロは」

あまりにも変わっていない知人に思わず笑みをもらしてしまう学院院长だった。

「そうか？ それで、どうなんだ？」

学院院长はスロの言葉に頷く。

「ええ、こちらの方でも事情についてある程度の把握はしてあります。エリック家、そして手を貸したギルド職員も裁きを受けることになるでしょう。もちろん、貴方もですよ、フィアトさん。事情は存じていますが、それでも一線を越えてしまった貴方は罪を償わなければいけません」

「……はい」

フィアトは学園長の言葉に頷くも、その顔色は冴えない。

犯した罪を自覚しているのか、それとも復讐しきれなかったことが心残りなのか……。

学園長はそんなことを考えていたが、フィアトの口から出たのは意外な言葉だった。

「あの、私がこんなことを聞ける立場ではないのですが……あの人は助かるのでしょうか？」

あの人とは、サミュエルを指しているのだろう。

「サミュエル・ルードの心配なら大丈夫ですよ、一見頼りなさそうに見えますが、彼は超が付くほどの一流の魔術師であり、戦闘を得意とする者です。そう簡単に死んだりはしません」

まさか、スロと戦うとは思いませんでしたが、と学園長は付け足す。

「心配しなくても、俺の仲間の医療魔術は信頼できるから大丈夫だ」
一番サミュエルが重症を負った男がそんなことを言う。

それでも、学園長とスロの言葉に彼女はホッと息を吐いた。

「それではフィアトさん、貴方のこれからのお話をしましょう。決して悪いようにはしません、貴方を助けようとしたサミュエル・ルド先生に誓って」

酷く嫌な夢を見ていた。

「ふざけんなよ……何、俺の許可なく死んでんだよ！」

まだ、「魔術師殺し」などという、恥ずかしい二つ名を付けられていた頃だ。

「魔術師殺し」は息絶えた部下を抱きかかえて、目の前の老人――大貴族、ゼナック・フランベルクを睨みつけた。

コイツで最後だ、コイツでお終いだ、コイツのせいで仲間が、そして母さんが……。

押さえきることのできない感情が体中で暴れているのが良くわかる。

「貴様が有名な「魔術師殺し」か……若いな」

自身の屋敷で、雇った傭兵やギルド、魔術師が大量に死んでいるというのに、「魔術師殺し」の部下も死んでいるというのに、老人ゼナック・フランベルクは顔色一つ変えずにそんなことを言った。

ゼナック・フランベルク。貴族の中の貴族である。王を傀儡にし、貴族という魔術師が国を治めることこそ良い国であると信じて疑わない「貴族派」のトップである。

同時に「魔術師殺し」の憎悪の対象であり、血縁関係者でもある。

「まさか、あのガイセインが我ら貴族に楯突こうとはな。よりにもよって、この「貴族派」に楯突くとは愚かとしか言いようがない。傀儡はおとなく傀儡のまままで良いというのに」

老人は失笑する。

「……お前はどこまで偉いんだよッ！ 何様だッ！」

「魔術師殺し」が吼える。だが、その咆哮に近い大声に、気後れすることなく老人は淡々と答えた。

「私がこの国を支配している。偉い、などという子供の言葉で言い表すものではないが、少なくとも王よりは偉いな」

まともな国であれば考えられない発言をするゼナック。だが、その言葉は正解であった。

今現在、この国を仕切っているのは「貴族派」であり、そのトップであるゼナック・フランベルクだ。

王位に就いているガイセインの言葉すら無視し、それが許されるほどの権力を持ってしまった。

「この老害が……」

「ふん……しかし、解せん。私は上手くやっている。国を動かし、近隣諸国から手を出されないようにし、私の管理する街は治安が悪いわけではないし、税も軽い。有能な王でありたいなら、私を殺さずに上手く使うべきだ」

「それは、遠まわしに死にたくないって言ってるのかよ？」

「いいや、単なる疑問だ」

じゃあ、教えてやると「魔術師殺し」は口を開いた。

「アンタは確かに有能だ。それは王も認めてる。だけど、結局のところ、その他の馬鹿な貴族と根本が代わらないんだよ。だから、王も俺たちみたいなのを作り上げて、少しでも害となる貴族は殺さなけりやいけないなんて、自分自身を追い詰める決断をしたんだ」

「なんだと……？　口の聞き方に気をつけるよ、小僧。その言い方だと、まるで私が今まで殺されてきた者と同じように聞こえるぞ」
「その通りだよ、アンタ気付いてないのか？」

初めて、老人の顔に怒りの感情が表れた。

「アンタは確かに有能だ。だが、最高じゃない。少なくとも、有能じゃなくとも最高のガイセインの作る国の方が、俺は見たいね」

「子供が何を言うかと思えば……」

「魔術師殺し」は老人の言葉を遮って続ける。

「アンタはどうして自分が命を狙われているか分かるか？　確かに、アンタみたいな有能な人間なら使おうと思えば使える。だけど、結局のところ——使おうと思わなければ使わなくてもいい程度の有能さなんだよ」

「……小僧、よほど苦しんで死にたいようだなッ！」

怒りの形相で吼えたゼナックを見て「魔術師殺し」は笑う。

「自分の立場を考えろよ？　俺が、お前を殺しに来たんだ」

「私が、このゼナック・フランベルクがただの老人と思うな！　老いたとは言えど、高位魔術師の一人、ギルドで言えば十三階梯に値

するぞ！」

老人から炎が生まれる。

禍々しい、歪な魔力を宿した炎だった。その炎は、自身が雇った傭兵たちすら消し炭にしていく。

その容赦なさ、非道さに舌打ちしながら、「魔術師殺し」は老人に向かって言葉を吐いた。

「そうそう、言うのが途中だったな。アンタを殺す理由だ、死ぬ前に教えといてやるよ。アンタさ、どうして今まで殺された馬鹿貴族たちの悪事を見て見ぬふりしてた？ 結局のところ、自分の派閥なら何しても良いとか、甘い考えがあったんだろ。だから、アンタは所詮その程度なんだよ」

「たかが、それだけでこの私の命を狙ったというのか、愚か者めツ！」

唾を飛ばしながら炎を放つゼナック。

だが、その炎を構えたナイフで一閃。「魔術師殺し」の一振りですべて炎は断ち切られたのだった。

「たかが、じゃねーよ。馬鹿野郎。本当に国のことを、民のことを考えている奴なら、たとえ派閥が同じだからといって、いや、同じ派閥だからこそ厳しくすべきだったんだ！」

「魔術師殺し」はゼナックを殺すべく、ナイフを構え走る。

襲い掛かってくる炎を切り裂き、避け、あえて潜り抜け、ただただ殺す為に。

しかし、そんな二人を止める者がいた。

「もう、やめてくれ！！」

少女と女性を庇いながら現れた、一人の男性。ゼナック・フランベルクの息子である、セオル・フランベルクだった。

「……嫌な、夢を見ました」

サミュエルが目を覚ますと、薬品の匂いのするベッドに横たわっていた。

ベッドを囲むように、清潔なカーテンが囲っている。

「あら、もう目が覚めたの？」

サミュエルの声を聞いたのだろうか、カーテン越しに女性に声を掛けられて「ええ」と返事をする。

すると、カーテンを開けて現れたのは、白衣を身に着けた小柄な少女だった。金髪を動きやすいように、それでいて最近の流行などを取り入れているショートカットにしてい、それがまた良く似合っている。

「確か、貴女は……スロ・シルバーマンの仲間でしたね」

「うん、ヴィヴィアン・ウルッドよ。よろしくね」

満面の笑みで微笑まれてしまい、はあ、としか返事ができなかったサミュエル。

白衣を着ているところから推測すると……医者が医療魔術師？いや、見習いかな、年齢的に？

そんなことを考えていると、少女——ヴィヴィアンは笑みのまま、医療魔術を展開していく。

「な……」

つい、驚いてしまったサミュエル。

しかし、無理がなかった。展開された医療魔術はかなり高度なものだったのだ。とてもではないが、十代前半に見える少女ができるような魔術ではない。

もしかすると、よほどの天才なのかもしれない。

そんなことを思っていると。ヴィヴィアンが苦笑の笑みを浮かべて、サミュエルの驚きに答える。

「あのね、必ず誤解されるんだけど、私ってこれでも二十歳なのよ？」

むん、と可愛らしく胸を張る仕草はとても愛らしいもので、とても二十歳には見えなかったと後にサミュエルはそう語った。

「彼女は、フィアトさんはどうなりましたか？」

「彼女なら、スロが魔術学院へ連れて行っただわ」

約束通りにね。と、付け足して笑うヴィヴィアンの言葉にホッとしたサミュエル。

スロ・シルバーマンが嘘を吐くとは思えない。少ない時間であったが、そういう男だと感じた。それに、彼女も嘘を吐いているようには見えない。

「君の生徒さんは、もう一人の先生が寮まで送るって言ってたわ」「そうですね、それなら安心です」

きつと嫌な思いをさせてしまったらう。

生徒たちには休み明けの学校で謝罪をしよう。クレイドル先生には……奮発しようと思いに決めるサミュエルだった。

「それにしても……」

ペタペタと触診するようにサミュエルの体を触るヴィヴィアンだが、サミュエルのこの状態はアウトだ。

包帯を巻いているとはいえ、上半身の服を着ていない男に小さな少女……外見がだが、そんな彼女が吐息の掛かりそうな距離で体を触っているのだ。

突然の第三者が現れたら、絶対に自分は社会的に抹殺されると本気で思う。

「君の魔力量って凄いな……これだけの魔力があるから魔力抵抗力がなくて、イザナの炎を当てられてもすぐに大怪我にならなかったのね」

そんなサミュエルの心情など気にせず、ヴィヴィアンは触診を続ける。

「ねえ、君って保有魔力が異常だって自覚してる？」

「ええ」

化け物だと思っほどの力を持つこの国の王でさえ、サミュエルの保有魔力量には驚いていたのを覚えている。

「コレだけ規格外の魔力だと、体の方が持たないんだけど、君の場合は体もそれように作り変えてある。まだ発展途上だけど、凄いわ

……凄く努力をしたでしょう」

ヴィヴィアンの言葉に返事ができなかった。

当時は努力とかではなく、もつと違うものを原動力にして、血反吐を吐きながら過ごしていたから。

その結果として、魔力を制御化におけるようになった。

たまに、そのことが良かったのか悪かったのかわからなくなる時がサミュエルにはある。

「……えつと、何か悪いこと言ったかしら？」

気まずそうな顔をしているヴィヴィアンに顔を横に軽く振ることで答える。

「いいえ、そんなことはありませんよ。ですが、努力……はしていません。努力というのは何かひたむきに真つ直ぐと行われることです、私は——そんな綺麗な理由で体を作り変えたわけではありませんので」

サミュエルはそう言って笑った。

「む、なんだ……アイツはもういないのか？ 良く帰したな、ヴィヴィアン」

深夜、学園から戻ってきたスロがサミュエルに会いに来たのだが、当の本人は既に居なかった。

「あの子、頑固よ！　いくら魔力が凄くてもあれだけの怪我と魔力の消費だったら普通は数日は目を覚まさないわ！」

「だが、まあ……アイツはお前の制止を無視して帰っていつてしまった、と？」

「そうよ！　まったく、何が明日は用事がありますから、よ！　しかもご丁寧に治療費まで置いていつて！」

プンスカ怒るヴィヴィアンは可愛いのだが、彼女の怒りは本物だった。

彼女は医療魔術師であり、医者でもある。だからこそ、一度診た責任として最後までしっかりとしておきたかった。そもそも、怪我をさせたのは同じギルドの仲間なのだ。

なのに当のサミュエルは無理やり帰ってしまうし、相場の治療費を置いて帰った。それだけでも結構頭にきているというのに、「もし足りなかったらご連絡ください」と自宅の住所まで残していったのだ。

「別にお金なんて取らないわよ！」

「おーおー、荒れとるのう」

「イザナは病室に戻るッ！」

「はいっ！」

猫のようにフーフーと深呼吸するヴィヴィアンに、スロの後からやってきた少女がお茶を差し出す。

「……ありがとう」

「い、いえ」

ローブを着た少女、ウェッチ・アンティルスに礼を言い、お茶を

一口飲んでようやく落ち着いたヴィヴィアンだった。

「でも、ヴィヴィアンが、そこまで、怒るのは珍しいです」

「そうだな、いやイザナを叱ったりしているのを数えると頻繁じゃないか？」

「い、いえ、そういう姉と弟みたいな、感じじゃなくて……もっと違う感じ、です」

「そうか？」

どうやらウェッチは気が弱いのか、言葉が途切れ途切れだ。気の弱さが、言葉に出てしまっている様な印象を受けてしまう。

スロはそんなことを気にすることなく、会話をしている。

スロはもちろん、仲間たちは彼女のこの話し方を気にしたことはない。

「ふむ、となると……男と女の関係だな」

「……え？」

「……は？」

ウェッチとの会話からスロが導き出した答えは意外なものだった。あまり男女の関係など興味の無いような顔をしているが、そういうことも言うんだなと思わず女性陣は間抜けにも口を開けたまま放心してしまった。

そして、しばらくしてウェッチは頬を赤く染めて、ヴィヴィアンは「どうしてよ！」と叫んだ。

「なんだ、違うのか？ 名推理だと思ったんだが」

「まったく違うわ、迷推理よ！」

「違うのか？」

「違うわよ！」

ゼーはー、と大声を出したせいで息を切らしているヴィヴィアンだが、スロは自分の推理が間違っていたのかと首を傾げている。

一方で、ウェッチは何を想像しているのか、どンドン類は赤く染まり、最後には「きゃっ」と声まで上げていた。

「それで、サミーのことを誘ったのか？」

とりあえず全員が落ち着きを取り戻してから、スロが口を開く。

「ギルドについてこと？」

「ああ」

「言おうとは思ってたんだけど、その前に帰るとか言い出すからそれどころじゃなかったわ。ごめんなさい、スロ」

「いや、気にするな。一応、同僚の女にも伝えてあるから、そちらから話が伝わるだろう」

これといって急いではないスロだった。そんなスロにウェッチは恐る恐る質問をする。

「あの、スロはどうして、濃紅銀鉾に、あの人を入れよう？」

「私も気になるわ」

二人に問われ、スロは腕を組んで少し考えてから自分の気持ちを口にする。

「一言で言えば、気に入ったからだ。そうだろう、今時、誰かの為にあそこまで体を張れる奴はいない。もちろん、俺たちは仲間にかあれば命を掛けてだって何かしてやりたいと思うが、サミーは仲間でもなんでもない奴のために戦った」

ギルドのように、報酬など必要ないとも言った。

ただ純粹に、フィアト・ロムのためだけに戦ったのだ。

「だから俺は、アイツが気に入ったんだよ」

スロ・シルバーマン。第十五階梯の剣士は、そう言って笑った。

6 「だから俺は、アイツが気に入ったんだよ」(後書き)

また間が空いてしまいましたが、最新話投稿します。

次回は、メルル、ジュジュ、シュスランたちの出番です。

ご意見、ご感想、ご評価いただけると励みになります。どうぞよろしくお願いします。

7 「いつそ死んでしまいたいくらいに嫌いです」

痛みは引いている。それだけで、ヴィヴィアンがどれだけ優秀な医療魔術師であるのか分かる。

だが体中が熱く、苦しい。いくら痛みがなくても体力が落ちていく証拠だった。早く自宅のベッドに横になりたいと思うサミュエルだった。

息を切らしながら、ふらつく足取りで自宅へ向かう。幸いと言うべきか、スロたちが拠点として構えていた場所にサミュエルは運ばれていて、そこから自宅までそう遠くはなかった。

ヴィヴィアンはあの愛らしい顔で、最初は心配そうに、最後は怒り心頭に自宅に帰すなど言語道断と言っていたが、最終的にはほとんど彼女を無視する形で出てきてしまった。

「後日、謝りに行きましょう」

そういえば、治療をしてくれた礼も言っていないことに気付く。

「ああ、本当に僕は馬鹿だ……」

「本当にそう思います」

独り言のはずだったのに返事が返ってきた。

「クレイドル先生」

少し驚いて呟くように、声の主の呼んだ。

彼女はいつも通りの無表情だが、どことなく怒っている気がする
のは気のせいだろうか？

「二人はどうしましたか？」

「……寮へ送ってきました。二人とも貴方のことをとても心配して
いました」

「……………そうですか、謝らないといけませんね」

まったく駄目な先生です。サミュエルはそんなことを言って笑う
が、シユスランは特に何も言わない。

いつもの彼女であれば、その通りだとか一言、二言余計なことを
言ってくるのだが。

「ええと……………どうしましたか、クレイドル先生？」

ちょっとビクビクしながら尋ねる。

すると、カツカツと近づいてくる彼女は何を思ったのか、サミュ
エルの頬を叩こうとして手を振り上げて……………しかし、そのまま何か
を諦めたように手を下ろした。

「貴方は叩かれそうになっても身構えもしないんですね。それとも、
私程度の張り手では痛くも痒くもないと？」

「どうしてそんなに怒っているのか分らないですけど、僕だって叩
かれれば当たり前前に痛いですよ」

「でも貴方は身構えもしなかったじゃないですか」

「それをする体力が無いんですよ……………」

もちろんそれが嘘だというくらいシユスランにもわかる。彼が甘
んじて叩かれようとしていたくらい。

だから無意識に腹が立っていた。

「どうして貴方は先程の戦闘で魔術をすぐに使わなかったのですか？ イザナという魔術師を貴方は魔術を使わず倒しました、なら魔術を使っていればすぐに決着が付き、スロ・シルバーマンが現れる前に学園に連れて行くことができたはずですよ」

サミュエルは返事をしなかった。

「そもそもフィアト・ロムがいくら被害者であつたとはいえ、加害者であることも確かだと言うのに、それでも説得を試みるのも無謀です。貴方ほどの実力があれば問答無用で学院へ連れて行くこともできたでしょう」

まだ返事をしないサミュエルに怒りが沸いたのが、少しずつ声が大きくなっていく。

「何よりも私が気に入らないのは、あれだけの魔力を持っていながら、生徒たちだけではなく一部の教師からも馬鹿にされたりしている貴方です！」

そこまで言われて、ようやくサミュエルは口を開いた。

「いつも失敗しちゃうんですね」

自嘲するように、歪に笑うサミュエルを見てシュスランは眉をかめる。

「僕がああしよう、こうしようと思ったことが裏目に出ることって結構あるんですよ。ある人に言わせれば、人生にはそんなものは当

たり前だと怒られたこともあつたんですけど……それでもどうせなら嫌な思いなんてしたくないのは当たり前ですよね」

「当たり前です。好き好んで嫌な思いをするのは変態だけです」

「でも、僕は僕自身に何かが起こることを嫌だとは思わないですよ。この怪我だって、別に大したことはありません。もつと酷い怪我をしよつちゅうしていたこともありました。僕はね、僕自身がくだらない意地を張つたせいで、クレイドル先生たちを危険な目に遭わせたことなどが嫌なんです。僕自身を許せないんですよ」

「別に貴方が悪いわけではないでしょう。生徒だって貴方のせいで巻き込まれたわけじゃありません」

それでも、とサミュエルは続ける。

「例えそうであつても、僕は……僕なんかに関わつたせいで嫌な思いをする人を見たくないんですよ」

彼の言葉に思わず手を上げそうになったシュスランだったが、理性を総動員させてそれをするのはなかった。

今、サミュエルは自分のことをなんと言つた？ 「僕なんか」とそう言つたのだ。

シュスランにはそれが許せなかった。

「ルード先生、貴方は自分が嫌いなんですか？」

その問いに、いつもの笑顔でサミュエルは答えた。

「はい、反吐が出るほどに。いつそ死んでしまいたいくらいに嫌いです」

未だに頬が痛い気がする。

週が空けて早朝、サミュエル・ルードはランジエスター魔術学院の自室にいた。

今日からサミュエルは小等部の担任となる。

「はあ、憂鬱です」

どうしてあんなことを言ってしまったんだろうと思わずにはいられなかった。

一昨日、スロ・シルバーマンと戦った後、シュスランに自身のことが嫌いかと問われ素直に答えてしまった。いつもなら絶対に言わない本音を言ってしまった。

結果、シュスランに頬を叩かれ、食事もお流れとなった。そして今日だ。

休日間に魔力を循環させ、体を回復させることに専念した結果、簡単な戦闘くらいならできる程度には回復している。それでも、包帯などはとれてはいないが。

学院での生活には差支えがないくらいには回復していた。

「そろそろ時間ですか」

いつもより早く学院に来ていたのには理由がある。

学院長テリー・チエスターに報告等があるからだ。もちろん、サミュエル自身、フィアトの件がどうなったのかも気になる。

本来ならすぐに学院長に報告と、彼女のその後を聞いたかったのだが、学院長の使い魔が休み明けにと伝えてきたので上司に逆らわず大人しくしていたのだ。

正直に言うと、シユスランやメリル、ジュジュに謝罪し、ヴィヴィアンに治療の礼をと思ったが、やめておいた。

シユスランは怒らせてしまったし、生徒二人は女子寮だ、教師とはいえあまり無闇に行きたくない。ヴィヴィアンは制止を押し切つて逃げてきたので、会うのが後ろめたかったのだ。

「はあ」

サミュエルはため息を吐くと、いつの間にか付いていた学院長室の扉をノックした。

「どうぞ」

「サミュエル・ルード入ります」

一礼をして部屋に入ると、笑みを浮かべた学院長にソファアに勧められる。

断る理由も無いのでソファアに座ると、目の前のテーブルには用意が良いことにサミュエルの知りたいことが書類となってまとめられていた

「読んでいいですか？」

「はい、クレイドル先生がまとめてくれたものです」

相変わらず仕事が早い。そんなことを思いながら、彼女らしい真面目な文章を読んでいく。そしてすべて読み終わったサミュエルは安堵と共に、一息吐いた。

「私ができる限り最善を尽くしたつもりです」

「よくもまあ昨日だけでこれだけのことができましたね」

驚きつつも呆れるサミュエルに学院長は微笑む。

彼が呆れるのも無理は無いことだった。

昨日一日で、事の発端であるエリック夫人とそれに関わったギルド職員の捕縛。同時に、事前に調べていたのか細かな悪事が暴かれ、フィアトの恋人に関しても証拠があるようだ。

これによってフィアトの罪が消えることはないが、少なくとも軽くなることは間違いない。

まだ彼女はやり直せる。

それが素直に嬉しかった。

「しかし、私は感心しません。クレイドル先生も怒っていましたが、貴方はもっと早く魔術を使うべきでした」

「そう、ですね」

「別に攻めているわけではありません。ですが、貴方は今、教育者です。そしてプライベートな時間だったとはいえ、そこに生徒がいるなら優先すべきものは分かるはずです。もっとも、貴方の有能さに頼って厄介ことを押し付けている私が言えることではないですが、今後このようなことはないようにしてくださいね。貴方が死んだりしてしまったらガイセインや貴方を慕う方々に申し訳が立ちませんし、私自身も後悔しますから」

その言葉は、責めてはいなかった。

だが、サミュエルにとつて、孫に言い聞かせるように優しく伝えようとする学院長の言葉が、今は一番痛かった。

「今後は今回のようなことが無いように気をつけます」

それだけ言うのが今の彼にとって精一杯だった。

そして、この件に関して学院長がそれ以上言うことはなかった。

「ルード先生！」

自室に戻ると、中にいたであろう二人の生徒に大きな声で呼ばれた。

メリル・ウェラーとジユジュ・ヴァレンタインの二人だった。

「ああ、丁度二人に会いたかったところでした。とりあえず、珈琲でも出しますから座ってください」

サミュエルの言葉に、二人は素直に頷いて部屋にある椅子に座る。珈琲の仕度をしながら彼は生徒たちに背を向けたまま謝った。

「危険なことに巻き込んでしまつて先日はすみませんでした。」

そんな彼の謝罪の言葉を、二人は大きな声で否定した。

「先生のせいじゃないです！」

「そうです。私たちがあの場にいたのは偶然です！ それを先生のせいにするつもりはありません！ 私たちはただ、先生のことが心配だっただけです」

そう、二人はただただ純粹にサミュエルのことを心配していたのだった。

それこそ、寮の仲間が心配してしまうほど。

朝一番で飛んでくるように会いに来たのも、安否を確かめたかったからだ。

「……ありがとうございます。でも、僕が力を出し惜しみしていたことと、そのせいで君たちが危険な目に遭ったことは確かですから」
意地を張ったわけではない。ただ、学院長にも言われたが、教師として生徒を危険に遭わせたのは反省すべき点だったから。
そう、彼女たちに説明をすると、渋々とだが謝罪を受け入れてくれた。

そして体の具合を聞かれ、軽い戦闘ならできると返事をして軽く引かれたりと、若干微笑ましい時間は続いた。

「あの、先生に聞きたいんですけど、いいですか？」

カップを片手に、聞き辛いことなのか、少しだけ気まずそうにメリルが手を上げる。

「はい、どうぞ」

「先生は魔術を使えることをどうして隠しているんですか？」

それは至極もつともな質問だった。

十五階梯というギルド内最高の地位にいるスロ・シルバーマンと戦って負けてしまったもののその実力は学院の教師のそれには納まらない。

だというのに彼の学院での立場は低く、生徒はもちろん同僚である教師陣にも馬鹿にされたりすることは少なくないのだから。

メリルはもちろん、ジュジュもそれが許せなかった。

いや、彼女たちはサミュエルが魔術を本当に使えなかったとしても、今の状況を許せないだろう。それだけ、心優しい生徒なのだ。

「隠している……訳ではないですよ、ただ僕はあまり魔術が好き

じゃなくてですね。僕の魔術を少し見ましたよね？」

二人が頷くのを見て話を続ける。

「僕の魔術は攻撃に特化しています。いえ、正確に言うと、攻撃に特化させています。守り、癒すことを放棄して、ただただ純粹に攻撃だけを求めたのが僕の魔術です」

寂しそうに、悲しそうに、そして自嘲するようにそう言うサミュエルに二人はどうして、と尋ねようとしてできなかった。

「だからですかね、別に自分から使えると言う必要はありませんし、日常で使う魔術はあまり使えませんか、正直体を動かした方が僕には効率が良いですよ」

「でも、そのせいで先生は馬鹿にされたり……その殴られたりしたりするじゃないですか！」

憤りを感じているのか、ジュジュが大きな声を出す。

「ええ、そうです。でも、それはたいした問題ではないんですよ。冷たい言い方をしますが、魔術の有無で人間の価値観が決まるわけではありません。少なくとも、今のこの国では魔術の有無で優劣は決まりません。それに気付かず、持つ者が持たない者を虐げる、そういう人間に僕は何かをしてあげたいと思いません」

——だから放っておいているのです。

そんなことを言うサミュエルだったが、メリルとジュジュにはそれは何か違う気がした。

間違っていると素直に思った。

それを口にして良いのか、悪いのか、迷っていると、扉越しに声を掛けられた。

「おいおい、それは教師として間違っているだろう、サミー」

決して忘れられない声だった。

低過ぎず、それでいて力強く響く良く通る声の主、それは――

「関係者以外は学院から出て行ってくれませんが、スロ・シルバーマン」

特に驚いたりせず、ただうんざりした顔でサミュエルは、長身の剣士の名前を呼んだのだった。

7 「いつそ死んでしまいたいくらいに嫌いです」(後書き)

またもや間が空いてしまいましたが、最新話お届けします。
スロの早い再登場によって、物語は進んでいく予定です。

ご意見、ご感想、ご評価を頂けるととても励みになります。どうぞ
よろしくお願いします！

8 「この国に英雄はいらないですね」

「それで、何が違うと言っているのですか？」

スロ・シルバーマンだけではない。そこには彼の仲間である白衣を着た外見少女ヴィヴィアン・ウルツド、魔術師らしいフード付きのローブを纏うウェッチ・アンティルス、そして包帯人間イザナがいる。

ふと、先日にもう一人がいないことに気付くが、サミュエルにとつて些細なことであつたので口にする事はなかった。

それよりも、問題は。

「いえ、それよりもどうして貴方たちが勢ぞろいして学院にいるのですか？」

うんざりした口調で言うサミュエルだが、スロは特に気にした様子もない。

むしろ、メルルとジュジュの二人が、再び、しかもこんな所でサミュエルとスロが再戦してしまうのではないかと怯えてしまう始末だ。

「俺たちは、あー、ほら、なんだっけ？」

「あのねえ、私たちは勝手に家に帰った怪我人の具合を見に来たんですよー！」

スロが首を傾げてヴィヴィアンに尋ねると、彼女は少し苛立った雰囲気で返事をする。

どうやら先日のサミュエルの態度が彼女をこのようにしているよ

うだった。

「はい、治療費とかいって置いていったお金を返すわ」

「はぁ……でも、治療してもらっておいてお金を返されるというのも変じゃないですか？」

「その治療した私が良いっていつてるんだから良いのよ！　そもそもそんな大怪我負わせたのはスロだし、その前の火傷はイザナのせいだよ」

そう言われればそうなのだが、それだと一方的に自分だけがやられたようだなぁと思ってしまうサミュエルだった。

「では、そのお金は皆さんが僕の意を汲んでくださったことへの感謝の気持ちとして受け取ってください。ギルドからは報酬は出なかったでしょう？　少なければもっと用意します」

よくよく考えれば、スロは最終的に折れてくれたのだ。
その礼すら言っていないことに気付く。

「スロ・シルバーマン」

「なんだ？」

「お礼を言います。貴方がフィアトさんを学園に連れてきてくれたことを。彼女の罪が消えたわけではありませんが、おかげで少しは軽くなりました。ありがとうございます」

「まあ、気にするな」

素直に礼を言ったサミュエルに、少しだけ目を見開くスロ。
もしかしたら驚いたのかもしれない。

「あのう……割り込んですみませんけれど……」

恐る恐る挙手するメリル。

「なんでしよう、メリル君？」

「さつき、スロ・シルバーマンさんが言っていた、教師として間違ってるっていうのはどういう意味ですか？」

言われて気付く。

「ああ、そう言えばそんなことを言って登場していましたね。それで、どういう意味でしょうか？」

忘れてたんかいっ、と突っ込みたくなっただのはメリルだけではないだろう。きっと。

特に包帯人間イザナは顔も包帯に覆われているのか声を出していないが、しっかりと突っ込みのリアクションをとっている。もっとも、そのことにサミュエルは微塵も気がついていないが。

「そうだな、サミーは持たない者を虐げるような奴に何かをしてやりたくないと言ったけれど、教師ならそういう奴らにこそ色々と教えてやらないと駄目だろう？」

「僕のことをサミーって言わないでください。ですが、お恥ずかしい話、教師でさえそういう意識の者は多いです。そんな状況で一人向き合えと？」

「それが教師つてもんだらう？」

スロの言葉に、彼は少し考えて……答えた。

「ええ、きっとそうなんだろうね。でも、それなら僕は持っている者よりも、持っていない者に多くのことを学んで欲しいと思いま

す」

「あの、でも……それじゃあ、その、虐げ、る、生徒は、そのまま、ですよ？」

ウェッチが恐る恐ると尋ね、その言葉をスロが引き継ぐ。

「そしてそのまま社会に出すのか？ それとも殺すのか？」

殺す——突然出た物騒な言葉に生徒二人がビクリとする。

同時に、サミュエルはスロがどうしてわざわざ「殺す」という言葉を選んだのかが気になった。

「やめてください、スロ・シルバーマン。冗談でも殺すだなんて、生徒が怯えます。貴方は仮にも十五階梯という高みにいるんですよ、そんな貴方の言葉は生徒にとって恐れであると同時に、恐怖でもあるんですから、もう少し言葉を選んでください」

注意を促すサミュエルだが、スロの言葉に肯定も否定もしなかった。

そして、スロがさらに口を開こうとするその前に、サミュエルは時計で時間を確認すると、少し慌てたように動き出す。

「すみませんが、もうのんびりと話をしている時間がありません。今日から僕は小等部の担任なんですよ。さあ、メリル君、ジュジュ君もクラスへ戻って授業の仕度をしてください。心配してくれて嬉しかったですよ」

促しながらも、感謝の言葉を忘れない。

サミュエルにとって、生徒が自分のことを心配してくれたということは本当に嬉しかったから。

「スロ・シルバーマン。もし、このまま学院内にいるのでしたら学院長の許可を取ってください。その後でしたら、この部屋を使つて良いので。珈琲はそこに、菓子などはそっちにあります」

「あ、ああ、悪いな」

「じゃあ、僕は行きますね」

メルルとジュジュと一緒にサミュエルは自室から出て行く。

そして残された濃紅銀鉾はポツンと。

「しまった……また誘えなかった」

残念そうに、しかし何か含んだ笑みを浮かべてスロはそんなことを言った。

「つ、疲れました……あれが若さですか？ 一応、僕は怪我人ですよ、それを揉みくちやにして……小等部って怖いですね」

初授業を終えたサミュエルは、精神的にボロボロだった。

「本当に、子供ってこわい……」

ぐてー、と机に突っ伏してそんなことを言う。

しかし、無理も無い話だった。

魔術学院へ通っているとはいえど、小等部は小等部。サミュエルのクラスは十歳の子供たちなのだ。そんな子供たちが包帯を巻かれ

た彼を見て「ミイラー！」と騒ぎ揉みくちやにしても文句の言えない話だ。

サミュエル自身、怖いといいつつ、その顔は微笑んでいる。だが、気になることがあった。

「あの子がメルル君の弟でしたか……事前に知っていたはずですが、やはり実際に目にしてみるとなるほどと納得できます」

微笑から至極真面目な顔へ変えたサミュエル。

珈琲をカップに注ぎながらため息を一つ吐いた。そして、思い出す。

クラスの生徒たちが楽しんでサミュエルを揉みくちやにする中、唯一そんなクラスメイトを冷めた目で見据えていた少年がいた。

歳相応とはいえない、若干大人びた雰囲気を持つ少年、トール・ウェラー。

「いいえ、あれは大人びた……というよりも、自分が他の人間と違うとわかつている感じでしたね」

事実、彼の才能は凄い。幼少時の時から母親に課せられた「英雄」になるための訓練。そして、母親の期待を裏切らない成果をだしてきた。

一度、聞いたことがある。かつて、トール・ウェラーの母親であるタニム・ウェラーがランジェスター魔術学院へ入学を渋り、優秀な家庭教師を特別に着けるようにと国へ申し出て却下されたということ。

タニム・ウェラーの願いは却下されたが、その時の怒り様は凄まじいものだったという。

「英雄の息子であり才能あるトールが、同い年の子供と同じ授業を

受けるなどというのは許せません！ 王に、王にお会いさせてください。王ならば息子の才をわかるはずです。そもそも、この国は英雄の息子を魔術の魔の字も知らない子供と一緒に学ばせると言うのですか！ 次の英雄にそんなことをして良いと思っているのですか！」

とのことだった。

いや、正確にはもっと口汚く言っただろうだが……。

しかし、馬鹿だと思う。

次の英雄？

くだらない。英雄などは戦時中での戦果、もしくはそれなりの偉業を達成しないとそう呼ばれない。

では、英雄が必要になる場合は？

その時点で民に被害が出るということである。

「ガイセインが王であり、少しずつ良くなってきているこの国に英雄はいらないですね」

それに……

「トール・ウェラー君は「父親の様な英雄」には決してなれませんが才能以前の問題です。仮に英雄が必要となった場合、「父親の様な英雄」になれる可能性があるのは……メルル君かそのご姉妹でしょうか」

まあ、それでも英雄なんですよね。

そう一人で締めくくって、サミュエルは珈琲を飲み干す。

「さて、とりあえずの問題はトール・ウェラー君がクラスに馴染んでいないということですね。様子をもう少しみてから、面談でもし

てみましょう」

そして、思い出するようにサミュエルはふと首を傾げた。

「そういえば、スロ・シルバーマンたちはどこへ？」

一方で、その頃濃紅銀鉞^{ルビー・シルバー}は学院内をブラブラしていた。もちろん学院長の許可はもらってある。もらわないとそれを理由にサミュエルに学院から叩き出されそうだったからだ。

「中々、良い学院だな」

色々歩き、見回してスロ・シルバーマンは言った。

生徒に活気はあるし、魔術を上達させんという向上心を持っている生徒が多いのは良いことだった。

小等部、中等部を見回ったが、可能なら高等部や大学部まで行ってみたいと思うくらいだ。

「そうね、良い学院ね。私は師匠のところで医療魔術を習ったけれど、こういう学院生活にも憧れていたのよね」

「は、い。私も、ちょっと、憧れていました」

ヴィヴィアンとウェッチは少し羨ましそうに生徒たちを見ている。包帯男——もとい、イザナだけが、なんだか居心地悪そうにムスツとしていた。

そんな彼を見て、ヴィヴィアンが動く。

「もうっ、仕方がないわね」

そう言つて、イザナの口に医療魔術を展開していく。
数十秒後。

「ぶっはー、やっと喋れたわ。ったく、何が悲しゅうて囚人用の拘束術を口限定でされなきゃなんのじゃ！それに、あのサミュエルとかいった教師はワシのこと普通にスルーしとらんかったか？」

まあ、勢い良く喋る男である。

口喧嘩、というよりも一方的に喧嘩を売りそうなイザナの口をグイヴィアンが封じていたのだ。

仮にだが、学院内でバトル開始などになったら、正直笑えない。

「まあ、確かに良い学院じゃな。しかし、気に入らんことが一つだけあるんじゃないか」

「どうした？」

「お前ら気づいとらんのか？生徒の大半が奴の悪口言つとるんを」

奴というのは、サミュエル・ルードだろう。

「気付いているぞ。嫌われている、といよりも小馬鹿にされているだろうな。魔術が使えない教師として生徒からの受けは良くないみたいだな」

「なーにが、魔術が使えんじゃ。思いつきり魔術使つとったじゃないかい。それもスロと打ち合える程のを。気絶しておったワシが目覚ます程の魔力じゃぞ？奴は普段、どうやってあれだけの魔力を隠しとるんじゃない？封環なんぞ使つても、まったく感じないってことはないじゃろに」

封環。正確には封環具という。それは魔力を封じる魔道具である。主に囚人などに着けられる場合が多いが、体力に対して大き過ぎる魔力を持つて生まれた子のために魔力を抑えるために使われたり、自身の魔力を隠したい者が使ったりするという。

ただし、封環具を使っても一〇〇ある魔力のすべてを隠せるわけではない。例え、何個装備していてもだ。

「まあ、それに関しては思い当たることもあるが……確かに、サミ一の悪口が聞こえるのは良い気分じゃないな」

「スロ、は、サミュエルさんを、ギルドに、誘いたがって、いますから、ね」

そんな時だった。

『そのことについて少しご相談があります。お手数ですが、学院長室まできていただけませんか？』

四人に魔力を含んだ声が流れてきた。

一定範囲内で言葉を魔術に乗せて伝える、音声魔術の一つだ。

「テリーか。分かった。今から向かおう」

『ありがとうございます。美味しい紅茶と焼き菓子を用意して待っていますね』

学院長の声はそう言って途切れた。

スロは仲間を見回して言う。

「と言うことだ」

メルル・ウエラーは授業をすべて終えて下校しようと校内を歩いていた。

ジュジュは家の方で用事があると、先に帰ってしまっている。

「サミュエル先生の所に、寄ろうかな……」

しかし、まだスロ・シルバーマンたちがいるかもしれないと思うと、それも躊躇ってしまう。

別にスロたちが嫌いというわけではない。

確かにスロ・シルバーマンは剣だけで十五階梯という高みに上り詰めた男であるし、炎装術を使ったイザナも実力者だと思う。だが、嫌いや怖いという感情はなかった。

どちらかというと、彼等と対峙した——いや、スロと戦った時のサミュエルがまるで別人のようで嫌だったのだ。

「朝は、そんな感じじゃなかったけれど」

スロと再会したサミュエルは若干口が悪かったが、あの時のような様子ではなかった。

なら大丈夫かな？ と、メルルは思う。

彼女はサミュエルに聞きたいことがあったのだ。

朝も聞いたが、どうして生徒や教師に馬鹿にされている現状をそのままでいるのか？

答えは聞いた。とても冷たい答えだった。それにスロは教師としては間違っていると言ったが、個人としては間違っているとも、間違っていないとも言わなかった。

だからだろうか？

「例え、嫌がられても、もう一度ちゃんと答えを聞きたい」
どうしてかそう思ってしまう。
しかし、それは無理そうだ。

「……お姉様」

不意に声を掛けられた。

「トール……」

声の主は、半分だけ血の繋がっている弟だった。

8 「この国に英雄はいらないですね」（後書き）

五月中にと思っ^ていながら、ギリギリ間に合^いませんでした^が、最新話投稿^させて^いただ^きました。

メリルの弟、トール・ウェラーの登場です。

ご意見、ご感想、ご評価^{して}いただけると励^みになります。どうぞ
よろしくお願^いします。

9 「僕は魔術が好きじゃないんです」

「時間は大丈夫ですか？」

相変わらず義弟は冷たい声だと、メリルは思った。

感情が込められていないのか、それとも見下されているのか。義理とはいえ弟の態度が酷く気に障ってしまう。

そして、それ以上にそんな自分が嫌だと思っメリルだった。

「用事は何？」

そつけない返事でもトールは気にすることなく、淡々と会話を続けていく。

「母上が今晚、姉上たちに来て欲しいそうです」

「……どうして？」

「すみませんが、僕にはわかりません。伝えるようにと頼まれただけなので」

トールの母はメリルたちの母ではない。いや、一応母親ということになるが、血の繋がりは無いし、そもそも一度たりとも母親らしいことをしてもらった記憶すらない。

本宅はメリルの一番上の姉が所有者となっているので、半ば追出す形にトールと義母を別宅へ住まわせている。

正直に言ってしまうと、同じ家に住んでいない、血の繋がりはもちろん、絆も無い。本当にただの他人だった。

「お姉様たちには一応、伝えておくわ」

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

十歳とは思えない礼儀正しさ……それともトール自身もメリルを他人と思つての態度なのか、そんな態度にやはり苛立ってしまうメリルだった。

トールはそれだけ言つて頭を下げると、振り返りもせずに行つてしまつた。

そんな弟の姿が見えなくなつて、ホツと気が楽になるのがわかる。

「弟と仲が悪いのか？」

「ひゃっ」

気を抜いたところに急に声を掛けられたので、思わず飛び上がつてしまったメリルは声の主が誰だと振り向くと、瘦身でありながらメリルでもわかる鍛えた体をしている十五階梯の剣士、スロ・シルバーマンだった。

「あなたは……」

「ん？ 連れてきていた仲間はサミーの部屋にいますと思つぞ。俺はお前に一度会つて見たいと思つていたからな」

突然、そんなことを言われて困惑してしまふ。

「私に？」

「あー、いや、お前たちつて言つたほうが正確かもしれん。テイラード・ウェラーの娘たちに一度会つておきたかつた」

この間はそれどころじゃなかっただろ？ と、スロは笑うが、

その理由の半分はスロたちにあるだろうとメリルは思う。もちろん、もう半分はサミュエルだ。

「父のこと知っているんですか？」

「ああ、昔な。少しだけ、剣の手ほどきをしてやったことがある。

いつの間にか「英雄」だなんて呼ばれて、しかも死んじまうとはな……残念だ」

メリルは耳を疑った。

剣の手ほどきをしてやった、とスロは言った。だが、それはおかしくないだろうか？

スロはどう見ても二十台始めだ。歳を取っていてもせいぜい二十半ばだろう。そんな彼が父に手ほどき？ 逆ではないのか？

そんな疑問を浮かべるメリルに気付いたのか、スロは少し歪な笑みを浮かべて。

「まあ、俺も色々あるんだ」

そう言った。

メリルには何と返事して良いのか分からなかった。

「だからもう、何度も言つとるじやろうが！　ワシらが決めたんじゃない、ワレの上司が決めたことだと！」

一方、雑務していたサミュエルの自室にスロ抜きの子供たちがやって来て、お茶、と言ったので軽くキレそうになりながらも三人

に珈琲を配った。

そして、学院長と会っていたらしい彼等に、高等部、大学部、そして教師たちに認められた実力のある中等部の生徒が出場する魔術大会へ参加をするようにと聞かされたのだ。

で、サミュエルがそれに頷くはずがなく、イザナに文句を言っていたのだった。

「でも、どうして君は魔術大会へ出たくないの？ 君ほどの実力があれば尊敬されることがあっても、今のようには馬鹿にされることはないと思うんだけど？」

渋っているサミュエルに、ヴィヴィアンも可愛らしい顔を傾げて尋ねる。隣ではウェッチも同意見なのか頷いている。

サミュエルは、はあ、と溜息を一つ吐く。

「僕はですね、別に誰に馬鹿にされようがどうでも良いんです」

「ちよつと待てやコラっ！」

「なんですか？」

「あんなあ、ワレは誰に馬鹿にされても確かに気にせんじやろっ。

だがのう、ワレは強い、それも桁違いにじゃ。そういう魔術師には義務がある」

少し考えて、分からないと首を振るう。

「なんですか？ 義務って？」

「ワレが今までに倒した相手や、戦った相手への義務じゃ。それに、ワレを信用している奴や、ワレの生徒への義務じゃ」

イザナは珈琲を一気に飲み干して続ける。

「ええか？　ワレは強い、じゃがそれを隠しとる。それは個人の勝手じゃからええわ。でもな、それなら喧嘩すんな、徹底的に弱者を演じろや。じゃがワレはワシを倒し、スロと戦って生きとる。学院長のオバハンから聞いたが、もつと色々やっとるそうじゃないか？　それらの相手に失礼なんじゃよ、ワレは」

「僕が……？」

「分からんか？　魔術師、剣士、拳闘士、医療魔術師、もつと色々おるが、ワシらには優劣がある。これは仕方がないことじゃ。なにワレはそれを無視して自分だけの狭い世界の中で物事を終わらせとる。で、生徒に魔術も使えんと馬鹿にされ、殴られもしとる。まあ、それで怒らんのは立派じゃな。じゃがワシのようにワレに負けた奴や、スロのようにワレを認めて戦った奴までが、ワレを馬鹿にした奴に馬鹿にされるかも知れん」

なるほど、とサミュエルはようやく分かった。

だが、それでもサミュエルの答えは変わらない。

「言いたい人には言わせておけば良いじゃないですか。どんなに言われても、貴方は優秀な魔術師ですし、スロ・シルバーマンは噂以上の實力を持つ剣士でした。それを見抜けず、理解をしようともしない者を一々相手にするのも大変ですよ？」

「……ワリヤ、冷たい人間じゃのう。それでよう教師を名乗れるわい」

ガタン、とサミュエルが椅子から立ち上がる。

その言葉だけは許せなかったようだ。

「どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味じゃ。ワレは教師じゃろう？　別に教師だから強くないとイカンとは言わん。じゃが、間違った生徒を正すのも教

師の役目じゃ。今は何もそういうことを思っていない生徒が間違った、歪んだ考えを持たないようにするのが教師じゃないんか？」

「……」

「まあ、魔術が使えない人間が教師をすんなとは言わん。じゃが、ワレは実力がある。それが伝われば、生徒の意識改革にだってなるじやろうし、今後ワレを頼りにする生徒だっておるじやろう」

そこまで言って、イザナはあっと一息つく。

「ワシにはそもそも、どうしてそんなにワレが意固地に魔術を使いたがらんのか分からんわい。なんか理由でもあるんか？」

「……僕は魔術が好きじゃないんです。ただ、それだけなんですよ」

サミュエル自身は気付かなかったが、イザナはもちろん、ヴィヴィアンやウェッチでさえ驚いた。

呟くようにそう言ったサミュエルの顔が、今にも泣き出しそうな子供の顔だったから。

まるで迷子になってしまった子供が不安に押しつぶされてしまいそうな顔をしていからだった。

「まったく、そんな顔されたらワシはもう何も言えんがな……ともかく、後はワレの上司と話し合えや」

珈琲ごちそうさん。

イザナはそれだけ言って軽く手を上げると部屋をさっさと出て行ってしまった。

そんな彼の後をヴィヴィアンとウェッチも続く。

「ご馳走様、また怪我の具合見に来るからね」

「あの、その、ごちそう、さまでした」

ヴィヴィアンはどこか心配そうに、ウェッチは深々と頭を下げてからイザナを追いかけていつてしまった。

一人残されたサミュエルは、本当に泣き出しそうな声で呟いた。

「僕にだって、今の僕自身が駄目なくらい分かっています。だけど、僕はそれでも魔術が嫌いなんですよ……そして、それ以上に魔術が怖いんです」

その呟きは誰にも聞かれることはなかった。

ルビー・シルバー
濃紅銀鉦の四人は合流し、学院長室へ戻っていた。

「学院長さん、ワシらには奴の説得は正直でんわ。意固地というか、なんか心の奥底で魔術にか？ ビビっとるで」

過去になんかあったんかい？

続けてそう尋ねるイザナだったが、首をすぐに横に振る。

「いや、そこまで踏み込んでええ関係でもないわ。忘れてくれや」

「もう、学院長先生にそんな口の聞き方しないの！」

ペシリと背中をヴィヴィアンに叩かれる。

「ふむ、サミーの奴はちょっと根暗っぱいからな。なんだかんだ溜め込んでるんだろうな」

「あの、それは……ちょっと、酷い、かと」

さらりと酷いことを言うスロに、ウェッチが弱弱しくも突っ込む。学院長はそんなやり取りをする四人を微笑ましく見るが、サミュエルのことを考えて少しだけ溜息を吐いた。

正直に言ってしまうと、サミュエルの学院内での立場が少しずつ微妙になってきているのだ。

小等部は問題ないのだが、サミュエルが授業を受け持つ中等部や高等部などの生徒はもちろん、保護者から苦情が来ている件に一部の教師陣が便乗し始めているのだった。

「困ったものですね」

ついつい、口に出してしまう。

正直な話をしてしまうと一流と言われる魔術師などが学院で教師をやることは珍しい。臨時的な講師として招かれることは無いことは無いが。

良い例がスロたちである。

彼等是一流と言っても良い、魔術師、剣士である。しかし、自らのギルドに所属して仲間と共に行動している。

例外的に、ランジエスター魔術学院には、シュスラン・クレイドルという一流の魔術師が教師をしているが、実を言ってしまうと学院長との縁もあつてのことだ。

だからこそだろう。親族であるガイセインからサミュエルの話を聞き、教師にどうかと聞かれた時、無理にでもと学院に招いたのが学院長自身だった。それを魔術を使わないという理由だけで生徒や同僚に馬鹿にされるといふ状況に陥ってしまったのが申し訳ないばかりなのだ。だというのに、その現状がさらに悪くなっていくのだから頭が痛い。

サミュエルが文句を言わないのが幸いだが、もしもサミュエルが

一言でも文句を言ったらガイセインは容赦無く、ランジエスター魔術学院からサミュエルを遠ざけるだろう。

「しかし、分かんのだが、生徒はまあしょうがないとしても、どうして同僚の教師までがサミーを……なんて言うんだ、こういうの？」

「ええつと、鬱陶しく思っているって感じがしら？」

「なるほど、で……そう思ってるのはどうしてだ？」

スロが学院長に尋ねる。

まったくわからんという顔をしているのはスロだけではない、イザナもだ。

ヴィヴィアンとウェッチはどうやら心当たりがあるらしいが、だがそれを学院長を前にして言うには少々勇気がいるようで言えないでいる。

「学院の恥を晒すようですが、ランジエスター魔術学院だけではなく、色々な魔術学院に言えることですが、一流と言える貴方たちのような魔術師は教師としていません。言い方が悪いですが、二流ぐらゐの実力者の集まりです。あくまでも魔術師としてはです、魔術を教える教師としては一流でしょうが……」

実際そうなのだ。

一流の魔術師は、騎士団、病院、教会、魔術で依頼などを解決する魔術事務所へ。他にも研究員や警備会社ともしっかりと自身の力を生かせる場で働くのが常である。

大学部の専門分野の教授クラスになると話は変わってくるが、教師に関してはどうしても手がないというのが現状である。

誤解を招かないように補足するが、あくまでも魔術師の場合だ。魔術師ではない一般教師も魔術学校に多く勤めている。

そして、問題はサミュエルだった。

サミュエルの立場は一般教師である。とりあえず、そう思われている。だが、そんな彼が魔術を必要としないとはいえ魔術師の科目を教えていることに問題があった。

魔術師の教師たちは変なところでプライドが高い。一流に手が届かなかったせいだろうか、それとも一般教師が魔術師の科目を教えていることが気に入らないのか、とにかくそういうことで生徒や保護者に便乗しているのだった。

「つまり変にプライドがある一部の教師たちが、魔術が使えないことになっているサミーを気に入らずに生徒に便乗して追い出してしまおうとすると？」

「まあ簡単に言ってしまうばそうですね」

「だから学院長さんは、魔術大会に奴を出場させて立場の改善をしようというわけかい」

学院長は頷く。

しかし、恐る恐る手を上げるウェッチが発言する。

「あの、でも、それだと……今まで、サミュエルさん、を、馬鹿にしていた生徒が、実力をしってしまったら、怖がる、のでは？」

最もな意見だった。

サミュエルが魔術師として有能だと伝われば、生徒や同僚に馬鹿にされたり、保護者からも文句は無いだろう。

しかし、問題はウェッチの言った通りその後だ。

「ふむ、確かに今まで馬鹿にしていたサミーが優秀な魔術師だと知ったら、まあ普通は報復を恐れるな。だが、まあ……今後の意識改善も考えると強過ぎるが良い薬にはなるだろう」

「ええ、私もそうあれば良いと考えています。もっともウエツチさんの言うことも心配には心配なのですが……」

「まっ、その心配も当の本人が大会に出ないという意味が無いがのう」

「そうですね。私からも話をしてみます。最悪、学院長命令ということで出場させることは可能なのですが、できればそうしたくなかったので貴方たちに頼んだのですが、やっぱり難しいみたいですね」

どうしたものかと、学院長は頭を抱えなくなった。

「とりあえず、何か手伝えることがあつたら言ってくれ、少しぐらいなら手を貸してやる。もっとも、ギルドとして依頼してくれてもいいがな」

スロはそんなことを言って笑う。

その言葉に、何か思いついたのか、学院長は。

「では、少し力を貸してもらいましょう。もちろん、ルビー・シルバー濃紅銀鉱への依頼として受け取ってくれても構いませんので」

何かを思いついたように、そう言ったのだった。

9 「僕は魔術が好きじゃないんです」(後書き)

最新話お届けしました。

スロたちが本格的にサミエルと関わりだします。

ご意見、ご感想、ご評価を気軽にくださると大変嬉しく思います。
どうぞよろしくお願いします！

10 「……誰か俺の噂をしてるな」

メルル・ウェラーは三人の内、二人の姉と共にウェラー家の別宅の前へ来ていた。

「まったく、あの人と顔を合わせるなんてうんざりするわね……」

長女であるマリ・ウェラーはぼやく。

「本当に。撮影が長引いているって言うて来なかったシーラが羨ましい」

次女のスリッツ・ウェラーも嫌で仕方が無いという感じだ。そして彼女の言ったシーラとは三女である。

そして、四女のメルルも、嫌だなーと大きく溜息を吐いたのだった。

正直に言ってしまうと、このメルルたち四姉妹と、後妻であるタム・ウェラーとその息子トールは笑えるほど仲が悪い。

父親であるテイラードをずっと諦めきれずにいたタムがメルルたちの母の死後すぐに、人脈など使えるものすべてを使って後妻へ収まったのだ。

それだけでも気に入らないというのに、母の悪口は言う、トールのことだけしか考えない、英雄の息子は英雄になるべきだと、テイラードに対してもトールに対しても盲目になり過ぎているのだ。

そんなタニムにとって、メリルたち四姉妹も気に入らない存在である。

既にウェラー家は長女であるマリィが家督を継いでいる。優秀な魔術師であり、ギルド研究機関に勤めているマリィは文句なく立派に当主を務めている。また、家人の信頼も厚い。

マリィがその気になればタニムからウェラーの家名を取り上げることできるだろうが、それをしないのは幼いトールのためである。今は母の言いなりになっている義弟だが、もう少し分別が付く年齢になるまで見守って良いと思っているのだ。

まあ、細かいことは挙げたらきりが無いのだが、そんなこんなで両者は本宅と別宅で離れて暮らしていた。そして、タニムが本宅に許可なく入ることはできない。それゆえに今回のように呼び出しが掛かるのだが。

「一体、何の話かしら？」

「さあ、私にはさっぱりです」

騎士団に所属する次女スリッツは、若干男のような話し方をする。女性では長身にあたる彼女は騎士団の白い制服を常に来ていた。ために麗人のような。そして、その口調と格好がまた似合っている。

学者である姉、騎士である姉に比べると見劣りしてしまうとメリルはため息を吐く。これで三女のシーラが人気モデルだからやっつけられない。

そんなことを考えていると、ようやく門が開く。

そして髭を蓄えた老紳士が三人を迎える。

「お嬢様方、お久しぶりでございます。元気なお姿を見ることができて、とても嬉しく思います」

丁寧に頭を下げ、優しげな口調で話す老紳士はウェラー家の執事

であり、一番長く使えている。なんでも、かつては父に命を救われた騎士だったらしいが、その落ち着いた物腰といい、元騎士にはとても見えない。

そんな彼が本宅ではなく、別宅にいるのには理由がある。

タニムに、義母に好きにさせないためだ。

そして、それは上手くいっている。

「タニム様、ツール様がお待ちしています。が、少々、タニム様は気が立っていらっしやいますのでお気をつけください」

「ありがとうございます。嫌な役目を押し付けてごめんなさい」

長女が礼を言って、門を潜る。二人もそれに続いた。

タニム・ウェラーは苛立っていた。

原因は義理の娘たちにあった。

「よりもよって、ツールではなくメルルなんかがスロ・シルバーマンと知り合うだなんて！」

指をその内噛み切るのではと心配になるほど、爪をガリガリと噛んでいる女性はまだ四十代にならない。

贅沢を尽くしたブランド物の服を着て、大きな見栄を張ることでプライドを維持しているような女であった。

「奥様、お嬢様たちがお着きになりました」
「通して」

奥様、などと呼ばれているが、家人の多くが自分のことを良く思っていないことを知っている。

その原因は自分にあるのだが、それには気付かずにヒステリーを頻繁に起こすので、またそれで悪循環となっている。

「お久しぶりです、お義母様」

マリーが挨拶をするが、それを無視してタニムは声を荒げた。

「まさか、お前たちがツールを出し抜こうとしているとは思わなかったわ！ 一体、何のつもりなのっ！」

思わず、マリーたちは目を点にしてしまう。

それが気に入らず、さらにタニムは声を荒げるのだった。

「スロ・シルバーマンのことよ！ ツールの剣の師匠にと探していたというのに、ちゃっかりお前たちは知り合っているなんて！」

マリーとスリッツは何の話かさっぱりわからなかった。
しかし、

「あ……」

メリルだけは違った。

「ちょっと、メリル……あなた、あのスロ・シルバーマンと知り合
いななの？」

「それは初耳」

姉が驚くのも無理はない。

メルル自身も未だに信じられないのだから。

「ほうら見なさい！ あの剣聖シルバーマンの子孫であるスロ・シルバーマンにどうやって近づいたか知らないけれど、お前の企みは何だというの？」

「……偶然、知り合っただけです」

嘘は吐いていない。

だが、義母がそれを信用するわけがなく、さらに怒りをあらわにする。

「偶然知り合えるはずがないわ！ 私がどれだけ探したと思ってるの！ トールは英雄になるべく生まれたのよ！ だと言うのに、国は専属の家庭教師すら用意しないし、私が揃えた家庭教師たちではトールを成長させるには実力が足りない……」

また始まったとメルルたちはうんざりする。

「だと言うのに！ どうしてお前などがスロと知り合えるのだ！」

そんなこと知るか。

そう怒鳴りたいのを我慢して、メルルは黙った。

一体、どんな苦行なのだろう、これは？

毎回、別宅へ来るたびにそう思ってしまう。

「良いわ、じゃあこうしましょう。スロ・シルバーマンを私に引き合わせないさい」

「え？」

「私が直々に頼めばスロがトールの剣の師匠となってくれるはずで

す！」

何をどう考えればそういう結論が出せるのかメリルのはわからない。

いや、姉たちも、老紳士でさえも呆れている。

そもそも、メリルはスロを知っているだけだ。少し話したが、父に剣を教えたという首を傾げなくなる内容だった。

だから、返事は決まっていた。

「お断りします」

「アハハハッ」

「笑い事じゃないです、シーラ姉様……」

時間は経ち、本宅へ戻ったメリルたちは、先ほどの一件を仕事を終えて帰ってきた三女シーラ・ウェラーに話していた。

そして、シーラは大笑い。

「あのババアは随分と怒ったでしょうねっ」

笑い転がるシーラにマリーは溜息を吐く。

「怒るとかいう次元じゃなかったわ。怒り狂うというか、怒り狂って暴れるまでする人を初めて見たわよ……」

「ごめんなさい」

「いいえ、メリルが謝ることじゃないわ。あの人が悪いのよ。そも

そも、スロ・シルバーマンがトールの師匠になるとは思えないわ。義母やトールがどうこう、以前にちよつと変わった人だと聞いているし」

ギルド関係者であるマリーは少なからずスロの話を知っていた。少人数であり目立たない「ルビー・シルバー濃紅銀鉞」のリーダーを勤め、古代遺跡探索や魔物駆除などというギルドとしては一般的だが、十五階梯の剣士としてはパツとしない仕事ばかりしていると聞いている。

「この間、街で建物一つ壊す戦闘をしたみたいだ。私は現場を見たが、凄まじいものだった。一体、どんな相手と戦えばあそこまでの被害になるのか……」

スリッツは腕を組んで唸る。

メルルは流石に言えなかった。

私、その場にいました！ 相手は魔術学院の先生です、しかも二人とも本気じゃありませんでした！ などと言えたらどんなに楽だろうと思う。

「でもいいじゃん、あのババアにはざまあみろってことでさ。もっとも、あのババアがそう簡単に諦めるとは思わないけどね」

それは姉妹一同、同感であつた。

願わくは、あの自分が一番だと思っている義母が余計なことをしませんが、あんなに願うばかりであつた。

「ハックシュ」

王都から少し離れた場所で、くしゃみと同時に、ぶおんと鉄塊を振り回し、人型の魔物を数体薙ぎ払ったのはスロ・シルバーマンだった。

「……誰か俺の噂をしてるな」

「ちよつ、スロ！ このボケえが、戦闘中にくだらんこと言つたらんでさつさと敵を倒さんかい！」

「おお、そうだな」

イザナの怒声に特に慌てた様子を見せないものの、片手で持つ鉄の塊にしか思えない大剣を迫り来る魔物に振り下ろす。

その人型の魔物はまるで人間の腐乱死体だった。

元が人間だったかはわからないが、ほぼ全裸と言っているその体に剣や槍、斧や鈍器を持ち、ご丁寧に鎧まで着けている。

そして人間のように戦うのだ。

だが、この魔物のもつとも恐ろしいのは、相手が弱るとそのことに気付き、食いにくる。腐臭を撒き散らしながら耳まで避けた口を大きく開けて食らいつこうとするのだ。

そして噛まれると毒素を持っているのか、噛まれた者は動けなくなり、後は無残な餌食となってしまう。

「ウェツチ！」

「は、い！」

ただし、弱点はある。

それは炎だ。浄化の炎であればさらに良い。

スロの通る声に返事をする、ウェツチは銀で作られた杖を構え詠唱を始める。

そして、

「行、きます！」

詠唱を終えた彼女から、黄金色の炎が濁流となつて放たれる。
その炎の波は浄化の炎であり、広範囲に魔物を飲み込んでいく。

「流石はウェツチね」

その光景にヴィヴィアンが声を上げる。
そして、五十はいたであろう、腐乱した魔物はすべて灰となった。

「ッしゃ！ 終わりじゃあ！ それにしても、よくまあ、こんな
けの数があるのう。どこから湧いてでたんだか」

呆れたように言うイザナに、鉄塊を担ぐようにして歩いてくるス
口が訂正を入れる。

「別にアイツらは沸いてるわけじゃない。アレは失敗作だ」
「失敗作？」

「ああ、昔に不老不死を願った魔術師たちが創ろうとして失敗した
生き物だ。まあ、詳しくは知らんが、もしかしたら不老不死なんか
を願った魔術師の成れの果てかもしれんな」

時折、ス口は誰も知らないようなことを言う。
それが本当なのか嘘なのかは分からないが、少なくとも仲間に嘘
を言うような男ではないことを仲間知っている。

「だとしたらやりきれないわね……」
「はい……」

医療魔術師であるヴィヴィアンはもちろん、魔術師であるウェッチも、あの姿にまでなって人を襲う魔物が人工的なものだということに心を痛める。

「しかし、どうして王都の近くにこうも数がいたのかが分からん。王都は宮廷魔術師が大規模な結界を張っているはずだ……この程度の魔物がこんなに近づくのは少し気になるな」

「まあ退治できたからええじゃろう。逃したのもおらんし、さつさとギルド本部へ行つて報酬貰おうや」

「確かに考えていても仕方がないか……」

そう頷くと、スロはウェッチの魔術で鉄塊を空間にしまつてもらうとイザナを追うように歩きだそうとして、足を止めた。

そして、王都へ向けて鋭い視線を向ける。

「あの、スロ？」

どうしたのかと不思議そうにするウェッチ。

「見られて……いや、なんでもない。すまん、行こう」
「はい」

視線を感じているが、害になりそうなモノではない。何か、探るように見ているのが少し気に入らないが、それならここを離れるべきだと判断したのだった。

そして、離れた王都の一角で数人の人間が高い建物の屋上にいた。

「流石は十五階梯スロ・シルバーマンだな。魔術じゃ魔術師に気付かれると思って道具使ったっていうのに、こっちに気付きやがった。

まったく化け物だ」

中心に立つまだ若い男はそう言って笑った。

そして、手に持つ魔道具を地面に落として踏みつける。

ガラスが割れたような音がした。

「まったく、使えねえ……食人鬼グールを操作する魔道具だって聞いて期待してみれば、あんな下級の食人鬼グールをただ集めるだけか。無駄金使わせやがって」

男は口では苛立ったことを言っているが、面白いことでもあったかのように歪んだ笑みを浮べていた。

「とりあえずは、スロ・シルバーマンの仲間がどの程度か少しでも見られたことで良しとするか。まだまだ世界には敵が多いぜ。俺たちの戦いはまだ終わってねーんだよ、なあサム」

男は、ここには居ない誰かに話しかけるように笑った。

10 「……誰か俺の噂をしてるな」（後書き）

最新話投稿しました。できるときに、サクサクと頑張って投稿していきたいと思っています。

ご意見、ご感想、ご評価を気軽にくださるととても励みになります。どうぞよろしくお願いします！

11 「僕を魔術大会へ出場させてください！」

それは突然の出来事だった。

「学院長先生、失礼します！」

ルビト・シルバー
濃紅銀鉱の四人が学園に来てから三日が経ち、魔術大会まで一週間の日、ノックもせずにサミュエル・ルードが学院長室へ飛び込んできた。

「ど、どうしましたか、ルード先生。そんな、突然に」

いつもの彼らしくない行動に戸惑いながらも尋ねると、サミュエルは学院長にとってもっとも驚くべき言葉を言ったのだった。

「僕を魔術大会へ出場させてください！」

「……はい？」

この三日間、どんなに説得してみても渋っていたサミュエルの変化に、さすがの学院長も気の抜けた返事しかできなかった。

事の発端はサミュエルが担任をしている小等部五年一組の生徒だった。

まだ十歳の生徒たちは良い意味でも悪い意味でも子供であり、ミイラ男で対面したサミュエルのことを「授業はつまらないけど優しい先生」と思っていた。

接する時間が多いことや、悪意のない子供につられてサミュエルもニコニコしていたからなお更である。

だが、中部部の生徒からの噂でサミュエルが馬鹿にされていると知ってしまう。そして、間の悪いことに、その場面にも出くわしてしまったのだ。

四日間という短い期間でしかないが、生徒にとつてはいつもニコニコしている優しい先生だ。そんな先生の悪口を言われるのは、子供ながらに、いや子供だからこそ我慢できなかったのだろう。

そして喧嘩だ。

もちろん、小等部の生徒が中部部の生徒に勝てるはずがなく、泣きながらクラスに帰ってきた時、サミュエルはまた自分が失敗してしまったと思ったのだ。同時に、たった四日しか接していない生徒が自分のために行動してくれたといことに嬉しさもあつたことが否定できないが。

小等部の生徒は本格的に魔術の勉強をしない。するのは中部部が上がってからだ。だからこそ、サミュエルに対して打ち解けてきていたのだ。それだけに、自分たちの担任を馬鹿にされるのは面白くない。同時に、自分たちも馬鹿にされれば尚更だった。

サミュエルはイザナの言うとおりだと思った。自分の中で完結させて、自分の生徒が今回のようなことになるなんて微塵に思わなかったのだ。

だから決意した。
やってやろうと。

魔術は嫌いだ。そんなことは当たり前だ。サミュエルにとって、魔術は復讐のために、人を殺すために覚えたのだから。それを好きになれと、才能があるからと言われても無理に決まっている。

そんな些細な我がままが、自分を少しでも慕ってくれた生徒が泣いてしまうきっかけを作ってしまったのだ。

「なるほど……私もこういう事態が無いとは思っていませんでしたが、こうも早くに起きてしまうとは思いませんでした。私の責任でもあります、すみません」

「いいえ、僕が悪いんです。また失敗しちゃいました、でも僕は言っただんです。生徒に魔術を使えと」

学院長は少し驚いた顔をした。

まさかサミュエルがそのことを簡単に言うとは思わなかったから。

「そして約束しました。魔術大会に出て優勝すると。なので、僕は魔術大会に出ます！」

サミュエルの決意を聞いて、テリー・チェスターは微笑んだ。

これも一つの「成長」なのだ。

彼女は嬉しいと心底思う。この瞬間が見たくて、教師という職を選んだのだから。

そして、成長するのは生徒だけではない、学院長自身も、教師も、いや年齢や職業に関係なく人は成長していく生き物なのだ。

「わかりました。最初から私がお願いしていたことですので、断る理由がありません。サミュエル・ルード先生、貴方の大会出場を認めます」

そして、少しだけいたずらっ子のように笑みを深めると学院長は続けた。

「小生意気な生徒たち、プライドばかりの教師たちの驚かせておやりなさい」

「はい！」

こうして、サミュエル・ルードの魔術大会出場は意外な決まり方をしたのだった。

その日の夕方。

サミュエルの体を診に来たヴィヴィアンに頼んで、サミュエルは
ルビー・シルバー濃紅銀鉾へ会いに行った。

ルビー・シルバー濃紅銀鉾の一面は全員揃っていた。

スロ・シルバーマン。ヴィヴィアン・ウルツド、ウェッチ・アン
ティルス、イザナ、そしてまだ名前を知らない一人の男性。

サミュエルは彼等に向かって頭を下げた。そして、ルビー・シルバー濃紅銀鉾は大
いに驚くこととなる。

「僕に手加減を教えてください」

その場にいる全員が呆気に取られた顔をした。
いや、無理もないと思う。

「ワレは何を言っとるんじゃ？」

恐る恐る、イザナが代表して尋ねると、悔しさと恥ずかしさを混
ぜたような顔をしてサミュエルは爆弾発言をした。

「……僕は、魔術で手加減ができません」

「はあ？」

「え？」

「……えッ」

「ほっ」

「……」

上から、サミュエル、イザナ、ヴィヴィアン、ウェッチ、スロ、男性だ。

「ちょ、ちょい待ていや……ワレはあれだけの魔力持ってて、スロとやりあつてこうして生きてて、それで手加減ができませんやと？」

「……はい」

「わけが分からんわ……」

正確に言うと、まったく手加減ができないというわけではない。

そもそも、異常とっていい魔力を持ち、使うことができるサミ

ユエルが、体術を使っていること時点で「手加減」である。

そして、体術であれば手加減は可能だ。

だが、それが魔術となると話が違ってくる。

サミュエルは濃紅銀鉾ルビー・シルバーの面々に説明する。

自分は攻撃魔術を主に使うが、基本的に敵を殺すことに特化させていると。もちろん、威力を殺すことは可能だが、それでも学生相手の手加減にはならないのだという。

「でも、魔術大会にでる生徒のレベルがそんなに低いとは思えないんだけど？」

ある程度の手加減ができればいいんじゃないの、とヴィヴィアン。イザナも同意見なのか頷いている。

スロは顎に手をやり何かを考えている。

もう一人の男も物静かに黙っている。

「あの、その、私も……サミュエル、さん、に、は、手加減を、してもらったほうがよいかと、思います」

サミュエルの手加減に同意したのはウェッチだった。

「ふむ、どういうことだ？」

「はい。あの、ですね……サミュエル、さんの、魔術は、強力です。保有、している、魔力を、考えると……下位魔術でも、人は殺せる、かもしれません」

途切れ途切れだが、一生懸命に説明してくれるウェッチ。

まとめるところなる。

曰く、サミュエルの魔術は攻撃に特化しているように見受けられる。もつともこれはサミュエルも同意している。そんなサミュエルが威力を下げて魔術を使っても、相手が学生という発展途上である以上何があるか分からない。

だからこそ、本人がそう思うのなら手加減の練習はしておくべきだと言ったことだった。

さらに言っと、魔術師という存在は——予感を得ることがある。ふとした拍子に、夢であったり、何かしらの予感を得ることがあるのだと言う。もしかしたら、サミュエルが手加減を覚えたいというのは、それに基づいてなのかもしれない、そうウェッチは説明した。

「よし、分かった。ならサミーの手加減の練習相手になってやるか」「ありがとうございます」

「で、じゃ。これは濃紅銀鉾ルビー・シルバーに依頼するってことでええんか？　まあ、ワシらも一応、ギルドじゃからな」

イザナの言葉にサミュエルは、ええ、と頷く。

「もちろん、依頼するつもりで来ましたのでご心配なく。報酬は後払いでお願いします」

「そりゃ当たり前じゃ。ギルドとして、ワレが納得できなきゃ報酬

は受け取れん。んじゃ、さっそくやるかのう。魔術大会まで一週間、しかもワレは昼間は学校で授業やろう。時間は有効に使わんとな」

「ええ、そうしてもらえるとありがたいですよ」

こうして、サミュエルは濃紅銀鉾に「手加減」のやりかたを依頼することとなった。

シユスラン・クレイドルは学院長室で紅茶を飲んでいた。

基本、彼女は飲み物にうるさくはないが、どうせなら美味しいものが飲みたいと思うのは誰だって当たり前である。それゆえに、紅茶なら学園長室で、珈琲ならサミュエルの部屋で飲むのが当たり前になっていた。

しかし、ここ数日、シユスランはサミュエルと顔を合わせても挨拶程度しかした記憶がない。

自身のことを反吐が出るほど嫌いだ、そう笑顔で言ったサミュエルを引っ叩いてから、どうもまだ苛立っているというか、心がモヤモヤとしていた。それゆえに、顔を合わせても言葉が出てこない。そして、引っ叩いてしまったことで、彼がどう自分のことを思っているのかも——気にならないと言ったら嘘になる。

「……はあ」

無表情で溜息を吐く。

そんな彼女を見守っていた学院長だったが、いい加減見かねてか声を掛けた。

「何度目の溜息ですか、シユスラン」

クレイドル先生、とは呼ばずに名前で呼ぶ。

あくまでもプライベートで声を掛けたということだろう。学院長
なりの配慮だ。

「すみません」

相変わらず表情を変えようとしないが、付き合いの長い学院長に
は彼女が落ち込んでいるのが分かる。

そして、理由がサミュエルだということにも。

「そうそう、サミュエル・ルード先生が魔術大会への参加を自ら希
望してきましたよ。これでようやく、一つの面倒ごとが解決に向か
いそうです」

サミュエルが理由で落ち込んでいるというのに、あえてサミュエ
ルの話題を出す学院長。

随分と良い性格をしている。

「……まさか、あのルード先生が自分から？ スロ・シルバーマン
と戦ったときでさえすぐに魔術を使わなかったというのに。どうい
う風の吹き回しでしょう？」

さすがに目を見開くシユスランに学院長は説明した。

そして、シユスランは一言だけポツリと。

「結局、また人の為なんですな」

それはどこか、複雑な感情を含む物言だった。

「でも、自分のために怒ってくれて、泣いてくれた生徒のためにと
いうのが、ルード先生らしいです」

「そうですね。彼はとても優しい青年です。それが長所であること
もあれば、短所であることもあります。かれの美点の一つだと私
は思いますよ」

学園長は微笑む。

「しかし、教師であるルード先生がよく魔術大会の参加を認められ
ましたね。学院長がゴリ押ししたのですか？」

「いいえ、その逆です。参加する生徒の多くがルード先生を馬鹿に
しています。そんな生徒を煽って、便乗して一部の教師からも年齢
的に問題ないのですから参加をと嬉々として言ってきましたよ。彼
等に見れば、対魔術師戦闘などという教科は不愉快なのでしょ
う」

魔術大会に出て、魔術を使えず生徒にやられて恥を掻けばいい。
そんなことを思っただけの意見なのだろう。

「そして結果として、藪を突いて蛇どころか龍を出してしまう結果
になるとは思えないでしょう」

シユスランは冷たく言い放つ。

一部の教師たちも、まさかサミュエルの実力がずば抜けているな
どと夢にも思わないだろう。何せ、魔力を一切感じさせていないの
だから。

シユスランもどうしてサミュエルが完全に魔力を隠しているのか、
理由も、その術も知らない。

とりあえず、今一つだけ分かることは、大会後にサミュエルを馬

鹿にするものは一人もいなくなるだろう、そう確信したのだった。

一方、学生、そして生徒たちの間でも、サミュエル・ルードの魔術大会出場は話題になっていた。

ある者は、どうせいつも通りに殴られて終わりだろう、魔術を使うまでもないと笑う。

ある者は、対魔術師戦闘を使うのではと思ったりしている。またある者は、実は凄い魔術師で、今までの鬱憤を合法的にぶちまける気だ、と笑い話として言っているが、実は正解に近かったりしている。

「まさか先生が魔術大会に出場するだなんて……信じられませんか」「本当にビックリだよ！ この数日の間に、何があったんだろう？」

そして、ジュジュ・ヴァレンタイとメリル・ウェラーも例外なく驚いていた。

あれだけ魔術を使いたがらずに、嫌いと言ったサミュエルの魔術大会出場……それが何を意味しているのかは知らない。

二人は学院内にあるカフェテラスで首を傾げる。

「そういえば、正式な参加者などはギリギリまで分からないんだよね？」

「ええ、過去に不正をした生徒がいたらしいので、それ以来は大会の当日に発表という形になっているようなのですが……どうして先生だけがこうもバレバレなのでしょう？」

「えっと、さあ？」

メルルとジュジュは知らないことだが、学院長から出場の話聞いた、その問題ある一部の教師たちがバラしたのだ。

話題になればなるほど、サミュエルが無様に生徒に負けてくれた瞬間些細なプライドが守られるからである。

無論、こうなることは学園長も予想済みだ。

だが、あえて放っておいているのは、馬鹿を泳がせるためであり、後にルールを破った証拠を突きつけてそれ相応の処罰を与えるつもりだからである。

そもそも、生徒を導くはずの教師が、同僚が魔術を使う使えないで、ここまで大騒ぎするのが問題であり、気に入らないのだ。

同僚であるからこそ、互いに助け合い、補い合うことで、生徒により良い学園生活を送ってもらいたいと思っている。

だからこそ、ランジエスター魔術学院に、プライドを優先するような教師は要らない。

「でもさ、あのスロ・シルバーマンと思いつきりやり合った先生に勝てる生徒っているのかな？」

「……いないでしょう、普通に考えて。基本的に高等部、大学部の先輩たちがメインとなる大会ですけど、学生であるに關わらず、十階梯以上の魔術師はあまり多いとは言えません。十階梯以上であれば引き抜きなどもありますし……いえ、そもそも十五階梯のスロ・シルバーマンと負けたとはいえあれだけの勝負をした先生であれば、きっと他の先生方でも相手にならないのでは？」

「だよね……」

他の生徒たちが、おもしろおかしくサミュエルの魔術大会出場を話す中、少しだけ不謹慎だなと思いつながらも、大会後彼等がきつと今までの態度を思い出して、顔を青くするんじゃないかなと二人は小さく笑ったのだった。

11 「僕を魔術大会へ出場させてください！」（後書き）

最新話お届けします。

少しずつ濃紅銀鉱と関わりを持つていくサミュエルです。しばらくは学園での魔術大会の話が続きます。

ご意見、ご感想、ご評価、ご指摘などをお気軽にしてくださいと励みになります。どうぞよろしくお願いします！

12 「……つい殺しちゃった」

くだらない言い訳にしかないとは思うが、サミュエル・ルードの短い人生において、魔術を——いや、戦闘で相手を殺さないという選択肢は数える程度しかなかった。

訓練では相手の力量がわかっていて、魔術師として成長するまでは本気を出しても勝てないのが当たり前だった。それゆえに、サミュエルは手加減ができない。

「じゃあ、やるか」

方刃の剣、エッジと呼ばれるその剣を構えて濃紅銀鉾ルビー・シルバーのリーダーであるスロ・シルバーマンが気楽そうに言う。

「貴方はいつも、殺気というものが無いんですか？」

どこか威圧感などを持ちながら、それでいて以前戦った時も、剣を構える現在も殺気というものを感じさせないスロ。

それが不思議に思えた。

スロは剣士だ。

いや、今更魔術師でしたとか言われても困るのだが……剣士であるスロがこれから戦おうというのに、殺気が微塵も感じさせないというのは疑問だ。

「とりあえず、サミーの実力を把握したいから、一回本気で戦うぞ」

そんなことを言い出したスロだったが、驚く濃紅銀鉾ルビー・シルバーの面々を他所に、サミュエルは意外とあっさり了承したのだ。

そして今、ウェッチ・アンティルスによって嚴重に結界が幾層にも張り巡らされた森の一角に二人はいる。

二人以外の濃紅銀鉾ルビー・シルバーは、大分離れた場所において、万が一を考えているとのスロの言い付けを守っている。

渋ったのはイザナとヴィヴィアン・ウルツだ。

イザナは二人の本気が見たい。ヴィヴィアンは万が一を考えて医療魔術師が近くにいた方が良いとのことだ。

だが、スロに再度駄目だと言われ、渋々と二人は引き下がった。話を戻そう。

つまり、これから戦う相手に、しかも本気でだというのに、殺気を感じさせないのはサミュエルにとっては初めての経験だったのだ。そもそも、剣を構える剣士というのは殺気ではなくとも、剣気——簡単に言えば気なのだが、そういうものも自然と放つと聞く。

しかし、スロはそれを感じさせていない。

だからサミュエルは問う。

「まあ、別に殺し合いをするわけじゃないだろう？」

「ですが、私は——貴方相手に本気となると、殺しにいきますよ？」

「それでいい。だが、俺は死なんがな」

これだ。

スロのこの自信はどこから来るのだろうか？

ナメられている？ 否。

馬鹿にされている？ 否。

では、これが素であるのか？ 是。そんな気がする。だからだ。だから、サミュエルは少し苛立つ。

こういう態度はこの国の王であるガイセインを思いだせる。嫌いではないが、どこかあの兄貴ぶったところが少し癪に障っていたというのが素直な気持ちだった。

そして、このスロの態度もガイセインとは違うが、どうも癪に障る——今の様な状況で、この態度は。

「行きますよ？」

「ああ」

相手は十五階梯の剣士だ。一切の油断も、自身への過信も、絶対にするな。

そう言い聞かせてサミュエルは二本ある内のナイフを一本手に取り構える。名も無きナイフであるが、実は業物の剣を溶かしナイフにした三本の内の一本である。

「来い」

スロの誘いに、サミュエルは大きく息を吸うと、大地を思い切り蹴った。

甲高い金属音がして、サミュエルのナイフとスロのエッジがぶつかった。

まずはお互いに様子見から入る。

いくら本気を見せるとは言っても、さあ行きますよといきなり全力全開で攻撃を仕掛けるような馬鹿な性格はしていないし、そんな鍛えられ方はしていない。

それはスロも同じだった。

何度が打ち合い、スロが笑みを浮かべた瞬間、サミュエルは大きく後方に飛んだ。

「良くわかったな」

笑みを浮かべてスロは言う。

一方、サミュエルは内心、バクバクと心臓の音がうるさかった。

「……なかなか人をおちよくるのが上手いですね」

あの笑みを浮かべたのはわざとだ。もしもそれに気付いていなかったら。気付いていても攻撃を仕掛けていたら、きっとヴィヴィアンの医療魔術を通り越して葬儀屋のお世話になっていただろう。

あれは合図だったのだ。

「言っておきますが、それぐらいで僕の本気は図れませんよ？」

そう言ってみるが、万が一スロが本気で剣を動かしていたら、あの程度の怪我は負っていたのではと思う。もっとも、その本気というのが想像ができないが、きっと自分が思っているよりも大分上ではないかと予想する。

「それは分かっている。前に戦った時に、サミーの強さは身に染みているしな」

良く言う。つい舌打ちをしなくなってしまうサミュエル。

そして、一度深呼吸をすると、サミュエルはナイフを戻し、鞘ごと地面に投げた。

「む？」

それだけではない。

もう一本のナイフも同様にして、拳銃も地面に投げる。
手ぶらだ。

そもそもサミュエル・ルードの戦闘スタイルは、膨大な魔力と強力な魔術——よりも、ナイフに体術、実弾、魔法弾などを使った接近戦から中距離を得意としている。

それは彼の中であくまでも魔術というのは手段だからだ。強力な魔術を最終的な手段の一つにとって置き、余力を持って相手を倒す。そうしなければいけない状況で生きてきたのだ。

「小細工はしません。本気でいきます」

ぶわり、とサミュエルの魔力が解放されて、魔力の本流が彼を包み込む。

そして同時に、ウェッチの張った結界が一枚、パキンと音を立てて破れた。

同時に、スロも剣を握る手に力を込めて、目を細める。

「見せてみる、お前の本気を」

爆発的な魔力をサミュエルは魔術にして放った。

同時に、人間とは思えない速度でスロが疾走する。

そしてまた一枚、結界が音を立てて破れた。

「う、そ……」

十二階梯の魔術師であるウェッチ・アンティルスは、自身が幾重にも張った結界が二枚も破れたことに驚きを隠せなかった。

「ぐッ……相変わらず、おっそろしい魔力じゃのう」

イザナはサミュエルの魔力を感じて、悔しいながらもそう言うてみせる。

スロの怒号が聞こえ、サミュエルの吼えるような詠唱が聞こえ、燃え盛る炎の音、稲妻の閃光、闇の奔流が遠くからでも良くわかった。

だが、ウェッチはそれどころではなかった。

「どうしましたか、ウェッチさん？」

そこで初めてずっと黙っていた男が話した。

サミュエルとそう変わらない体格に見えるが、彼よりもずっと鍛えられている体を持ち、灰色の髪を腰まで伸ばして一つに結っている。

服装もシンプルであり、ジーンズにシャツという街で見かければ当たり前前の服装である。

容姿は整っているものの、一番印象に残るのは、遠い東にある極東の血を濃く引いていることが分かることだろう。

彼の名は、ラン・セイラン 藍・晴嵐。

「い、え……まさか、こんなにも、早くに、結界が、破れる、なんて……思いません、でした」

晴嵐に尋ねられてウェッチは答えるものの、動揺しているせいか、

いつも以上に言葉に滑らかさが無い。

しかし、それも無理がないことだった。

彼女がこの場に施した結界は、護法五星陣（ごほうごせいじん）と言い、とある存在を逃がさないための古い結界魔術である。

この結界魔術であれば、たとえ十五階梯の魔術師が数人でも破るのは困難を強いるだろう。それを何重にも展開したはずだというのに……もう二枚も破られたのだ。

まだ幾重に張った結界があるので、どうこうなるといっわけではない。

だが、問題は十五階梯の魔術師でさえ破るのが困難だという結界を既に二枚破ってしまったているサミュエルとスロだった。

それぞれ複雑な事情を持つ自分たちの中で、もっとも謎が多いスロ・シルバーマン。そして、最近、知り合った魔術学院の教師をしているサミュエル・ルード。

彼等は一体、何者なのだ？

「あ」

そんなことを考えている内に、さらに結界がもう一枚破れた。そして、さらに次の瞬間――

「ぐへッ……」

「……ッ！」

「く……」

「こ、これは……」

今まで感じたこともない魔力が湧き上がった。

さらに次々と破られて――いや、破壊されていく結界、護法五星陣（ごほうごせいじん）・

その後、何度も何度も、馬鹿みたいな魔力が、爆音と共に魔術が

放たれるのが分かる。

「え？」

これはヴィヴィアンの驚きの声だった。

「ヴィヴィアン、一秒でも早く来い！　すぐにだッ！」

同時に、今までに聞いたことがないスロの大きく、それでいて焦っている声が響く。

ヴィヴィアンは返事もせずに駆け出した。

彼女が必要だということは、医療魔術が必要だということなのだから。

「ワシらも行くんじゃ！」

「あ、はい」

「ええ、そうした方が良いでしょうね」

呆然としていた三人だったが、ハッとしてヴィヴィアンの後を追いかける。

しばらく遅れてスロとサミュエルが戦っていた場所に着くと、真っ赤な血溜りの真ん中で人工呼吸と心臓マッサージをヴィヴィアンにされているサミュエルと、服もボロボロになり、重傷と言っても問題ないほど怪我を負っている――彼に出会ってから今まで一度も見ることがない姿のスロだった。

一体全体、何が起きたのか理解したくてもまったくできない仲間たちに、大怪我をしているというのに、どこかバツの悪そうな顔をしてスロは一言。

「危なかった。もう少しで洒落にならないことになりそうだったか

ら……つい殺しちゃった」

そんなことをさも平然と言っ
てのけたのだった。

12 「……つい殺しちゃった」(後書き)

最新話お届けします。

今回の話では、サミュエルという人間は規格外ということをお伝えしたかったのです。

もちろん、秘密があつての規格外です。それは追々、話が進むと同時に明かしていきたいと思っております。

ご意見、ご感想、ご評価等をお気軽にいただければ、とても嬉しいです。どうぞよろしく願います。

13 「し、死ぬかと思いました……」

——シルバーマン

どの国に暮らしていても、その名は一度は聞いたことがあるだろう。

古い物語、神話、お伽話などにも登場する人物だ。

彼には魔力がまったく無かった。彼が生まれた神代の時代、魔術が最も栄えたという時代に魔力を持たないというのは人間として扱われないではなかったかと、現代の学者は言う。

しかし、例外があり、それがシルバーマンだった。いや、正確に言うところシルバーマン一族だった。

彼等は魔力の変わりに、神をも殺す力を持っていたという。神が恐れる剣を持っていたという。そのどちらもだという説もある。

ゆえに、シルバーマン一族は人間からも、そのほかの種族からも、そして神々からも一目置かれていたとある。

——剣聖シルバーマン

彼がそう呼ばれ、数多の物語に出てくる頃、世界は争いだらけだった。

神々が——何があったのかは知らないが、暴走し多くの種族を虐げだしたのだ。もちろん、人間も虐げられた。

醜く改造された者もいたという。戯れと狂気で生きたまま食われた者もいるという。

そこで初めてシルバーマンが人間では不可能と言われた偉業を成

し遂げるのだ。

それは……

——神殺し。

禁忌であり、不可能であり、考えることすら恐ろしいと言われるものである。

それが、エルフでもなく、ドワーフでもなく、亜人でも、精霊でも、龍でもなく、魔力すら持たない一人の人間の男によって成し遂げられたのだった。

現代の学者曰く「もつとも不可能と思われ禁忌である神殺しを、力なきただの人が成し遂げた、その最初の人物であるからこそ伝説になったのではないか」とある。

今に残る資料や、物語が本当に事実であれば、彼が、彼の仲間が神々を殺し、封印し、長い時間を掛けて世界を安定させたのだという。

彼について一つ、気になることがある。シルバーマンと形容詞は出てきても、彼の名前はどの資料にも、物語にも出てこない。

ただ、シルバーマン、もしくは剣聖とだけ出てくるだけである。

しかし、シルバーマンの仲間に、もう一人だけシルバーマンが存在する。そして、彼には名があつた。

——エル・シルバーマン。

シルバーマンの弟であり、シルバーマン一族の力を持たない代わりに、莫大な魔力と神々に匹敵する魔術を使う才能を持ち、そして努力家であつたという。

そして何よりも、彼の存在がなければシルバーマンが神を殺せなかったのではないかと言う学者は多い。

さらに、神を殺した二人目はエル・シルバーマンだ。

兄とは違い、単独で神を殺したとある。

だが、エル・シルバーマンは兄同様の偉業を達しながら、様々な偉業を、兄に負けなくらいのことはしていながら、あまり知る人は少ない。

それは――彼が兄を、仲間を裏切り、殺されたからである。

何を、どう裏切ったのかはわかっていない。

ただ、エル・シルバーマンは戦いを好む性格ではなかったという。それでありながら戦い続けて命を奪い続けなければいけない人生に疲れ、死を選んだのかもしれないと言う説もある。

創作などで憶測は書かれるものの、本当のことはその時代の当事者しか知らないだろう。

しかし、おもしろいことに、シルバーマンの仲間はそれぞれ命が尽きる時、そこにいないかつての仲間であるエル・シルバーマンを思い出していたという。

ある者は、笑みを浮かべて礼を言い、ある者は深く謝罪し感謝した、ある者は愛の言葉を告げて亡くなっている。

このことからエル・シルバーマンの謎が深まっていくばかりだった。

そして、剣聖シルバーマンは弟の死を境に変わった。

剣聖、剣帝、剣鬼などと様々な通り名を付けられ恐れられ、獣のように戦場を駆け抜けたシルバーマンが必要以上の戦いを求めなくなったという。

理由はわからない。

ただ、それでもシルバーマンは戦い続けた。

誰かを救うために。神々を殺し、龍を殺し、亜人を殺し、人をも殺す。

どの物語でも必ず彼は誰かを殺す。

そして多くの者を救ったのだ。

いずれ、もつとも真実に近いと言われる物語を紹介しよう。もつとも古いが、現代において理解ができない場面が多々あるために、当時の創作ではないかと言われている物語だ。

だが、その物語が事実で、我々がただ理解できないから創作だと勝手に決め付けていたら？

意外と真実は近くにあるのかもしれない。

十五階梯魔術学者　サイザリス・ウオーレン

馬鹿だ、馬鹿だ、馬鹿だ！

ヴィヴィアン・ウルツドは怒りでどうにかなってしまいそうだった。それでいながら、子供と変わらない体格だというのに、大人の体以上の動きでサミュエルに人工呼吸と心臓マッサージを繰り返す。

「イザナ！　心臓マッサージを手伝って！　早く！」

「ちょ、まっ、本当に死んどるんか！」

心臓が止まっているが、これはショック状態に近い。正確に死んでいる、とは言えない。

だが、そんなことを一々説明していたら、本当にサミュエルは死んでしまう。

「心臓マッサージはわかる？」

「あ、ああ、そりゃ、わかるが」

「じゃあ早く！」

「お、おう」

イザナに心臓マッサージを任せて、ヴィヴィアンは人工呼吸する。こんな状態だと医療魔術などよりも、古くから続く医療行為の方が当たり前だと知っていた。だが、まさかそんな場面に自分になるとは微塵にも思っていなかった。

ヴィヴィアンは医療魔術師としてはかなり優秀である。もちろん、医療に関しても医療魔術師を名乗る以上知識、経験はある。だが、基本的に医療が進化した医療魔術以外を使う場面など一度もなかったのだ。

初めての医療行為に不安もある。同時に余裕があれば、ファーストキスだと嘆く余裕もあっただろうが、そんな余裕もない。

——必ず、後で文句を言ってやる！

そう想いを秘めて、人工呼吸を繰り返す。
そして――

「ゲホッ……カハッ……」

サミュエルは息を吹き返したのだった。

「この、馬鹿ッ！」

そんなサミュエルに涙を溜めたヴィヴィアンは思い切り怒鳴りつけたのだった。

「し、死ぬかと思いました……」

息を吹き返し、血の塊を吐いた後、サミュエルはそんなことを言
ってヴィヴィアンに顔を引っ叩かれた。

「すみません」

「当たり前よ！ 思ったんじゃない、本当に死んでたんだからッ
！」

キツ、と本気で睨みつけるので、サミュエルも縮こまるしかない。

「おい、叱るんは後にしといてスロも治療してくれや！ さっきま
では、ヤツの方が酷かったが、外傷じゃあスロの方が大怪我じゃ！
」
「わかってるわよ！」

サミュエルに大人しくしていて、と釘を刺すと、ヴィヴィアンは
スロの方へ掛けていく。

イザナとウェッチがスロをヴィヴィアンに任せて、改めて辺りを
見回して、息を呑んだ。

「なんじゃ……こりゃあ……」

「すご、い、です」

まさに言葉がなかった。

地面が抉れているのはスロのせいだろう。だが、大木が雷が落ち
たように燃え裂け、一体どれほどの火力だったのか地面の一部が硝
子化している。その隣では氷柱が立っているのが滑稽だった。

暴風になぎ倒されたように木々は倒れ、二筋の亀裂が張っていた

結界を越える域まで達している。

決れと亀裂はともかく、後はサミュエルの仕業だと二人は考えるまでも無くわかる。

スロに魔力がないから、このように魔術を使っではないと起こせない現象は無理だと知っているから。

「これ、が……サミュエル、さん、の、本気？」

「じゃろうな……」

驚きを隠せずに二人は呟くしかなかった。

ああやって怒られたのは久しぶりだった。

先日、シスランに引つ叩かれたりもしたが、それと今回は違う。ヴィヴィアンは、彼女は、サミュエルが死に掛けたことに対して本気で怒っていたのだった。命をもっとも大事にするといわれている医療魔術師だからなのかもしれない。いや、彼女自身が純粹にそういう人なのかもしれない。

「先生に怒られた時を思い出しますね……」

大地に背を預けて、ほとんど動いてくれない体で少しだけ笑う。

「でも、スロには感謝です。一度、生命活動を止めてくれなければどうなっていたか……」

その言葉が何を意味するのはサミュエル本人しかわからない。
だが、彼が安堵していることだけは本当だった。

「よう、また負けたのう」

「ええ、また負けました」

そう言つて、すぐ傍に腰を下ろしたのはイザナだった。

イザナは笑みを浮かべる。どこか楽しそうに、どこか意地悪く、
そして少しだけ悔しそうに。

「やっぱりワレは強いのだ……ワシと戦った時、正直な話、何割くらいいじゃった？」

「体術だけでしたので、七割から八割です。ほぼ、本気でした」

「それでも、魔術を使ったらワシなんぞ一瞬じゃったじゃろう？」

皮肉を込めた笑みでイザナは笑つてみせる。

だが、サミュエルはぎこちなく首を横に振つてみせた。

「別に貴方を励ますつもりは微塵ありませんが、魔術を使つても貴方の完成されかけている炎装術を破るには少々難があったと思います。僕の魔術はそういうのに向いていないので」

別に嘘を言つたわけだったわけではないが、イザナはそれでもどこか悔しげに笑う。

「ハハハ、これだけ地形変えなんて言いよるわい！」

「別に、本当なんですけどね……」

「まあ、信じたる。それより、ワレ……本気で暴れまわつたのはええが、何か手加減をするきつかけかなんかはつかめたんか？」

イザナのもつともの問いに、サミュエルはスロとの戦いを思い出
し、良く考えてから乾いた笑い声を上げる。

「ハハハハ……さっぱりです。どうしましょう?」

「……ワシらのとこの大将もたまに馬鹿じゃが、ワレも十分に馬鹿
じゃな」

呆れたようにイザナも笑う。

「本当に、どうしましょうか?」

「それなら心配はいらんぞ」

サミュエルの呟きに、答えた者がいた。スロだ。

外傷は十分に大怪我というレベルを超えていたが、医療魔術のお
かげか、それともスロ自身が規格外なのか、彼はタオルで血を拭い
ながらサミュエルの方へやって来る。

自分も結構な規格外だと思うときがあるが、スロはそれ以上です
ね。サミュエルは内心そんなことを思った。

だが、そう思ってしまうのも無理はないだろう。
しっかりとした足取りで、まるで怪我など負っていないというよ
うに歩いているスロを見れば、ほとんど動けない自分との実力差が
分かる。

それに何よりも——スロは鉄塊を使っていなかった。

あの剣と呼ぶには抵抗のある鉄の塊を振り回されていたら、もっ
と早く自分はこうなっていたかもしれない。いや、下手をしたら、
本当に死んでいたかもしれないとさえ思う。

「なんじゃ、スロ? その心配はないっちゅうのは?」

「あー、簡単に話すと。サムはもう手加減ができてる」

スロのそんな言葉に、一同は一拍間を置いてから声を揃えた。

「はぁ？」

無理もない、正直全員が、何言っただコイツとっているだろう。

だが、スロはそんなことなど気にせずに続ける。

「まあ、ちょっと手違いがあつたが、お互いに本気を出し合つてみて分かったことがある」

「それはなんですか、スロ・シルバーマン？」

「それはなサミー、お前は無意識に手加減をしてるんだよ」

「いえ、力の強弱をつけることは可能ですが、それは手加減ではないでしょう？ いや、手加減の範疇でしょうが、僕がしたい手加減はそういうのではなくて」

「いや、言いたいことはわかる。多分だが。それでも、お前は手加減ができる。大丈夫だ」

「そんな……簡単に言われても、困るんですけど」

もつともなサミュエルの意見をスルーして、スロは笑みを浮かべていた。

どうやら一人だけ満足しているらしい。

「イザナ！ ヴィヴィアン！ ウェッチ！ 晴嵐！」

スロが笑みを浮かべたまま、濃紅銀鉾くルビーシルバーの仲間の名を呼ぶ。

「サミュエルに教えてやれ、世間を知らない、生意気な若造の脅かし方をな！」

そうすれば、サミーの問題はお終いだ。

どこから沸いてくるのか不思議な自信満々な言葉に、ギルドメンバーだけではなく、思わずサミュエルも返事をしそうになった。

そして思う。

スロ・シルバーマン。剣聖シルバーマンの子孫か何かは、知らないが。彼にはどうやら、人を影響を与える不思議な魅力がある。認めたくはないが、サミュエルはそう思ってしまった。

そして、時間はあっという間に流れる。

13 「し、死ぬかと思いました……」 (後書き)

大分、間が空いてしまいましたが、最新話お届けします。
次回は、大会開始です！

サミュエルがスロたちとどう時間を過ごしたのか、その結果どうなったのか、楽しみにしていただけると嬉しいです。

ご意見、ご感想、ご評価をいただけると大変嬉しいです。どうぞよろしく願います。

14 「楽しかったですよ、とっても」

一週間という時はあつといまに流れ、大会当日。

サミュエル・ルードは学園に設置されている闘技場の入り口で濃紅^{ルビー・シルバー}の面々に礼を言っていた。

「色々とお世話になりました」

「まあ、気にするな」

頭を下げていたサミュエルにスロが軽く手を振って答える。

「そこに割り込んだのが、また包帯人間となっているイザナだった。」

「いやいや、それはいかん！ 気にしろや！ もっと頭下げろや！
っーか、一番面倒見てやったのはワシじゃぞ！」

しかし、サミュエルは華麗にイザナをスルーする。

「ヴィヴィアン、何度も傷の手当ありがとうございました。本当に、
見事な医療魔術です」

不慣れなことに挑戦したために、大怪我とまではいかないものの、
傷や怪我を負ったサミュエルを何度も手当てしてくれたヴィヴィアン。
お世辞など抜きに、見事としかいえない医療魔術だった。

「そう？ 嬉しいわ、ありがとう」

礼を言われ、褒められたヴィヴィアンも満更ではない。それに、
気のせいかな、仄かに頬も赤い。

「ウェッチにもたくさん助けられました。君の魔術の応用方法は正直驚きました」

これも心からの賛辞だった。

「い、いえ、その、私こそ、色々、と、勉強にな、なりました」

ウェッチの魔術の応用技術はサミュエルにとって本当に驚きであり、勉強になった。

その応用方法を独自に思いついたウェッチをサミュエルは天才だと思ったほどだ。

同時に、ウェッチはウェッチで、自身の技術を一週間の間に盗んでいったサミュエルに驚きを隠せないでいる。

人付き合いが苦手な彼女であるが、同じ高位魔術師ということもあってか、意外と平気であり、魔術の話は何度もした。

「ラン・セイラン藍・晴嵐、貴方とは正直、もう戦いたくありません。あれはほとんど反則ですよ」

灰色の髪的青年に、サミュエルは苦笑いをする。

「いいえ、こちらこそ。君のほうが反則だと思いますよ。大会、頑張ってくださいね」

そう言って差し出した晴嵐の手をサミュエルは握る。

ほとんど接点のなかった、晴嵐だったが、この一週間で何度も手合わせし、互いの技術に驚きあった。

「って、この一週間でワレは本当にスルーが上手くなったのう！
一番上達したのはワシへのスルーか、ああん？」

額に青筋を浮かせながら、赤髪の青年イザナがふて腐ったように
吼える。

「まったく、物には順序をとという言葉を知らないんですか？ イザ
ナにはとても感謝していますよ。微妙にウザイ時が多いですが、学
ぶことはとても多く、そして面白かった」

「ウザイ言っなや……」

この一週間、もっともサミエルの世話をしたのは誰かと言っ
たら、濃紅銀鉾くルビー・シルバーの面々はもちろん、サミエル
自身もイザナと言っだろう。

そして何よりも、サミエルの望むことを教えてくれたのがイザ
ナであった。

そのことではとても感謝している。

「本当に感謝していますよ。大会が終わったらみんなで食事にでも
行きましよう」

「もちろん、おごりやろうな？」

「ええ、もちろんです」

「おっしや！ しっかり優勝してこいやっ！」

イザナが手を上げて振り下ろしてくるので、サミエルもその手
に向かって自身の手を当てる。

パン、と心地よい音が鳴って、二人は笑いあった。

そして――

「スロ・シルバーマン。貴方との出会いはあまり良いものではありませんでしたね」

「まあ、そうだな」

青い上下の服に身を包んだ長身の青年、スロ・シルバーマンは出会いを思い出すように頷いた。

お世辞にも良い出会いとはいえなかった。

「それでも、今こうして貴方と、そして濃紅銀鉾ルビー・シルバーと親しくなれたのはとても嬉しいことです」

「それはこつちもだ。まあ、だが、そこまで言うなら……あの話を受けてくれても良かったんじゃないかと思っただがな」

ワザとらしくスロはそう言って笑ってみせる。

あの話——それは、濃紅銀鉾ルビー・シルバーにサミュエルを迎えたいという勧誘の話だった。

だが、スロに、いやスロだけではなく他のメンバーに誘われてもサミュエルは首を縦に振らなかった。

申し訳なさそうに謝り、しかし「ですが、貴方たちが困ったら必ず呼んでください、濃紅銀鉾<ルビー・シルバー>が何処にしようと必ず駆けつけます」と言ったのだ。

それで彼等は勧誘をやめた。諦めてはいないが、今はやめた。

「あまりしつこく誘って嫌われたくないからな。まあ、サミーの気が変わったらいつでも言ってくれ」

「僕をサミーって呼ばないでください。気が変わることは……期待しないでお待ちください」

相変わらず、サミュエルのことをサミーと呼ぶスロ。ガイセイもそうだが、サミュエルにとってその呼び方は子ども扱いされてい

るようで嫌だった。

だから何度もやめてくれと言うのだが、マイペースをそのまま体現したようなスロは聞きいれてはくれない。

それでも諦めずに毎回文句を入れるサミュエルを褒めるべきか、呆れるべきか。

「どうだった、この一週間？」

そろそろ時間が迫ってきた頃、スロがサミュエルに問うた。

一週間。それも、学校が終わってからという時間制限もあり、期間としては短いかもしれない。だが、サミュエルにとっては新鮮で濃厚な時間が過ごせていた。

だからサミュエルは正直に、そして少しだけ照れくさそうに笑った。

「楽しかったですよ、とっても」

そんなサミュエルの本心を聞けて、スロは満足げに頷き、
濃紅銀ルビー・シル
鉦バの仲間たちも笑みを浮かべたのだった。

これから始まる魔術大会には正式な名称がある。

ランジエスター魔術学院選抜大会。

歴史ある大会であり、優秀な生徒が集まっている年代に、学園長や教師たちが話し合いの結果、開催するかどうかを決めるというシステムが少し珍しい大会である。

とはいえ、レベルが高いかと問われればそこまでではない。辛口なことを言えば、「所詮、学生レベル」という大会である。

だが、学生レベルとはいえど、この大会に出場できるということは成績、実力共に優秀であり、将来性があるということである。

それゆえに、多くの観客が見学に来る。ギルド関係者、騎士団、魔術事務所、ギルド、数えたらきりが無いほどだ。

「はい、ジュジュ。これがトーナメント表だよ」

メルル・ウエラーは闘技場の一角でジュジュ・ヴァレンティンと一緒に座っていた。

二人の手には、ポップコーンと飲み物と完全に観客モードだ。

「ありがとう。それにしても、この闘技場は初めて入りましたけど

……凄いですね」

「……うん。話には聞いていたけどビックリだよ」

二人が驚くのは無理がなかった。

ランジエスター学院にある闘技場は収容人数一五〇〇人以上というとても大規模である。

魔術学院の生徒がすべて収容できるほどである。

闘技場の中心には直径四〇メートルのリングがあり、観客席には高度な結界が張られているために観客の安全性も高い。

そのことから、ランジエスター王国が主催の戦闘大会が開かれたりする場合もここの競技場が使われる。

「あ、中等部の生徒はやっぱりでないんだね。代わりに……高等部と大学部で有名な人ばかりが出るね」

中等部の生徒が大会に出場できることは稀だ。

二人が在籍している中等部二年生の中にも候補に挙がっているのではと噂される生徒もいたが、所詮は噂だったようだ。

「ですが、やはりルード先生が優勝するんじゃないでしょうか？」
「うん、というか、絶対すると思うよ、ホラ」

メリルは観客席の一部に指を指すと、そこには「頑張れ、ルード先生！」と書かれた横断幕を持つ、サミュエルの担任するクラスの生徒たちだった。

既に一部の教師が流したことで、サミュエルの大会参加は知られている。そして、その原因も。

そのことに二人は作為的に情報を流した者に嫌悪感を抱いたが、それであれだけ魔術を使わずに、生徒に馬鹿にされても気にしていなかったサミュエルの今回の行動に納得ができた。

なんと「ルード先生らしい」と二人は声を揃えて言った。

そして、原因を作った生徒や、それを作為的に流す一部の教師に腹が立つ。

「隣、座るぞ」

思い出し、プリプリと怒っていた二人に男の声がかかり、メリルの隣に誰かがドサリと座った。

「貴方は……」

「スロ・シルバーマン」

驚きに声を震わせて、二人は呟く。
それに対してスロは相変わらずマイペースに「よう」と笑ってみせた。

「ゴメンね、二人とも。席、どこにしようかって言ってたら、スロが君たちを見つけちゃって。それで、どうせなら知り合いの所にしようってどんどんと行っちゃうから」

「あの、本当、に、すみません」

金髪をショートカットにした可愛らしい容姿を持ち、白衣を着た小柄な少女……の外見を持つヴィヴィアン・ウルツドと、魔術師らしいローブ着て、銀色の髪を隠すようにフードまで被っている女性ウェッチ・アンティルスは申し訳なさそうにメルルたちに頭を下げる。

二人としては、驚きはしたものの、迷惑だとは思ってはいない。というよりも、高位階段のスロたちと一緒にというのが階段を持たない二人にはなんだか申し訳ないような気分になってきてしまう。

メルルとジュジュを真ん中にして、メルル側にスロ、晴嵐、イザナが座り、ジュジュ側にヴィヴィアンとウェッチが座った。

「えっと、あの、これ良かったらどうぞ」

「お、すまんな」

「あら、ありがとう」

余分に貰っておいたトーナメント票をメルルは、スロとヴィヴィアンに渡す。

「ほう、今回の大会はサミーを入れて十六人が……」

「濃い試合が見れるんか、それとも十六人しか大会に出られるようなのがおらんかったかってことのどちらかか？」

トーナメント表を見て呟くスロに、イザナがぼやく。

正直言ってしまうと、学生レベルにはイザナは興味がない。そんな学生レベルにサミュエルが一週間の成果をどれだけ出すが楽し

みなのだ。

「ですが、数人聞いたことがある名前がありますよ。ローディ・ベイカー、チヨウ・オーレン、ニア・タイン、この三名はそろそろ二桁に届くのではと期待されている生徒ですね。階梯で言うてしまふと、イザナと同じですよ」

そう割り込むのは藍・晴嵐。ラン・セイラン灰色の髪を一つに結び、甘く整った容姿を持つ、極東の血を引く青年である。

晴嵐にそんなことを言われ、イザナは真っ赤な髪をグシャグシャといじると、フンッと鼻を鳴らす。

「それでも学生レベルじゃろう。階梯が必ず強さとは限らん！」

「ええ、ですが、階梯は優秀ですよ。だからあれだけ申請しておいたほうが良いと言ったのに……サミュエル君にも言われたでしょう、申請はこまめにと」

ギルド階梯は数字が二桁になると高位の魔術師、剣士などと世間から認知される。

ただし、二桁の壁はとても大きい。
大手のギルドや魔術事務所にさえ、十階梯を超える者はそう多くない。

それを考えると、実力は二桁に届いているイザナ、ヴィヴィアンとウェッチは十一階梯の魔術師、晴嵐は十四階梯ともう一段高みにいる。そして、十五階梯剣士であるスシルバーマン。

小規模のギルドでありながら、ここまで実力者だけで構成されているギルドはそうはないだろう。

「ねえ、あれって……ルカ・シュメールじゃない？」

男性人の会話には入らずに、観客席を見回していたヴィヴィアンがとある女性に気付く。

「ホンマか！ あの「緋色のシユメール」がおるんか？」

「ほら、あそこよ」

興奮するイザナにやれやれといった感じで、ヴィヴィアンは緋色の髪を持ち、同性でも羨ましいと思う恵まれた体格を持つ女性、ルカ・シユメール。

通り名の緋色に相応しい、その髪は長く、風を受けて炎のように揺れている。そして、彼女が所属するウェイカー魔術事務所の女性用の戦闘衣の腰に下げられた一本の刀。

「ルカ・シユメールは刀術師だ。確か……十四階梯だったか？」

「そう、です、ね」

スロの問いにウェッチが答える。

「じゃあ、隣にいる男がランドール・ウェイカーか……」

初めて見た、とスロは呟く。

ランドール・ウェイカーといえば、十四階梯の中でも有名であり優れた魔術師であると評判である。一見、戦闘衣を着ずに優男に見えるが、その実力は相当のものであり、彼を慕う者は多い。

温厚で、人格者でもあり、困っている人々を救いたいという目的で魔術事務所を設立したという話も聞くほどだ。

この国では上から数えた方が早い実力者であり、国からも仕事を請ける魔術事務所でもある。

「他にもいますよ。……数えだしたらキリがないですよ」

「これって、みんなスカウト目的？」

「でしようね、在学中に魔術事務所に就職になるので所属はできませんが、ギルドには可能です。優秀な人材にいち早く眼を着けて置きたいと思うのはどこも一緒でしょう。中堅から私たちのような小規模なギルドもいますね」

「少し、マズイな……」

「何がですか？」

「サミーの実力を見たら、スカウトが凄いだらう？」

「あ」

スロのそんな言葉に、ルビー・シルバー濃紅銀鉾の面々はしまったという顔をする。何だかんだで、彼等はもうサミュエルを仲間に引き入れたいのだ。彼が強いからではなく、サミュエルの人柄を気に入って。

たった一人の女性のために、被害者でもあり加害者でもあった女性のために文字通り体を張ったサミュエル。

たった一週間だが、濃厚な時間を過ごしたおかげで濃紅銀鉾くればー・シルバーのメンバーはサミュエルのことを結構知ることができた。

そして、スロの言い分ではないが、気に入ってしまったのだ。

「そりゃあ、困るのう……」

今回はしつこくし過ぎるのも良くないということで、いったん諦めはしたが……サミュエルに目をつけるだろう他の面々が彼に粉をかけるのは正直言っておもしろくない。

「でも、彼はギルドに入るつもりはないでしょう？ 教師一本でやっていきます、って言ってたから大丈夫じゃない。私だって、おもしろくはないけれど……」

ヴィヴィアンもそんなことを言う。

この大会でサミュエルが目を付けられることはわかりきっていた。大会で全力を出す、なんてことをしたら間違いなく死人がでるのでそんなことをしないが、彼の戦闘スタイルを目にすれば、本当に魔力を持つていないと言われても、それでもなお欲しいとおもうことは間違いはないだろう。

それほどの実力なのだ。

「……っフ」

「ど、どうか、しました、か？ スロ？」

突然、笑みを浮かべたスロにウェッチは不思議そうな表情を作る。

「いやなに、サミーを馬鹿にしていた生徒はさておき、生徒に便乗していた教師たちが大会後にどういった反応するのか楽しみだと思っただけだ」

それは確かに、と濃紅銀鉾くルビー・シルバーの面々だけではなく、話の聞こえていたメルルとジュジュもそう思った。

「頑張れよ、サミー」

一方、その頃。サミュエル・ルードは選手控え室にて生徒たちと共に大会開始時刻を待っていた。

生徒たちが怪訝そうな顔をしてサミュエルを見ているが、彼は気にせず知らぬ顔で体をほぐしている。

大会が始まるのは、学院長の挨拶が終わればすぐだ。

誰が試合形式を組んだかは知らないが、サミュエルは第一試合であり、いきなりだった。しかも相手は、高等部でもっともサミュエルを馬鹿にしている生徒の一人でもある。

だが、サミュエルは気にした様子もなく、体を解し終えたので、今度は持ってきた荷物から本を一冊取り出した。

椅子に座って、ページをめくったその瞬間。

「ナメてんのか、テメエ！」

ずっとサミュエルのことを睨みつけていた、一人の生徒が爆発した。

第一試合のサミュエルの相手である高等部二年生ゴード・デルーだ。短めの青い髪に、サミュエルほどではないが長身でいながら、体は鍛えられていて逞しさは一見するとサミュエルよりもあるように見える。

「何がですか、ゴード・デルー君？」

「馴れ馴れしく名前を呼ぶんじゃないやねえよ！」

バン、と音を立てて、ゴードは腕を振るってサミュエルの持っていた本を叩き落す。

そして踏みつけようとして、しかし、足が本に届くことはなかった。

「駄目ですよ、この本はサイザリス・ウォーレンの初版本ですよ？」

ゴードの足と床に落ちた本の間に右足を差し出している。

いや、差し出しているだけだった。だというのに、サミュエルの足はピクリとも動かない。

「……どうやら体術がずば抜けてるって噂だけは本当だったみたいだな、だが俺が魔術を使えば体術を使う前に死ぬぞ？」

「そうですか、それは怖いですね」

「……なんだったら、今ここで殺してやろうか？」

どうやらゴード・デルーは血気盛んなようですね、とサミュエルはため息を吐く。

さて、ここで魔術を使われては少々、面倒になります。と、そこまで思ったときだった。

「やめなさい！」

凜とした声が控え室に響いた。

声の主は灰色の髪を顎のあたりで短く揃えた、声どうように凜とした少女だった。

生真面目、という言葉が似合うだろう、背筋はピンと伸びているせいか平均的な身長も少し高く見える。

彼女の名は、ニア・タイン。高等部三年生だ。

とても優秀な生徒だとサミュエルですら知っているほどの生徒だ。実戦はもちろん、座学共に優秀であり、スカウトされたことも多いらしいが、彼女自身は大学部へ進み研究をしたいのだという話を聞いたことがある。

「テメエには関係ないだろうがっ！先輩だからって余裕ぶってんじゃねえよ、なんならこのカスみたいな教師より先にテメエをぶっ殺してやろうか？」

ゴードの言葉に、ニアは失笑する。
見下すような笑みだった。

もちろん、それにゴードが黙っている訳がなく、怒りを爆発させる。

「ぶっ殺してやるっ！」

同時に、ゴードの魔力が右手に集まっていく。

面倒なことになってきました、とサミュエルが溜息を吐く中、ニアを始めとする生徒たちは構えを取る。

だが、ゴードを含め、その場に居た全員が驚愕することになった。

「駄目ですよ、ゴード・デルー君。試合はもうすぐです、ここで魔力の無駄使いは得策じゃないですね」

サミュエルがゴードの右手を掴むと、集まった魔力が霧散したのだ。

「どうかしましたか？」

何もなかったように、そんなことを言うサミュエルに生徒たちは驚き動けない。

何故なら、サミュエルがやったことは、ゴードの魔力を同等の魔力で相殺したのだから。

少しでも魔力の強弱に誤差があれば、相殺できずにどちらかが怪我をする場合もある。つまり、魔術師の技術だ。

それを魔力がないと生徒や同僚に馬鹿にされ、暴力すら振るわれていたサミュエルがやってみせたのだ。そこから考えられることは、サミュエルに魔力があることだった。

「あれ？ 本当はどうしましたか？」

実は、解っていてワザと聞いているのだ。

驚くべきなのは、このサミュエルの態度が特訓の成果の一つであるのだ。

だが、その効果は抜群である。

魔力を持たず、生徒から暴力すら受ける教師、それがサミュエル・ルドだった。だが、それが違うのだと知ってしまった。

つまり、一切見抜くことができなかったのだ。

それだけで、サミュエルと生徒たちの差がどれほどか……考えるのは容易い。

固まる生徒たちを尻目に、あえてニコニコと笑みを作っているサミュエル。

こうして、特訓の成果は一つ成功したのだった。微妙な成果の一つであったが。

「第一試合のルド先生、デルー選手、お願いします！」

驚きに包まれた控え室に、大会運営役員が入ってくるのと同時に、止まっていた生徒が動き出す。

「あ、はい。では、行きましょう、ゴード・デルー君」

いつの間にか顔色が悪くなっているゴードに声を掛ける、サミュエルだが名前を呼ばれたゴードは体を一瞬だけビクリとさせると声を荒げた。

「は、ハハッ！ 上手く隠してたみたいけどな、だからってテーマが強い訳じゃない！ 試合で恥じかくんじゃねえぞ？」

「ご忠告ありがとうございます。なら、恥をかかない程度に頑張りますよ」

そう言って、サミュエルは笑みを浮かべたのだった。

14 「楽しかったですよ、とっても」(後書き)

最新話お届けします。

次回で本格的に大会が始まります！ 戦闘面でサミュエルがどう戦うのか？

その辺りを上手く書ければと思います。

ご意見、ご感想、アドバイス等、ご気軽によろしくお願いします。頂けるととても嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8542p/>

正しい魔術の使い方！

2011年11月14日04時47分発行